
魔闘少女リリカルマスターなのは

滝川剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔闘少女リリカルマスターなのは

【Nコード】

N3556P

【作者名】

滝川剛

【あらすじ】

戦いを終え、息をひきとった『東方不敗マスターアジア』ことシユウジ・クロスは、何故か翠屋次女『高町なのは』として生まれ変わった！！

魔法渦巻く世界で師匠は何を成す？

流派東方不敗が唸る！！

目指すはガンダム・ザ・じゃなく、エース・ザ・エース東西南北中
央不敗スーパーなのは？

すいません完全にネタでキャラ崩壊でギャグです。

超不定期更新ですがよろしく願いします。

無印編終了しました。

第1話 師匠転生すの巻（前書き）

血迷いました…

最初に謝っておきます。

どうもすいませんでした！

第1話 師匠転生すの巻

「流派！東方不敗は！」

「王者の風よ！」

「全新！」

「系列！」

「「天破侠乱！」」

「「見よ！東方は赤く燃えているう！」」

師匠と弟子の最期の掛け合いであった。
東方不敗マスターアジアは満足であった。

愛弟子である『ドモン・カッシュ』に抱かれ、赤く燃える東方の空の下、マスターアジアはその波乱の生涯を閉じた。

その顔は安らかであった…

温かい温もりの中、マスターアジアは目を覚ました。

此処は…

そうか……これが死後の世界と言うものか……

しかし…何と温かいものよ……

僕は今までの所業から地獄行きの筈だが……

その時マスターアジアの目の前に突如として、巨大な顔がずずい、とばかりに迫って来た。巨大な優しそうな女の顔だ。

（何だ！？この大きな女は！？）

マスターアジアは本能的に危機感を覚え、とっさに巨大な女から離れ様とするが、体が思うように動かない。

（…ぬう…死んだこの身では満足に動く事もままならぬのか…！？）

それでも動かぬ体を何とか動かそうとする。
その時マスターアジアは違和感を感じた。

（何とっ！？）

マスターの目に移ったものは、紅葉の様に小さな手。それは紛れも

なく赤子の手であつた。

(…これが儂の手だと……?)

その時マスターアジアの周りで、4人の人間が喋る声が聞こえて来た。大人の男女に子供の声。

「見て見て、やっと目が開いたわ」

「おう、可愛いなあ…なのは、父さんだぞお」

「私にも見せてよ」

「美由希あんまりハシャぐと、なのはがびっくりするだろう?」

(何だとおおおおおおっ!?)

マスターアジアは自分が赤ん坊になっているのに気付いて驚愕した。

東方不敗マスターアジア、元シャッフル同盟『キングオブハート』は何故か別世界の地球の、高町家次女『高町なのは』として再びこ

の世に生を受けたのである。

それもマスターアジアの記憶を持ったまま…マル

(…これも前世の悪行の報いか…)

マスターアジアは、もう観念するしかなかった。何故こうなったかは分からないが、もう高町なのはとしてやって行く他無さそうである。

赤ん坊の身ではどうしようも無い。

(…これも自然の摂理と言うものかの…正に輪廻転生なり！)

赤ちゃんでもやはりマスターアジアである。こんな時でも直ぐに持ち直した。

こうして元東方不敗マスターアジアこと、高町なのははこの世界で一からやり直す事を決意した。

マスターらしい器の大きさである。

細かい事を気にしていたら、素手でモバイルスーツは碎けないのだ。

そして9年の歳月が過ぎた。（早っ！）

まだ少し寒い春先の朝。ようやく暖かくなって来た朝日が眩しい、高町家の食卓である。

食卓で新聞を読んでいる洪めの中年男性は、高町家経営の喫茶店『翠屋』のマスターで、マスター…（あっ二回続いた）いや、高町なのは父親の士郎さんである。

そして朝食の支度に勤しんでいる、優しそうな綺麗な女性は、なのはの母親桃子さんだ。

喫茶翠屋のお菓子職人でもある。

「お腹空いたあ〜」

「何だ美由希、だらしないな…」

賑やかに入って来たのは、なのはの兄で士郎さん似の整った顔立ちの大学生の恭也兄さんと、姉で眼鏡っ娘の高校生、美由希姉さんである。

2人は自宅に有る道場で朝の鍛錬を終えて来た所だ。

高町家は代々剣術家の家系でもあるので、2人共鍛錬を欠かさないのである。

「あら？なのははまだかしら…？」

桃子母さんが今だ姿を見せない末娘を気にして聞いてみる。その時だった。

「おはようございます。父上、母上、兄上、姉上、今日も良い天気
で何よりです。ぬわっはっはっはっ！」

可愛らしい少女の声で、エラく時代錯誤と言っか、じいさんくさい挨拶が飛ぶ。はっきり言って、違和感有りまくりである。

食卓に現れたのは、白い学校の制服を着た小学生の可愛らしい少女であつた。

茶色がかつた髪をおさげにしたこの少女『高町なのは』こそ転生したマスターアジアが成長した姿である。

なのはの喋り方にはみんな慣れつこなのか、みんな普通に挨拶を返す。

「おはよう、なのは、今朝も早くから出ていたな、今日もジョギングかい？」

「左様です。朝の張り詰めた空気が心地良い…これも早起きのお陰でありますようや…」

士郎父さんに、しみじみと小学生とは思えないというか、朝のジョギングから戻った、元氣じいさんの様な返事をするのはであつた。声と喋り方が全く合っていない。

朝食を終え、なのはは鞆を持ち学校へと出掛ける。

一連の動きに無駄が無い。流れる様な動作だ。(どうでもいい駄情報ですね…)

「それでは、学業に行つて来るので、しばしの間、さらばっ！」

「行つてらっしゃい、車に気を付けるのよ」

「心配無用、母上！」

なのはは不敵に笑うと、おさげを揺らし物凄い速さで駆けて（何か走る足の動きが見えない）行つた。

なのはの後ろ姿を見送る桃子母さんは、

「…どうして…あんなおじいちゃんみたいな子に育っちゃったのかしら…？ やっぱり、あまり構ってあげられなかったせい…？」

と深くため息を吐いた。

小学校に入学したマスターアジアこと高町なのはは、その小学生とは思えない言動と、その堂々とした態度とで、着いたあだ名が、『爺さん少女』ともう一つ『師匠』であつたという…

つづく？

第1話 師匠転生の巻（後書き）

師匠ファンの方、なのはファンの方すいませんでした。

第2話 師匠学校に行くの巻（前書き）

さて…皆さん、何の因果か『高町なのは』として生まれ変わった『東方不敗マスターアジア』

彼女は这个世界で何を成そうというのでしょうか…？

今日のなのはの相手は、夜にさまよいし古より代を重ねて来た恐るべき魔人。

なのはは如何にして立ち向かうので、ありましようか？

それではリリカルファイト、レディーっゴっ！

（このナレーションは本編を200%大げさに言つたもので、ほぼ嘘ナレーションです！本気にはいけません！！）

第2話 師匠学校に行くの巻

朝の通学路である。

通勤の会社員や学生が行き交う中を、通学中の元東方不敗マスターアジアこと『高町なのは』は、疾風の如く駆け抜ける。

目にも停まらぬスピードで、人々の間をぬってすいすい進んでいた。もちろん腕組みしながらは基本で、朝から全力全開のなのはである。しかし学校とは正反対の様だが…

しばらく行った所で通学に使っているバスが前方からやって来た。

なのはは悪戯っぽい笑みを浮かべ、通り過ぎ様に走っているバスの上へと、ひらりと飛び乗った。

腕組みをしてバスの屋根に立ち、おさげ髪とスカートをなびかせながら、気持ち良そうに風に吹かれる。

(…ふふふ…こうしておると、風雲再起の背に乗って大地を駆けたのを思い出すわい…)

などと昔の愛馬を思い出し、感慨に浸りながら、小学生の小さな背

に哀愁を漂わせるのはであつた。

そのバスの最後尾席に、2人の少女が座っていた。

外国人を思わせる少女『アリサ・バニングス』と、同じく隣に座っている、大人しそうな少女『月村すずか』である。

何時ものバス停で、なのはが乗り込んで来ないのを見て、アリサはため息を吐く。

アリサは、おもむろにバスの窓を開けると、上に向かって叫んだ。

「なのは、あんたまた屋根に乗ってるわねっ、迷惑だから降りなさい！」

屋根の上で王者の風ならぬ、朝の風を楽しんでいたなのはは苦笑を浮かべた。

その様は孫にたしなめられる、おじいちゃんの様である。

なのはは次のバス停で屋根から降り、バスに乗り込んだ。

「まったく…あんたは、ロクな事をしないわね…」

隣に座るなのはに、アリサがさも呆れた様に言うが、口元が笑っている。

「おはよう、なのはちゃん…」

すずかが微笑んで挨拶する。なのはも笑って、

「うむ…アリサもすずかもおはよう、今日も良い天気で何よりだ」

「なのはは相変わらずじじくさいわね…」

気さくに話す3人。アリサとすずかは、なのはの友人である。小学1生の時にある事で仲良くなったのだ。

かたや前世も合わせると58才…かたや9才の少女達、3人は世代を超えて妙な友情で結ばれていた。

まあ師匠からすると、孫と遊んでいる感覚に近いかもしれないが。

アリサとすずかは、この異様なまでに頼りになる同級生に、良く懐いているのである。

私立聖祥大附属小学校。なのはが通う学校である。

そこで他の生徒に混じり、真面目に授業を受けるなのはの姿が有った。

師匠は元々教養も高く、本来なら授業を聞き流していてもいいのだが…

元居た世界より数百年は過去で、別の世界らしいこの地球は色々と興味深く、楽しんで授業を受けているのである。

表面上は普通を装っているが、全然隠しきれておらず、堂々とした風格と喋りで、クラスのみんなからは『なのは師匠』と慕われていた。

体育の授業…今日はドッジボールだ。その中で異様に気合いが入っている2人の少女が居た。

ご想像通り1人は、高町なのは師匠である。

もう1人は月村すずかだ。チームが別れた2人は、ニヤリと笑い合う。

「なのはちゃん、今日は負けないよっ」

普段大人しいすずかにしては珍しく意気込んでいる。

「ふふふ…ぬかしおるわ…すずかよ、全力で向かって来い、儂が受け止めてくれようぞ！」

体操着に着替えた師匠…なのはは、可愛い外見に似合わず、何時もの腕組みで不敵に笑う。
とっても偉そうであった。

ピーッ！

ゲーム開始の笛が鳴る。

その内の約2名がその瞬間叫んだ。

「行くぞすずかあっ！ドッジ・ファイトあっ！レディーっ！」

「ゴおおーっ！ー！」

その瞬間、コートは戦場と化した！

「うぎゃあああ〜っ！」

「きゃああ〜っ！」

「あべしっ！」

「ひでぶっ！」

悲鳴が上がる。約2名の投げ合うボールにより、あっという間にコート上の人数が減るといつか、吹っ飛ばされて行く。

「なのはちゃん、今日こそ、アウトにしてみせるよっ！」

その約2名の片割れ、すずかが人間とは思えないスピードで、コート内を駆けながら叫ぶ。

「ふははははっ！すずかよ、お前に儂が倒せるとでも思っているのか！？」

そしてもう1人の片割れ、なのはは腕組みをしながら、上半身のみ
の動きでボールをヒョイヒョイ避け高笑いする。

「ええいつ！」

すずかのスピードボールが、なのは側のチームに襲いかかる。
パッコーンと快音を響かせて、アウトになるなのはチームの同級生
達。

アウトになった同級生達はぶつかった跡をさすりながら、外野に着
く。

さすがに2人共、手加減をする位の良識は有った様だ。
下手すると、死人が出る勢いなので…良かった…

さて以前より遥かに劣るとはいえ、なのはと渡り合えるすずかだが…
実は彼女は特殊な一族の末裔で、常人を遥かに上回る身体能力を持
っているのだ。

以前はその事で悩んだ事も有ったのだが、人間の身で常識外れのな
のはを見て、

（私は思ってたより大した事無かったんだ！だってなのはちゃん凄
いし！）

とダイナミックな勘違いをして、今では普通に身体能力を発揮して

いる。

でもなのは師匠と人類と一緒にしない方がいいと思うが…

しかしすずかにしてみれば、自分が全力でぶつかっても、勝てるか分からない程の相手がいるのは嬉しいのだろう。

なのはと同じチームで、まだ生き残っていたアリサは、すずかの球をおでこにパッカーンと受けてしまった。

こぼれ球が上空に上がる。

「儂に任せておけいっ！アウトになぞ、させんっ！」

なのはが米つきバッタの様にピョーンと宙に飛び上がった。
何か5メートル位は軽く跳んでいる。

空中でボールを、ぐわしっとキャッチすると、素早くすずかを狙ってボールを投げつけた。

唸りを上げて飛ぶボール。すずかは微かに笑みを浮かべる。

（なのはちゃん手加減をしたね、でもそれが命取りだよ！）

すずかはボールの勢いに逆らわず、ふわりと右手で受け止め、力のベクトルを変えてやる。

相手の力をそっくりそのまま返してやるのだ。

更にすずか自身のパワーも上乘せし、まだ着地前のなのはに向かつて、手加減無しで投げつけた。

「でえええええいつ!!」

なのはピンチだ！ボールは、ドギョルルルツと擬音がぴったりな凄
い勢いで迫る。

「なのはちゃん、空中では何処にも逃げられないよ！私の勝ちだあ
ああっ!!」

すずかは拳を握り締め、勝利を確信し叫んだ。
何かキャラが変わっているというかノリが変！？
なのはに悪い意味での影響を受けてしまったらしい…

「甘いわあ！すずかあっ!!」

なのはが吼えた。その右手が黒い輝きを放つ。

『ダークネス・フィンガああっ!!』

闇色に輝く右手が、ズギヤギャン！とボールを見事に受け止めた。
摩擦熱で焦げた様な臭いが漂う。

「ふははははっ！ なっちゃんない… なっちゃんないぞ、 すすかあ
っ！！」

その時、高笑いするなのは右手のボールが、『ダークネスフィン
ガー』のパワーに耐えきれず、ボンッと破裂した。

破片が炎に包まれて、パラパラとコートに落ちる。

ピピッ！

その時、審判の先生の笛が鳴った。

「高町さん、アウト…」

「何とっ！？」

コートに着地（滞空時間どんだけ…？）したなのはは愕然とした顔
をする。

「ボールの破片が落ちたから、高町さんアウトね…？次はボールを破裂させない様につ」

何時もこんな光景を見慣れている先生は、至って普通になのはに注意した。

周りの同級生達も、「今日は師匠の負けかあゝ」「今日の賭け、俺の勝ちい給食のプリンもゝらい」などと慣れたものだ。

この世界もなかなか大からしい。

その中でなのは師匠…なのは右手を見つめ、

「…まだ気の制御が甘いのお…これでは人間に使ったら、頭がスイカの如く砕けてしまうわい…」

などと恐ろしい事を、ぶつぶつ呟いていた…

お願いだからまだ人には使わないで貰いたいものである。

そんななのはをくすりと笑って、すずかはアリサとなのはの元に歩いて行く。

（なのはちゃん、また強くなってるわね…あの頃よりもっと…）

すずかにはさっきのゲームでも、なのはが力をセーブしていたのが、
良く分かっていた。

あの頃…それは小学1年生の時、3人が仲良くなっただけのあ
る事件の事である…

という所で次回につづきます。

第2話 師匠学校に行くの巻（後書き）

皆さんお待ちかねえっ！（自分で言うのはかなり恥ずかしいです…
誰も待ってなかったらどうするのか…）

捕らわれの身のアリサとすずか。

その身に危機が迫った時、1人の偉そうな少女が現れるのです。

それでは次回『師匠爆発すの巻』にレディーっゴっ！！

第3話 師匠爆発すの巻（前書き）

嘘ナレーションです。本気にはいけません。

さて…皆さん…ごく普通の少女として、過ごす元マスターアジア
と高町なのは…

彼女がずずかとアリサの2人と絆を結んだ事件とは、いったい何
なのでしょう…？

今日のなのはの相手は、恐るべき悪魔の武装集団に、狂える血に飢
えた剣鬼…

彼らを前に、なのはの闘志は燃え上がるのです。

それではっ！リリカルファイト、レディーっゴォーっ！！

第3話 師匠爆発すの巻

小学1生の時だった。

海鳴市の郊外の廃棄された廃工場で『アリサ・バニングス』と『月村すずか』は両手両足を縛られて、コンクリートの床に転がされていた。

学校帰りに、アリサは黒づくめの男達に拉致され、車で此处まで連れて来られたのだ。

アリサの両親はやり手の実業家で、大金持ちであり敵が多い。

敵対勢力の誰かが依頼してアリサを誘拐させたらしい。

すずかは巻き添えを食ったのだ。たまたま帰るバスが同じで、運悪くアリサ誘拐に出くわし、口封じで連れて来られてしまったのだ。

人間離れした身体能力を持つすずかも、まだ小学1年で拳銃を突き付けられ、恐怖ですくんでしまった。

古びてガランとした工場の中で、今2人の前には数十人に及ぶ男達が、各自武器を持って警戒にあたっていた。

全員明らかに暴力のプロであり、隙の無い身のこなしをしている。

アリサのボディガード達に嗅ぎ付けられた時の用心であろう。

その中でリーダー格らしい男がアリサに近付き、

「恨むんなら親を恨む事だな…まずは、お前さんの耳を切り取って、家に送りつけてやるぜ…そうすりゃ、言う事を聞く気にもなるってもんだ…」

男は特に脅す口調でも無く、淡々とアリサに話し掛けるが、それがかえって恐ろしい。

アリサは内心恐ろしさで泣いてしまいそうだったが、プライドがそれを許さなかった。

恐怖を堪え、男を睨み付ける。しかしリーダー格の男はどこ吹く風だ。

「中田さん…こっちの餓鬼はどうしますか…？」

部下らしい男の一人が、怯えた目を向けるすずかを指した。
中田は酷薄そうな目ですずかを一別すると、

「…面倒だ…さっさと片付けて、山の中にも埋めて来い…」

部下の男は頷くと、懷から黒光りするオートマチックの拳銃を取り出し、すずかに銃口を向けた。

すずかは涙を浮かべ、懸命に体をよじる。

「…もが…もまがつ…！」

アリサは止めさせ様と必死でもがくが、手足を縛られてはどうしようも無い。

気が強く、傲慢な所の有るアリサだが、自分の巻き添えで、人が死ぬのは耐えられなかった。

「…嬢ちゃん…運が無かったな…」

男の指が引き金に掛かる。その時だった！

「待たんかつ！このたわけ者共があつ…！」

可愛らしい少女のじじくさい声が廃工場に響き渡った。

全員が一斉に、声のした方向を見る。

そこにはスクラップの上に、腕組みで立つ、制服を着たおさげの少女が立っていた。

もちろん『高町なのは』である。ドオオンッ！という擬音がぴったりな感じで、とっても偉そうだ。

「何だ？あの偉そうな餓鬼はっ！？」

「何か妙に迫力が有るぞっ！」

思わぬ珍入者に困惑する男達。

なのは偶然車で連れ去られるアリサ達を見かけ、追って来たのだ。
もちろん走って！

隙を見て助けようと思っていたが、すずかのピンチに飛び出して来たのだ。

一方アリサは、なのはの姿を見て啞然としていた。

（アイツ…じいさん少女高町なのは？何考えてんのよっ！今の状況判ってんの？頭おかしいんじゃないのっ！？）

アリサの心配を余所に、なのははぎろりと男達を睨み付け、

「幼子を拐かし…あまつさえ殺そうなどは…元悪党の儂が言う事では無いが…断じて許さん！貴様ら叩き潰してくれようっ！-！」

と偉そうな幼子は、何故か拳を交差させ、高らかに宣戦布告し一気に跳んだ。

その姿がバビュンツ！といった感じで空中に消え失せる。

「ばっ、馬鹿なっ！消えたっ！？」

ざわめく男達は辺りを見回す。

その時、アリサとすずかの前に居る男達の目の前に、高速移動して来たのはが現れた。

「儂は此処だあっ！！」

なのはは空中で、コマというか、ベイブレードの様に回転すると、その勢いで男達をぶっ飛ばした。

ペットボトルロケットみたいに、ピョピョーンとぶっ飛び、壁に突っ込む男達。

啞然とするアリサ達の前で、なのはは制服のリボンをシュルリと引き抜くと、目にも停まらぬ速さで一閃した。

「「！？」」

すると、アリサとすずかの縄が一度に切断される。

「…あんだ…」

何かすごく非常識なものを見た気がして、うまく言葉が出ないアリサに、なのはが怒鳴る。

「死にたくなければ、物陰に隠れておれいっ！」

アリサは、なのはのデカイ態度に一瞬ムカツとするが、それ所では無いと思い直し、近くのドラム缶の陰に走った。すずかも後に続く。

「この餓鬼、化け物か！？クソっ殺れえっ！！」

中田の怒号の元、男達は一斉に拳銃をなのはに向けた。

桃子母さんが見たら、失神必至の光景である。

パンツ！パンツ！パアンツ！という乾いた音を上げ、鉛の玉がなのはに襲いかかった。

しかしなのはは不敵に笑い、先ほどのリボンを螺旋を描く様に勢い良く振り回す。

何か長さが元より遥かに長い気がするが、突っ込んだら負けだっ！

きつと師匠の気の力に違いない！

「甘いわあっ！！」

なのはは襲い来る弾丸を、気を込めたりボンで全て叩き落とした。

その勢いで近場の男達を次々とリボンでなぎ倒す。
マスターアジアの得意技『マスタークロス』だ！

「うわあっ！何だこの餓鬼はっ！？」

非常識極まりない光景にびびる男達。
なのはは高らかに吼えた。

「雑魚共がっ！一気に叩き潰してくれるわあっ！！」

なのはは流派東方不敗の構えを素早くとる。

「超級う霸王っ電影弾っっ！！」

左手を構えるなのはの背後に稲妻が走った！？字も出た気がするが、

きつと目の錯覚に違いない…

なのはの体が埃を巻き上げながら、光って回転する何かに包まれていた。

（うわっ、何か頭だけ出てる！光るテルテル坊主！？）

アリサの心の中のツツコミはともかく、テルテ…じゃ無く、気の塊と化したなのはは叫んだ。

「でいやああああああああっ！！」

物凄い勢いで男達に突撃する。

あまりの光景に逃げまどう男達の中に、なのはは突っ込んだ。

（スットライークっ！）

思わずアリサとすずかが声を出したくなる程、男達はボーリングの玉に吹っ飛ばされるピンみたいに見事に宙に舞った。

光の玉と化したなのはは空中に舞い上がり、全身の気を解くと、流派東方不敗の構えをビシィッ！と空中で決める。

「爆発っ！！」

その瞬間、男達は体の何処かポンッと爆発し、一斉に倒れ込んだ。
(あっ死んでませんよ)

それを見ていたアリサとすずかは、

(な…何が爆発したんだろう…?)

と思ったが、ろくでもない説明を聞かされる気がしたので、スルーする事にした。

男達はどうやら全滅した様だ。

アリサとすずかは、死体みたいに倒れている男達の中に立つなのを見る。

すると、なのはがぐらりと傾いた。

「ちよっ…ちよつとあんた、どうしたのよ?」

アリサとすずかは、何とか体勢を直すなのはに駆け寄った。

怪我をした様子は無かったが、どこことなく辛そうである。なのはは苦笑いを浮かべ、

「ふふふ…6歳児には色々とまだ早かった様だな…母上に叱られてしまっわい…」

見るとリボンには、あちこち穴が開いている。マスタークロスもまだ不完全らしい。

「やるうじゃねえか…小娘えゝっ」

その時人を食った様な声が響いた。

見ると白鞘の刀を持った、鋭い目つきをした中年の男がゆらりと立っている。

妖気漂う剣鬼という形容がぴったりだ。

「離れておれ…」

なのははアリサとすずかを自分の周りから離し、男に構えをとる。

男は白鞘を抜いて、ぎらつく刃をなのはに向けた。

「小娘えゝ、妙な技を使うな？俺は若本流斬殺剣、穴子紀夫…俺の剣は弾丸より速いぞ…いざ、しょう…」

「ダあークネス・フィンガあーっ！！（実はただのアイアンクロ
ー）」

「あぎよべこげえっ!？」

穴子紀夫は、なのはのダークネス・フィンガー?を食らって、そのままコンクリートの床に叩きつけられた。床に亀裂が入る。

「お前は阿呆なのか…!?!さっさと掛かってこんかあっ!!」

そう吐き捨てるのはである。

「…やるな…ふぐ田君…」

訳の解らない言葉を残すと、穴子紀夫（46歳、独身）は動かなくなった。

（何しに出て来たんだこいつ…?）

とアリサとすずかは、心の中で突っ込まずにはいらなかった。

力を使い果たしたのか、なのははガックリと床に膝を着く。

アリサ達が再び駆け寄ろうとした時、倒れていた中田が起き上がり、拳銃をなのはの背に向けた。

まだ6歳当時のなのはは、まだ技のキレが甘かったのだ。

（撃たれるっ！）

そう思った時、2人の体は自然に動いていた。

アリサは、なのはの前に両手を広げて立ちふさがっていた。

すずかは超スピードでダッシュすると、中田に思いっきり体当たりをぶちかました。

「ええーいつ！」

小さな体にも係わらず、その一撃は強烈で中田は吹っ飛ばされた。すずかも勢い余って床に転がる。

しかし中田は何とか立ち上がり、すずかに拳銃を向けた。

「こっ、このクソ餓鬼あっ！！」

怒り狂う中田の拳銃が、一瞬で跳ね上げられた。

いつの間にか中田の前に、なのはが立っていたのである。

なのははにっこりとすずかとアリサに笑い掛け、

「よくぞ勇気を振り絞ったな幼子達よ…この高町なのは、感じ入ったぞ…！」

なのはは立ち尽くす中田にニンマリと笑い掛けた。

「ひっ…！」

恐怖でまっ青になる中田。

「でりゃああああっ…！」

なのはの強烈な蹴りが中田の腹に炸裂した。

その体は真上にすっ飛び、頭から天井にめり込んだ。

テルテル坊主みたいにプランプランぶら下がり、中田は気絶した。

「ふっ…」

ようやくなのはは戦闘態勢を解く。体の節々が痛い、まだまだ修行不足と感じた。

そこに、床に転がっていたすずかを起こして、アリサがやって来る。すずかに「あんたやるじゃないの…只のオドオドお嬢様かと思って

たのに」などと笑い掛けている。

なのはの前に来ると、まず、さすが、

「…ありがとう、なのはちゃん…凄いだね…」

もじもじしながらもぺこりと頭を下げた。アリサは決まりが悪そうだったが、気を取り直して、

「…おっ、お陰で助かったわよ…一応、礼は言っておくわっ」

そう強がってみるものの、アリサもすずかもカタカタ震えている。そんな2人をなのははガシツ！と抱きしめた。

「幼子達よっ！よくぞ恐怖に耐え抜いたな…もう泣いても良いのだぞっ！」

お前も幼子だろう！？とツツコミたかったが、何か安心感で思わず「うわ〜んっ」と大泣きしてしまうアリサとすずかであった。

こうしてお互い危機を乗り越えた者同士、なのは、アリサ、すずかの3人は、殆ど男の友情みたいなものを結んだのである。

後にアリサは言う。

「今まで、他人の言う事を聞いたりするのは、負けだと思ってたけど…なのは見てたら、そんな小さい事どうでも良くなったわ…世の中広いわねえ…」

と解脱したみたいに、しみじみ言っていたそうなの…

つづく

第3話 師匠爆発すの巻（後書き）

皆さんお待ちかねえっ！

言い忘れていましたが、予告も200%大げさな嘘予告です。

なのはを悩ます謎の声の主とは？

街を死の影が包み、恐ろしい事件が起こります。

そして、赤い宝石を付けた獣と出会った時、なのはは果てしない戦いの道へと誘われるのです。

次回魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠調理法で悩むの巻』にレディーっゴォーっ！！

第4話 師匠調理法で悩むの巻（前書き）

このアホ作品を読んでいただき誠にありがとうございます。

前回のサザエさんネタを突っ込まれなくて、少し寂しい今日この頃です。

第4話 師匠調理法で悩むの巻

「破あつ!!」

早朝、人気の無い神社跡にやかま…凄まじくも可愛らしい叫び声が響いた。

元マスターアジアこと、高町なのはである。

只今朝の修行の真っ最中だ。

家族に言っている、朝のジョギングなどという生易しいものではないのは、皆さんご想像の通りである。

ある意味、マスターアジアの記憶を持った少女に過ぎないのは、1から鍛え直す必要があると考え、ずっと修行を続けて来たのだ。

まずは軽く準備運動で、正拳突き100000回だ！

ものすごい突きの嵐、突きというより、マシンガンの連射みたいになっている。拳の形をした…

そして家族が見たら、間違いなく卒倒する、流派東方不敗の凄まじい修行に今日も励むのである。

（ふふふ…生まれ変わっても修行とは…儂も根っからの武道家よのお…）

木々の間をお猿さんみたいに飛び回り、大岩を蹴り一閃で碎きながら、なのはは楽しそうに笑う。

端で見ていると、小学生の少女が笑いながら、とんでもない事をしているの、とってもシュールな光景である。

それでもなのはには、納得が行かないらしい。

（ぬう…以前の儂に比べれば、まだまだ…今はせいぜい銃弾を弾き、大岩を碎くのが関の山…これでは『石破天驚拳』もまだ撃てんわ…」

それでも充分人類を超えている気が…

なのは師匠はこの平和な日本で、何を目指しているのだろうか？

こんな感じで、今日も朝から全力全開のなのはであったが、少し元気が無いらしい（どこが？）

「…どうも昨日は夢見が悪かったわい…」

などと呟いている。

『乱にあっても平常心を忘れず』

たとえ何億ものデスアーミーの大群に囲まれようと、朝までぐっすりのなのはにしては珍しい事であった。

「まあ…良いか…」

なのはは特に気にもせず朝の修行を終え、30キロばかりの道のりを、走って家に帰った。

放課後、なのはは塾に行くアリサとすずかと別れ（さすがになのはに塾は必要ないでしょう）走って家に帰ろうと、足を踏み出す。その時だった。

《…助けて……》

なのはの頭の中に、弱々しい声が響いた。

（ぬう…これは面妖な…？）

なのはは辺りを見回した。声はどうやら公園の方から聞こえて来た気がする。

好奇心に駆られ、そちらに向かって走った。
公園に入り、木々が生い茂る林道に足を踏み入れる。

見ると道の真ん中に、何かが倒れていた。
それはフェレットによく似た小動物だった。
首に紅い宝石みたいな丸い石を付け、怪我をしている。

（むづ…？）

なのはは訝しげな顔で、その生き物を見つめた。

そのフェレットに似た生き物、違う世界では『ユーノ』と呼ばれている彼は人の気配を感じ、目を開けた。

（…僕の声が聞こえた人が居たのか…？）

ユーノの視線の先には、茶色がかった髪をおさげにした、可愛らしい少女が居た。

ユーノは少女に首筋を掴まれぶら下げられる。

(…ああ…助かった…)

ユーノがそう胸をなで下ろした時、少女のユーノを見る目がとてつもなく怪しくなった。

そしてその可愛い少女はイヤゝな笑いを浮かべ、

「ふふふ…うまそうなイタチよのう…久々にギアナ高地を思い出して、野生味あふれる丸焼きと洒落込もうか…前に母上に叱られて以来、なかなか口にできなんだ…」

(はいいいいっ!?)

ユーノは自分の耳を疑った。そんなユーノにお構い無しに、なのは難しい表情をし、

「いや…待てよ…その前に臭みを取らんといかんかったか…?とりあえず毛皮を丁重に剥いで、果物と一緒に土の中に一週間程埋めるか…煙で燻して燻製に…」

こと細かいリアルな調理プランに、ユーノは震え上がった。

このままでは食べられてしまう!エライ人間に拾われてしまったらしい。

彼は最後の力を振り絞ってなのはに語り掛けた。

《や…止めて下さい！僕死んでませんからっ、食べないでえっ！》

そこまで言った所でユーノは傷の痛みと疲労で気を失った。

「何と…？このイタチ、口を訊きおった！？」

ふにやっと気を失ったユーノを見て、なのはは驚いたが、直ぐにニヤリと笑い。

（ふふふ…面白い…喋るイタチか…この世界もなかなか不思議な事が有るとみえる…）

なのははユーノを抱えると、少し残念そうに舌打ちし（食べたかったらしい…）歩き出した。

夕食時の高町家の食卓である。

桃子母さんの自慢の料理を前に、家族全員が席に着いていた。

そこで士郎父さんが叫んでいる。

「うおおおおっ！なのはが、初めて子供らしいお願いをつー！」

士郎父さんは感動のあまり涙を流していた。

他のみんなも、ほっこり顔をしている。（なのはを除く）

何でこうなったかと言うと、あの後なのははフェレット（ユーノ）を動物病院に連れて行き、一晩預ける事になった。

そして夕食の席で、フェレットをしばらく家で預かれないかとお願いしたのだ。

なのはは普段あんな感じなので、おねだりもワガママも言った事が無い。

それで士郎父さんは感涙し、桃子母さんも、恭也兄さんも、美由希姉さんも感激して二つ返事でOKを貰ったのである。

家族の予想以上の反応に、少々引いてしまうのはであった。

部屋に戻ったのはは、ふう…とひと息吐いた。

ちなみに部屋は渋好みのシンプルな部屋である。

しかし、あちこちに可愛い物好きの桃子母さんに、無理やり押し付けられたぬいぐるみや、小物類に侵食されつつあった。

（やれやれ…あちらは明日にするとして…風呂の前の修行に行くとするか…）

そう思い、抜け出す用意をしようとしたその時、妙な感覚とキーンという耳障りな音が、なのはを襲った。

《…聞こえますか…？僕の声が聞こえますか…？》

直接頭の中に響いて来る声、気のせいとおっかなびっくりな気がした。

なのはは思い当たる。

（これは…昨日の夢や昼間の声と同じものじゃな？あのフェレットが喋っておるのか…？）

なのはは冷静に状況を分析する。声は更に続けて、

《聞いて下さい…僕の声が聞こえるあなた…お願いです…僕に力を貸して下さい！時間が…危険がもう…！でも食べな…》

そこで声はぷつりと聞こえなくなった。最後はきつと、食べるのは勘弁して下さいと言いたかったのだろう…

昼間の事は相当、トラウマになったらしい。

なのはは戦闘的な笑みを浮かべて、

「面白い…！」

そう呟くと、抜け出し用に隠しておいた靴を履き、窓から外におさげを揺らして飛び出す。

（ふはははっ！待っておれっ！！）

なのはは、民家の屋根を音も無くぴょんぴょん飛び回り、凄まじい速さで動物病院へと向かった。

う
う
く

第4話 師匠調理法で悩むの巻（後書き）

本当は戦闘まで持って行きたかったのですが、長くなるので次回と分けます。

最低でも明後日には投稿しますので。

しかし気付いたのですが、なのはで爺さん喋りだと、刀語のところがめでは？と思う今日この頃です。

嘘予告です。

みなさんお待ちかねっ！

なのはを襲う恐るべき異形の怪物、危機に陥るなのはに、ユーノが与える新たな力とは？

なのはの身に起こる一大変化とは！？

戦い嵐を前になのはの闘志は燃え上がるのです！

魔闘少女リリカルマスターなのは

『師匠びっくりするの巻』にレディ〜っゴォーっ！！

第5話 師匠びつくりするの巻（前書き）

嘘ナレーションです。

さて…みなさん…なのはが会った、小動物ユーノはいつたい何者なんでしょうか？

謎が謎を呼びます…恐ろしい事の前触れなんでしょうか？

今日のなのはの相手は、別世界からの恐るべき異形の怪物。

絶対絶命の危機に、ユーノはなのはに新たな力を授けるのです。

それではリリカルファイト、レディっつ、ゴォーっ！！

第5話 師匠びっくりするの巻

その時ユーノは、危機に陥っていた。

動物病院で治療を受け、ゲージの中に居たユーノをいきなり襲撃する黒い影。

無人の病院の壁をぶち抜いて、真っ赤に爛々と光る目を持った得体の知れない怪物がユーノを狙って来たのだ。

かろうじてゲージからの脱出に成功したユーノは外に逃げ出す。

怪物は壁の破片を撒き散らし、不気味な唸り声を上げながら、弾丸じみた動きで小さな影を追う。

追いつかれる！ユーノがそう思ったその時だった。

「はあっ！！」

ユーノの直ぐ横に、天から人が降り立った。ユーノはびっくりしてその人物を見上げる。

「ふふふ…何やら、厄介な事になっておるようだな…」

そこに腕組みをして、偉そうに立っているのは『高町なのは』であつた。

その時、怪物が2人目掛けて突っ込んで来る。

なのははとっさにユーノの首筋をひっ掴み、素速く横に跳んだ。あまりのスピードに、ぐえっと声を洩らすユーノ。

怪物は庭の大木をなぎ倒し、地面に突っ込む。木の破片が飛び、土煙がもうもうと上がった、凄まじい力だ。

油断なく様子を伺うなのはにぶら下げられたユーノは、

「来てくれたんだ…」

と不敵な表情を浮かべるなのはを見上げた。

「ふふふ…やはり喋っておったのは、お前であつたか」

なのははユーノを離してやるが、サッパリ驚いて無いみたいである。

これしきの事で驚く元マスターアジアでは無いのだ。

そうしている内に怪物が二本の触手をワサワサと蠢かせ、動き出そうとする。ユーノは慌てて、

「いったん逃げよう！」

「馬鹿者があつ！！武道家たる者、敵に背中を見せるなど自ら負けを認める事ぞつ！！！」

クワツ！とばかりに、なのはに怒鳴られてしまった。
何なんだこの子は？と思いながらも、

「だったら僕の力を使って、君には資質が有る、これを……」

ユーノは首輪に付いている赤い宝石をくわえて、なのはに渡した。

「温かい……資質……？力だと……？」

なのはは宝石を見つめて眉をひそめる。ユーノは頷いて、

「そう……僕の力を……魔法の力を！」

「ふはははっ！この儂に力を貸すとぬかしおるかつ？しかも魔法とな？面白い、どうすれば良い？」

豪快に笑うのは、何か興味が湧いたらしい。口調に面白いがる調子がある。

「じゃあ、それを手にして目を閉じて、心を澄ませて、僕の言う通り繰り返して」

「うむ…」

なのはは宝石を握りしめ、目を閉じた。何か楽しそうである。

「行くよ…我、使命を受けし者なり…契約の元、力を解き放て…」

「我、使命を受けし者なり…契約の元、力を解き放て…」

なのはもその通り続ける。手の中の宝石がドクンツと脈打った。ユーノは更に続ける。

「風は空に、星は天に…そして不屈の心は、この胸に…」

「風は空に、星は天破侠乱!!」

(あれ…?)

「見よっ！東方は赤く燃えているうっ！！レイジング・ハート、セットアップ!!」

(あれえええっ！？何か途中でおかしくなっていないかあ!?)

途中で思いつ切り、つられてしまったユーノは焦った。これでは起動しないのでは？と…その時、

《Stand by・ready・Set・up》

なのはの持つ赤い宝石から女性の声が響いた。

何故か成功したらしい。その時強烈な光の柱が天を貫いた。
なのはの手の中で宝石が眩い光を放っている。

「何て魔力だ…」

ユーノはなのはの魔法の潜在能力を、魔法光の強さから知り戦慄した。

不思議そうに光を見ているなのはに、

「落ち着い…てはいるみたいだね…イメージして、君の魔法を制御する魔法の杖の姿を、君の身を守る強い衣服の姿を！」

「ふむ…力の制御に衣服だな…」

なのはは頭の中にイメージを浮かべた。

「よしっ！これだあっ！はああああっ！！」

その瞬間、なのはの体は凄まじい雷状の桃色の光に包まれた。

（あれええっ？おかしいなあ…もっと幻想的なものだった筈だけど…？）

ユーノの感想をよそに、とっても漢らしい雷の中、知能を持った『

インテエリジエンス・デバイス』『レイジング・ハート』は形を変えて行く。

『マスターガンダム』の腕を思わせる、金色の籠手として、なのはの右手に装着された。

（杖でも何でも無いっ！？）

ユーノのツツコミは置いといて、なのはの服が、魔法で精製された防護服『バリアジャケット』に変換されて行く。

紫色の上着に腰に巻かれた白い布。

その姿はマスターアジアとして戦っていた時の衣服を思わせる物だ。肩口が膨らんでいたり、あちこち装飾が付いて、少々ゴージャスっぽいのが、明らかにマスターアジアの着ていた服をイメージしたものだった。

思わず流派東方不敗の構えをビシッ！決めるなのはである。

「成功だ…」

なのはの変身した姿を満足そうに見上げるユーノ。しかしなのはは…

「な…何じゃこれはあああっ！！！？？」

驚愕して思わず叫ぶなのは。ユーノは焦って、落ち着かせようと声を掛ける。

「大丈夫だよ、マスター認証は成功したんだ。驚くのも無理ないけど…これが魔法の…」

「何故下がスカートになっておるのだあつ!!??」

「はい…?」

ユーノは訳分からんといった感じに小さな首を捻る。

なのはの姿を良く身ると、一見マスターアジアっぽい衣装だが、下がスカート仕様になっていた。(しかも、あんまり裾が長くない!)

「何と言つ事だっ!母上の侵食率がここまでとは!」

なのはは、今までの桃子母さんとのやり取りを思い出して、ガックリ来た。

可愛いもの大好きの桃子母さん。

嫌がるなのはに、小さな頃からスカートやらを「こっちの方が可愛いわあゝっ」などと、無理やり着せられ続けたせいで、一部刷り込まれてしまったらしい。

そうこうしている内に、怪物が戦闘態勢を整え、上空に飛び上がった。

一気になのはとユーノ目掛けて落ちて来る。まるで巨大な鉄球のようだ。

「来ます！」

ユーノは、目の前で『デビルガンダム』を破壊された時みたいに、茫然としている（儼のデビ…いや、戦闘服が…とか何とか呟いてます）なのはに向かって叫んだ。

怪物が1人と1匹目掛けて突進する！

「破あつ！！！」

しかしなのはの強烈極まりない蹴りが、カウンターで怪物に炸裂した。

怪物は爆発した様に飛び散って、周りの塀や電柱に散弾の如く突き

刺さり、周りを穴だらけにする。

電柱がへし折れ、塀に倒れ込み、周りは酷い有り様になった。
そんな中でユーノは啞然としていた。

（ええええっ！？今、魔法使ってないよねえっ！？）

ユーノの驚きをよそに、なのはは腕組みをして、何でもないように立っている。やっぱり偉そうだが…

「…まったく…9年も女子として過ごすと、色々と染まってしまうのう…」

ちよつとため息を吐くのはである。

その目線の先で、バラバラになった怪物がみるみるうちに元の姿に集まって行く。

2人の目の前で再び、元の姿に戻った怪物は唸り声を上げ、体に生えている触手を弾丸の様に繰り出して来た。それを見たユーノは、

「攻撃や防御の基本魔法は心に念じるだけで発動します！より大きな力を使うには…！」

「ふはははははっ！遅いわっ！！なっちゃいないぞっ！！！！」

ユーノは他にも思念体だとか、完全停止させるには魔法を使わないと、とか言おうとしたが、なのは彼の言葉を全っ然、聞いていない。

腕組みをしながら上半身のみの動きで楽々と攻撃を避け（目も瞑っております）一気に宙に飛び上がった。

腰に巻かれていた白い布をシュルリと解く、布が生き物の様に螺旋を描いた。

「雑魚があっ！ぬあああっ！！」

怪物の体が桃色の光の帯にがんじがらめにされる。

怪物は不気味な吠え声を辺りに響かせもがくが、びくともしないらしい。

それは魔法の拘束『バインド』？と思ったら『マスタークロス』だった。

マスタークロスが怪物の体をギリギリと締め付ける。

「ふははははっ！とどめだあっ！ダああークネス…！」

怪物に向かって突撃するなのはの右手が闇色の光を放った。

「フィンガあああーっ！……！」

怪物の顔部分になのはの右手が、砕け散れえいっ！とばかりに叩き込まれ、闇色の光がスパークした。

「爆うつ発っ！……！」

なのはの気合い一閃と共に、怪物は光の粒子となり、跡形も無く崩れ去った。

地面にすたつと着地したなのははフウ……と息を吐くと、一言言った。

「何か……魔法とは……何時もと大して変わらんのう……」

「いや！それ魔法でも何でもありませんからっ！！あんた本当に人間ですかああっ！……！！……？……？」

ユーノの絶叫に近いツツコミの声が辺りに響き渡ったという。

つづく

第5話 師匠びつくりするの巻（後書き）

なのはのバリアジャケットは、私の趣味じゃありませんよ…？ゲフンゲフン…

それでは嘘予告を

みなさんお待ちかねえっ！ 吹っ切りました。

魔法を手に入れたなのははユーノと共に、恐るべき怪物達に戦いを挑むのです。

出るか？必殺の一撃！そして、海鳴の地に降り立つ謎の影とは何なのでしょう！？

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠探し物をするの巻』に、レディっつ、ゴォーっ！！

第6話 師匠探し物をするの巻（前書き）

さて…皆さん…ガンダム〇ースに載っている島本和彦大先生のGガンダムは面白いです！

その中で東方不敗師匠が迷子になった少年ドモンに言っていた言葉です。（うる覚え）

「道は迷うものではない、お前の進む道が道なのだ！」

「言ってる事はめちゃくちゃだが、妙に説得力が有る！」

下がドモンの感想でした。

それでは、リリカルファイトレディイーツ、ゴオオオウウウーツ
！！

第6話 師匠探し物をするの巻

場面は前回のユーノのツツコミ直後である。

人生の不条理を目の当たりにして、何か疲れたユーノは、ぐったりと路上に座り込んだ。

なのはは満足げに腕組みをして、怪物が消えた場所を見下ろしている。

ユーノは混乱しまくっていた。

さっきの怪物は、暴走した思念体で、魔法を使わなければ、止めるのは不可能の筈なのに、目の前の少女は力ずくで消し去ってしまったからである。

まあ…DG細胞をもその強靱な意思で支配していた、元マスターのなのはなら、気合いで何とかしたとでも思っただろう…
考えても無駄な気がします。

「むっ…?」

その時なのはの目に、何か光る物が映った。青く輝く宝石らしい物だ。

何気なく拾おうと手を伸ばすのはを見て、ユーノはびっくりした。

「駄目だよ！素手で触ったら！」

言ってる間になのはは、むんずと宝石を掴んでいた。

「わあああつ！だから素手で触わっちゃ駄目だつて！」

慌てるユーノの目の前で、なのはは不敵に笑い、

「心配無用！これが災いの元かつ！ダああークネス、フィンガあああーっ！！」

なのはの手が闇色に輝くと、青い石は粉々に砕け散ってしまった。

「ぎゃあああああああああああああああつ！！？」

『ユーノ・スクライア』は真つ青になって、殺される直前みたいな悲鳴を上げた。

なのはは腕組みでニヤリと笑い、

「ふん…、何かは知らんが、儂に戦いを挑もうとは片腹痛いわ！！」

「ななななななっ、何て事してくれてんですか！？あんたはあああ

あっ……!!」

ユーノはもう涙目と言つか……涙で景色が良く見えない状態である。

ジュエルシードを素手で粉々にするなんて、どこの化け物だと戦慄した。

「何か……まずかったかの……？」

「まずかったも何も……僕はその『ジュエルシード』を集めに来たんですよ！壊しちゃってどーすんですかあっ！？ってアンタ何で破壊出来るんですかあっ！？」

もう半泣きのユーノは抗議の声を上げた。

「それは済まなんだ……この高町なのはが謝るっ……!!」

腕組みをしたなのはは、ちっとも悪びれない態度で、とっても偉そうに謝るのであった。

本人はちゃんと謝っているつもりらしい……

――――
さてあの後、メチャクチャになった病院前から、トンズラかましたのは、ユーノを連れて家へ帰っていた。

ユーノの事を黙っている訳にもいかないので、あえて玄関から入り、当然夜の外出を少々怒られたが仕方がない。

もともとユーノが可愛いのと、珍しいのはの我が儘で家族は甘かったが…

可愛いもの大好き桃子母さんは悶絶し、みんなにもみくちやにされて、グッタリしたユーノをぶら下げて、なのはは部屋に戻った。

（ふふふ…何やら面白くなって来たのう…）

何か色んな意味で疲れてグッタリのユーノをぶら下げながら、なのはは不敵に笑う。

「そつえば…お前の名を聞いておらんかったな、儂は『高町なのは』前世の記憶を持つ、ごく普通の小学3年生だ」

なのはの自己紹介に色々ツツコミたかったユーノだが、何か疲れたので、とりあえず名乗る。

「…スクライアは部族名だから…ユーノが名前です…」

「そうかユーノか…よろしく頼むぞ、儂の事はなのはで構わん、この高町なのはが許す！」

と、どこまでも偉そうなのはであった。

――――

さて次の日…なのはは学校の授業を受けつつ、自分の部屋に居るユーノから、大体の事情を聞いていた。

身に付けている『レイジング・ハート』を補助に思念通話なるもので、頭の中で話せるので便利である。

やっと魔法が役に立ってホッとするユーノであった。

《ほお…ユーノは別の世界からやって来た魔法使いで『ジュエルシード』なる魔法の石を探して、この世界にやって来たのだな…？》

《そうなんだ…あれを掘り出してしまったのは僕だから…》

《ふむ…『ジュエルシード』は願いを叶えてくれる魔法の石とは名ばかり、まともに願いを叶えた試しも無い、役立たずの危険なだけの代物なのだな…?》

《身も蓋もないけど…その通りだよ…》

なのはは難しい顔をして、ノートをとりながら、

《そんな物が21個、搬送中の事故で、この辺りに散らばりおったのか…》

《うん…この世界には迷惑な話だけど…》

《掘り出してしまったユーノは、己が手でヘマを償おうとやって来て、2個集めた所で無様に返り討ちに逢い、惨めにも儂に助けを求めたのだな…》

《…本っ当に身も蓋もない言い方だけど…その通りだよ…》

話を一通り聞いたなのはは、頼もしく微笑み、

《そういう事ならば…この高町なのはは力を貸してやろう！己が手で

不始末にケリを着けようとは気に入ったぞ!」

《…僕の魔力が戻るだけの間だけでいいんです…》

ユーノは、昨日のトラウマが抜けきっておらず、力無く頷いた。

なのはがジュエルシードモンスターを倒してくれたので（ついでにジュエルシードも壊してくれたが…）残った魔力で怪我を直す事は出来た。

しかし魔力が回復するまではもう少しかかるのでその間、協力してくれるのは有り難いが…

なのはは目を閉じて笑い、

《ふ…儂がジュエルシードを壊してしまったからのう…償いをせねばな……》

《…まったくだよ…なのはは本当に人間なのかい…?》

《儂はごく普通の小学3年生だと言っておろうが…しかし、よい修行になりそうだ。怪物相手なら遠慮なく『流派東方不敗』を使えるというものよ、うわっはっはっはっはっはっ!」

《…そうなんだ…》

ユーノはなのはの高笑いを聞いて、人生に疲れたおっさんみたいにため息を吐いた。

学校も終わり、アリサ達と別れたなのは、ユーノと念話で話しながら、物凄いスピードで街中を走っていた。

何故なら、ジュエルシードが発動したらしい反応を捉えたからである。

ユーノとは現場前で合流した。そこは近所の高台に在る神社である。

なのははユーノを肩に乗せ、凄まじいスピードで神社の長い石段を一気に駆け上がった。

途中で面倒くさくなったのか、一気に飛び上がる。振り落とされそうになるユーノ。

「あれかつ!？」

石段の天辺にズザザアツと着地したなのは。赤い鳥居の向こうに、異形の姿があつた。

寅よりも遙かに大きい体。あちこちに牙が突き出し、目が複数ある四つ足の犬みたいな怪物だ。

なのはの肩から降りたユーノは怪物を見て、

「他の生物を取り込んでいる…実体がある分手強くなってる！」

「大丈夫だ！任せておけえっ！！」

なのはは流派東方不敗の構えをとった。ユーノはなのはを見上げ、

「起動のパスワードを！」

「うむっ！流派東方は！王者の風よっ！！」

「最初っから違っっ！？」

ユーノが思わずツッコんだ時だった。

《Standby, ready setup》

何でか『レイジング・ハート』が起動した。

桃色の雷に包まれると、レイジング・ハートが籠手として装着され、見る間に紫色の『バリアジャケット』が、なのはの体を覆う。

（パスワードは全っ然違うのにレイジング・ハートを起動させた？間違いない、この子凄い才能を持ってる！）

「ぬああああっ！！」

突進して来る怪物に、なのはの強烈な蹴りが炸裂し、怪物の巨体がりりもみ回転して吹っ飛んだ。

（…持つてるだけで、全っ然、使ってないけど…）

ユーノはなのはの非常識な戦いっぷりを見て、ため息を吐いた。

そうしている内に、なのはは右手のひらを前に繰り出し、円を描いた。

その前に梵字が曼陀羅^{まんだら}の様に浮かぶ。

「試してみるか！『秘技！十二王方牌、大車 併いっ！！』」

「うわあっ！？何だあああっ！？」

ユーノがビツクリして声を上げる。

何かなのはから、沢山の『小さいなのは』が現れ、ミサイルみたいに勢い良く怪物に激突し、体を撃ち抜いた。

悲鳴を上げて消え去る怪物。

「『帰山笑紅塵っ！！』」

なのはの掛け声と共に、怪物を粉碎した『小さいなのは達』が、なのは本人に（クドイ…）戻って行く。

怪物は消滅し、そこにはクンクン鳴いている子犬の姿と、青く輝く『ジュエルシード』があった。

（良かった… 壊れてない…）

ユーノは『ジュエルシード』の無事を確認して、胸を撫で下ろした。

何か非常識な技なので、また壊されたら…と心配だったのである。

「うむ… 十二王方牌大車併、成功だ…！」

なのはは腕組みで満足そうに呟いた。
石畳に立つユーノをヒョイとつまみ上げ、

「よしユーノよ、この調子で全て集めてくれようぞ！」

「お手柔らかにお願いするよ…」

ユーノはぶら下げられながら、引きつった顔で頭をピョコンと下げた。

この日からなのはの『ジュエルシード』集めが始まったのである。

それからのなのはは、空いている時間や夜を利用して『ジュエルシード』集めに駆け回った。

今日も夜に家を抜け出して、学校に潜んでいた『ジュエルシードモンスター』を文字通り叩き潰して来た所だ。（ダークネスフィング―で…）

夜の街を腕組みして、屋根から屋根へと跳び移り、自宅へ向かうのはである。

連日の探索に励むなのはの体を気にし、肩にしがみついているユーノは、

「なのは疲れてないかい…？」

「たわけ…儂がこの程度で参るような鍛え方をしておる訳がなからうが…うわっはっはっ…！」

ユーノの心配を吹き飛ばすように、全く堪えてないなのは、豪快に笑う。今日も全力全開である。

これで計4個の『ジュエルシード』集めに成功していた。

――――――――――

それで次の日の日曜日…

なのはとユーノは、人気の無いビルの屋上に立って、街を啞然と見下ろしていた。

見下ろす街並みがえらい有り様になっている。

馬鹿でかい大樹が市街地を呑み込んで生えており、街はジャングルに覆われたみたいになっていた。

「…これはまた…豪快な事になっておるのう…」

バリアジャケット姿のなのはは腕組みをしながら、感心した様に呟いた。

「多分、人間が発動させちゃったんだ…強い思いを持った者が、願いを込めて発動させた時『ジュエルシード』は一番強い力を発揮する…」

なのはの隣で深刻そうに呟くユーノ。

なのは達は朝から、探索に出ていた。

今日は士郎父さんがオーナーをしている、サッカーチームの試合の日だったのだが、別に興味も無いなのはは『ジュエルシード』集めを優先して出て来たのだ。（士郎父さんは凹んでいたという…）

そんな時に街中で反応が有ったので、駆けつけると、この有り様だ

ったのである。

「ユーノよ…このような時はどうすれば良い…？　まだ『石破天驚拳』が撃てぬ儂では、さすがにアレを吹き飛ばすのは無理…」

じゃあいずれは、吹き飛ばせる様になるのか…と空恐ろしくなるユーノだが、敢えて考えない事にし、

「封印には、接近しないと駄目だ…元となっている部分を見つけないと…でも…これだけ広い範囲に伝わっちゃうと、どうやって探したら…」

「儂に任せておけえいっ！！」

なのはは目を閉じると、意識を集中した。
研ぎ澄まされた感覚で、気が集まっている部分を探っているのだ。

「そこかあっ！！」

なのはは異常に気が高い箇所を発見した。
そして彼女は、レイジング・ハートの籠手が装着されている右手を前に突き出す。

「石破天驚拳がまだ使えぬ今…魔法を試してみるとするか！」

《Yes master!》

何だか、とっても嬉しそうな声でレイジング・ハートが応えた。

今まで『ジュエルシード』の収納しかしてないので嬉しいのだろうか…？

（おおっ！なのはがついに魔法を！）

ユーノは注目する。その目の前で、なのはの右手に桃色に光るリングが現れ、羽の様な光が展開された。

（物凄い魔力だ…やっぱりこの子、凄い魔法の才能を持ってる！）

魔力の高さに息を呑むユーノの目前で、なのはは叫んだ。

「行けえええいいいっ！…！」

その瞬間、眩い桃色の光が大樹目掛けて発射された。
ユーノはそれを見て、思わず叫んだ。

「手えっ！？」

桃色の光は、人の拳の形となって飛んで行く。

石破天驚拳に似ているが、拳の大きさが天驚拳の半分以下である。

「何か、デカイ拳が飛んで行くうっ！？」

あんぐり口を開きっぱなしのユーノのしている前で、デカイ拳は、
とんでもない勢いで大樹に激突した。

大樹の幹に大きな手形がベチーンツ！と張り付く、それと共に手形
に『滅』の文字がつ！

そして大樹群がみるみる崩壊して行く。

「うむっ！名付けて『星光殉滅っ！スターライトブレイカー！！』」

「なのは…それ本当に魔法なんだろうね…？」

不審のツツコミを入れるユーノの前で、大樹は綺麗さっぱりと崩れ
落ちて行った。

それを見守る2人の元に、青く光る『ジュエルシールド』が、ゆつくりと浮遊して来る。

それをレイジング・ハートで受け取ろうとしたその時。

『ジュエルシールド』はパキンと音を立てて、真っ二つに割れてしまった。

思わず目が点になって、真っ白になるユーノ。

「どうやら…力み過ぎたらしいのう…うわっはっはっはっ！！」

「うわあああああああああああつ！！またあつ！？笑って誤魔化すなああああつ！！！」

なのはの高笑いとユーノの絶叫が、廃墟と化した街に響き渡った……

その頃、海鳴市に足を踏み入れる、2人の少女の姿が有った。金髪の髪をツインテールにした、なのはと同じ年位の少女と、オレンジ色がかった髪の野性的な17歳位の少女だ。

「フェイト、何かもう始まっているみたいだね…？」

フェイトと呼ばれた少女は頷き、

「…出遅れたみたいだけど…これ以上は…」

紅い瞳に固い決意を秘めて、空を見上げた。
どんよりと不吉に曇っていたが…

つづく

第6話 師匠探し物をするの巻（後書き）

嘘予告です。

皆さんお待ちかねえっ！

ジュエルシードを集めるなのは達の前に、謎の少女魔導師が襲い掛かって来ました。

かつて無い強敵の出現に、なのははファイターとしての血をたぎらせるのです！

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠拳で語るの巻』にレディイ
ーッ、ゴオオオウウーッ！！
という訳で、皆さん良いお年を。

第7話 師匠拳で語るの巻（前書き）

今更ですが、皆さんあけましておめでとunggoggaimasu。

最初、師匠が高町なのはだったら面白いなあ…などと思って始めたこの阿呆作品、想像以上のご支持を頂きありがとうございます。

だからお前は阿呆なのだあつ！と言われる様な話を目指したいものです。

それでは、リリカルファイト、レディイイツ！ゴオオオオウツ！！

第7話 師匠拳で語るの巻

今日はすずかの自宅『月村家』に恭也兄さんとユーノを引き連れて遊びに来ているなのはである。

当然アリサも呼ばれていて、一足先に来ている。

両親が実業家のアリサの家も大きいが、月村家も非常に大きく立派である。

庭の敷地はイヤになる位にただっ広く、木々が生い茂り森みたいだ。

月村家は古くから伝わる名家なのである。（色々と怪しい…）

インターフォンを鳴らすと、薄紫色の髪をした凛々しい美人のメイドさんが、なのはと恭也兄さんを出迎えてくれる。

「恭也さま、なのはお嬢さま、いらっしやいませ」

《ユーノよ、月村家のメイド長の『ノエル』殿だ》

なのはも挨拶を返しながら、背負っているリュックから顔を出したユーノに念話で教えてやる。

《腕が立つので、前はよく手合わせをして貰っていたのだが…最近
は付き合ってくれなくなったのだ…》

《へえっ、なのはと手合わせなんて凄い人だねっ》

ユーノは、案内してくれるノエルの姿を感じて見つめた。

《何でも、遺失工学なるもので作られた自動人形だそうだ…》

《この世界も色々あるんだね…》

更に感心するユーノ。

なのはは『モビルファイター』が普通に存在する世界の記憶が有る
ので、驚く事でも無い。

しかし、そこで彼女は残念そうな表情をし、

《前に手合わせした時、追い詰められたノエル殿が、反射的にロケ
ットパンチを飛ばしてしまっ…儂もつい、ロケットパンチを粉
々に破壊して以来、手合わせ禁止にされてしまったのだ…》

《…やっぱり…なのはが一番たいがいだね…》

《ふはは…ユーノよ、あまり誉めるでない…》

《…そういう考えの出来るのはって、幸せだよね…》

ユーノは、やっぱり目の前の少女が一番、非常識なんだな…と深くため息を吐いた。

中に入ると、大きく立派な居間で月村の家の人達と、先に来ていたアリサが出迎えてくれる。それと、沢山の猫達。

その中で、さすがが大きくなったらこんな風になるかな、という感じの物静かなロングの美女がなのはと、恭也兄さんを出迎える。すずかの姉『月村忍』さんだ。

なのはを見る表情が少々複雑なのは、この非常識な少女のせいで、実は自分達『夜の一族』は大した事無いのでは…と、最近、存在意義が揺らいでいるかららしい。

ちなみに、恭也兄さんと忍さんはいわゆる、いい仲なのである。

2人は早々に忍さんの部屋に引っ込んでしまう。
邪魔するのは野暮というものである。

お茶を頂き（玉露茶）ユーノを紹介すると、アリサとすずかに早速もみくちやにされて、引きつるユーノである。

更には周りの猫達もじわじわと近付いて来る、身の危険をひしひしと感じるユーノであった。

そんなこんなで庭先に移動し、オープンテラスで世間話などをしていたなのはは、感じた覚えの有る気を捉え、ハツとする。

《なのは！》

《うむ…すぐ近くの様だな…》

テーブルの上に避難していたユーノと目を合わせる。

《どうする…？》

ユーノの問いに、なのはは強敵と出会ったかの如く不敵に笑い、

《行くぞ、流派東方不敗に闘いから逃げの文字は無い！》

なのはは勢い良く、すっくとばかりに立ち上がった。

適当な言い訳をし、月村家のだっ広い森の様な敷地に足を踏み入れたなのはとユーノは、『ジュエルシードを探していた。

その途中なのはは、気の乱れを感じ立ち止まる。

「発動しおつたかつ？」

「此処じゃ人目が有り過ぎる、結界を作らなきゃ」

ユーノは魔法を使い、月村家の敷地をすっぱり覆う位の異相空間を作り出した。

これなら周りへの被害も無い上に、外部の人間達には中で何が起っても感知する事は出来ない。

その時なのは達のすぐ近くで眩い光が辺りを照らす。

なのは達が振り向くと、

『にゃあああつ』

バカデカイ大きさになった子猫がぬうつと立っていた。

首に鈴が付いている、すずかの家の子猫だ。

「……」

固まるユーノ。巨大子猫は地面を揺らして、ノッシノッシ無邪気に歩き回っている。

「あれは…?」

眩くなのはに、気を取り直したユーノが答える。

「た…多分、あの猫の大きくなりたいという願いが正しく叶えられんんじゃないかな…?」

「なるほど…可愛いものではないか、はっはっはっ」

「いやっ、デカ過ぎでしょうアレは!」

ユーノは微笑ましそうに巨大子猫を見上げるなのはにツッコんだ。それもそうかと、なのはは腕組みをし、

「確かに…さすがにあのサイズだと、すずかも食費が大変だろうて…」

「いや…確かにそうだろうけど…そういう問題じゃなくて、色々迷惑だよ…早く元に戻してやろう」

「うむ…分かった『不屈の闘志』よ、儂の戦闘服を！」

《my name is Raising Heart》（私の名前はレイジング・ハートです）

レイジング・ハートが抗議の声を上げた時だ。
突然、金色の光が巨大子猫に炸裂した。

『にゃあああつ！？』

悲鳴を上げ、よろける巨大子猫。

2人は光が飛んで来た方向を見るが姿が見えない。かなりの遠距離からの攻撃らしい。

「なっ？魔法の光…そんな…」

ユーノが驚いた声を出す。光は更に巨大子猫に命中し、子猫は悲鳴を上げた。

それを見て、なのは再びレイジング・ハートに呼び掛ける。

「風雲再起よっ!!」

《my name is Raising Heart!》（私の名前は、レイジング・ハートです!）

レイジング・ハートは、なのはの呼びかけに抗議しながらも、バリア・ジャケットを精製する。

紫色のバリア・ジャケット姿になったなのはは、周りの木々を蹴つてノミの如くジャンプし、巨大子猫の背中に飛び乗った。

軽く10メートル位は飛び上がっている。

それを見て、茂みに隠れたユーノは、

（そろそろ驚かないと思ってたけど…なのはに魔法必要ないよねえっ!?!）

と何処の誰とも知れない人に向かって、同意の返事を求めるのであった。

ふわふわの背中に乗ったなのはは、尚も襲い来る金色の槍の雨に向かう。

「こしゃくなあつー!!」

なのははバリア・ジャケットの腰布を一気に解くと、『マスタークロス』で金色の槍をことごとく叩き落とす。

すると攻撃主は、らちが開かないと見たのか、巨大子猫の足下に攻撃の矛先を向けた。

『にゃあああつー!?!』

バランスを崩し、地響きを上げて倒れてしまう子猫。

なのはは素早く背中から離れ、10メートル近い高さから難なく着地する。

その目が鋭く光った。

「そこだあつー!!」

なのはのマスタークロスが鋭い刃と化し一閃する。

丁度その時、さっきの攻撃の主は一気に飛行魔法で距離を詰め、なのはの近くの木の枝に降り立とうとしていた。

(…あれ…?)

降り立った筈の木の枝がすぽーんと無くなっていた。

なのはのマスタークロスが、とってもいいタイミングで足下の枝を根元から切断していたのである。

不覚にも攻撃主はそのまま地面に落下し、お尻をドッシーンと酷く打ってしまった。

「……………っ!」

なのはの前でしゃがみ込んで、懸命に痛みを堪えているのは、なのはと同じ年位の少女だった。

金髪をツインテールにし、黒い衣装を纏って、これまた黒い杖の様な物を持っている。

ユーノは(うわあ…痛そうだな…)と心の中で同情してしまった。

何とか痛みが引いたらしい少女は立ち上がり、(ちょっと涙目)

「…魔導師…? 『ロスト・ロギア』の探索者か…」

とあまり感情を感じさせない声で呟いているが、さつき尻餅を着いて痛そうにしていたのを見た後だけに、とっても締まらない…

それでもユーノは、少女が自分と同じ世界から来た人間だと見抜いた。

更には『ジュエルシード』の正体を知っているらしいのが、その言葉から伺える。

「なのは…撃つて来たのはその子かも知れないけど、まず話を聞こうよ…」

「それもそうだな…！」

なのはは頷くと、流派東方不敗独特の片足立ちの構えをとった。ユーノは慌てて、

「いや…だからまず話を…」

「武道家たる者、拳で語り合うまでよ…！」

「色々と駄目だこの人…！」

ユーノが頭を抱える中、金髪の少女も手にした黒い杖、デバイスを構える。

その頭部分が変形すると、金色の光の刃が形成された。光の大鎌と
いった所だ。

どの道、向こうさんも鬭り合うらしい。

「ロスト・ロギア『ジュエルシールド』…申し訳ないけど、頂いて行
きます…」

言うが早いが、金髪の少女はデバイスを振り上げて、なのは目掛け
凄まじい速さで襲い掛かって来た。

速く鋭い一撃が、なのはの足下を刈る様に襲う。

「!?!」

少女がデバイスを振り下ろした時、なのはの姿が消えていた。

「儂は此処だっ!」

少女の頭上で声が響く、慌てて顔を上げると…

空振りしたデバイスの刃先に立ち、腕組みして少女を見下ろしているのはの姿があった。

少女の腕には何の重さも感じられない。

「くっ…！」

少女はなのはを振り落とそうと、デバイスを振り回した。

「小賢しい…！」

なのはは腕組みをしたまま飛び上がり、軽やかに宙を舞う。

しかし少女もコケにされっぱなしで黙っていた。デバイスが大きく振りがぶる。

《Arc saber》

「んんっ！」

少女が低い気合いと共にデバイスを振ると、金色の刃先が三日月形のブーメランとなって、まだ空中を舞うのはに襲い掛かった。

「ぬうつ！？」

なのはがブーメランに向かい合った時、その刃先が爆発を起こした。爆弾の様な使い方も出来るらしい。

「なのはあつー！」

ユーノは驚いて声を上げる。あの金髪の子、凄い魔導師だと焦った。しかし心配は無用だった。爆煙の中から、右手を闇色に光らせた無傷のなのはが現れる。

レイジング・ハートが防御魔法を使う間も無く、爆発の衝撃を『ダークネスフィンガー』で吹き飛ばしてしまったのだ。

「くっ……！」

少女は歯噛みするとデバイスを構え、なのはに再び斬り掛かった。

「来るか！ならばあつー！」

なのはも応っ！とばかりに迎え撃つ。少女の一撃となのはの一撃が交差した。

「流派東方不敗！！光輝唸掌おおっ！！」

なのはの激烈な掌の一撃がデバイスの一撃をかくぐって、金髪の少女に叩き込まれた。

「きゅうつっ！？」

その一撃を食らった少女は、きりもみ状に回転して綺麗な放物線を空に描き、真っ逆さまに地面に激突した。

何か頭が地面にめり込み、足を逆八の字に開いて、ピクピク痙攣している。

まるで犬〇家の一族の死体みたいであった…

「む…惨い……」

ユーノは心から少女に同情してしまった。
そこに腕組みをしたなのはがやって来る。少女を見下ろし、痛ましそうな目をした。

「こ奴の一撃一撃から、悲しみが伝わって来おったわ…これが拳で

語るといふ事よ…」

「…その割に容赦ない…というか、殴り倒しただけに見えるんだけど…」

ユーノが疑り深そうになのはをジト目で見上げた時だった。
何処からともなく何かが、なのは達に向かって投げつけられた。

「何奴っ!?!」

なのははユーノをひっ掴むと、その場所から素速く跳びすさった。

投げつけられた物は地面や木の幹に力カツと突き刺さると、次の瞬間爆発し、大量の煙を辺りに撒き散らす。

その煙の中、金髪の少女『フェイト・テストロッサ』は何とか立ち上がった。

とつさに魔法防御を張ってダメージを最小限に抑えたのだ。それでもふらついているが…

(…何だか分からないけど今の内に…)

フェイトは頭の大きなたんこぶをさすりながら煙の中を走った。

煙を逃れて風上に逃れていたのはとユーノは、煙の中に光が見えるのに気付く。それに子猫の声。

「あ奴…」

なのはが煙が晴れ掛かった空を見上げると、頭にたんこぶをこさえ、お尻をさする金髪の少女が飛んで行く所だった。はつきり言つて、とってもカッコ悪い。

「ふふふ…手加減したとは言え、あれで倒れなんだか…良い根性をしておるのう…」

なのははその後ろ姿を楽しそうに見送った。

飛行魔法を一度も試していない彼女には、ちよつと追えない。

ユーノは元のサイズに戻ってちよこちよこ歩いている子猫を見てため息を吐く。

「あのどさくさに紛れて、まんまと『ジュエルシールド』を持っていかれちゃったね…」

「ふふふ…この高町なのはを出し抜くとはのう…」

なのはは笑いながらも、地面に刺さっている先ほど投げつけられた物を手に取った。

何かの刃物らしいが、爆発したせいで元の形が判らない。

（何者だ…？この儼に気付かせる事なく不意打ちを仕掛けるとは…面白いぞ！ふはははははっ！！）

ユーノは凶悪な笑みを浮かべるのはを見て、背筋が寒くなる気がした。

（な…なのはが怖いっ！）

高町なのはは嬉しそうに、その可愛らしい指をゴキゴキ鳴らすのであった。

つづく

第7話 師匠拳で語るの巻（後書き）

嘘予告です。

皆さんお待ちかねえっ！！

なのはを挑発する謎の女の正体とは？

再びなのはの前に現れる謎の少女フェイト・テストロッサ、彼女の目的とは一体何なのでしょう？

山中を血で染めて、なのはとフェイトの息詰まる死闘が繰り広げられるのです！しかしその時…！？

魔闘少女リリカルマスターなのは

『師匠、温泉に行くの巻』にレディイイツ！ゴオオオオウツ！！

第8話 師匠温泉に行くの巻（前書き）

今回はなのは風で…

平凡な小学3年生だった筈の儂、高町なのはに訪れた突然の事態…

受け取ったのは不屈の闘志！手にしたのは魔法の力！

すれ違う思いと、繋がらない言葉…

繋げる為に出来る事は、拳で語るのみ！

魔闘少女リリカルマスターなのは、レディイイツ、ゴオオオウツ！！

「ツッコミ所が多すぎて、追っつかない!？」 ユーノ

第8話 師匠温泉に行くの巻

ある晴れた日、日本国内はいわゆる、全国的に連休というやつである。

喫茶『翠屋』は年中無休の、何時でも掛かって来んかあつ！な漢らしい店であるが、連休の時は店員さんに任せて、ちよつとした家族旅行に出掛けて、戦士の休息をとったりするのだ。（なのは談）

今回はなのはの家族の他に、アリサにすずか、月村家から忍さんに、メイドのノエルさんとファリンさんが一緒である。

旅行先は海鳴市の山の方にある温泉郷だ。海鳴市は何でもあるのだ。

泊まるのは老舗の温泉旅館で、周りは緑の木々に囲まれた、風情がある旅館である。

アリサとすずかは子供らしく、池の鯉などを見てはしゃいでいて微笑ましい。

なのはは森林浴をするお年寄りの様に、しみじみとマイナスイオンなんぞを満喫していた。

その際「ガンダムファイトで荒れ果てておらん自然は良い…」とかなんとか呟いていた様である。

まあ…あちらの事は置いて、温泉旅館に来たからには、まずは

温泉である。

みんなで早速温泉に行こう、という事になり、士郎父さん達に着いて行こうとしていたユーノは、なのはにとっ捕まっていた。

「…なのは…僕は一応男だから、男湯に行きたいんだけど…」

バスタオル一枚のなのはは、ユーノの首筋を掴んでぶら下げ、神妙な顔を見ると、

「…ユーノよ…9年間女子として過ごして来て、色々諦めた事も有る…」

「…前に聞いた、前世の拳法使いの男の人の記憶が有るって話だったけど…」

「うむ…今まで温泉や銭湯は、出来るだけ父上達と入る様にして来た…家族はともかく、他人の女性と風呂に入るのは今だに抵抗があるのだ…」

「…色々大変なんだね…」

ユーノは、いい加減ぶら下げるのは止めて欲しいなあ…と思いなが

らも、ちょっと同情してしまう。
前世の記憶が有るというのも大変だな…と思った。

「という訳でユーノよ…共にこの気まずさを分け合おうではないか
！」

ユーノはギョツとしてなのは神妙な顔を見上げた。

「ななな何でそうなるの？僕だって嫌だよっ！」

直ぐに逃げようともがくが、なのはにガツチリと抱きかかえられていた。

「今回はアリサとすずかが来ておるから、逃げようが無い、友と入らんなど母上が許してくれんのだ！」

先に入っている桃子母さんののはを呼ぶ声が、脱衣場に不吉に木霊した。

ユーノはあくまで逃げようと更にジタバタもがく。

「嫌だあゝっ！このまま流されると、淫獣だの何だの後ろ指さされる気がするー！」

「大丈夫だ！此処まで抵抗したのだ、きっと皆も分かってくれよう！」

「いい加減メタ発言の気がするけど…本当かい？なのは…」

「だと良いなっ…！」

「うわあ〜っ！やっぱり離して〜っ…！」

無理矢理大浴場に連れて行かれながらユーノは、なのはの体柔らかいなどと思ってしまう自分を恨めしく思ったそうな…

――――

という訳で結局女湯に連れて行かれたユーノは、今度はアリサにとっ捕まり、全身くまなく洗われるハメになった。

男として大事なものを失った気がし、グッタリしてなのはの肩に突っ伏しているユーノである。

なのはは早々に温泉を出て浴衣に着替え、アリサとすずかとで旅館の中の探索としゃれ込んでいた。

そんな時だ、廊下を歩くのは達の前に立ちふさがる人影が有った。

「はあゝい、おチビちゃん達ゝっ」

見ると、17歳位の浴衣を着たオレンジがかった髪の少女が、なのは達をやかな感じで見下ろしている。

えらくナイスバディーなお姉さんであつた。

お姉さんはフツと小バカにした様に笑うと、なのはに近寄り、

「君かね？ウチの子をアレしてくれたのは？」

品定めするみたいに、なのはの顔を覗き込み、

「あんまり賢そうでもないし…強そうでも…」

そこまで言った所でお姉さんのセリフはピタリと止まった。全身から脂汗がたらたら出ている。

お姉さんの野生の堪が、凄まじい危険信号を出しまくっていたのである。

（この子…ヤバイ！？）

「娘御よ…どうした？顔色が良くないぞ…」

様子がおかしいお姉さんに、なのはは声を掛けるが、お姉さんは物凄くびびった感じで後ずさると、

「ごごごごごめん、ごめんっ、しし知っている子に良く似てたから、ごごごめんねえっ！」

たいへん焦った感じで言い残すと、凄い勢いで廊下を走って行ってしまった。

「何あれ…？昼間っから酔っ払い？」

「凄く慌ててたね…」

アリサとすずかは不審そうな目で、その後ろ姿を見送る。

「おそらく…我慢ならぬ事でも有って、羽目を外し過ぎたのであるう…多目に見てやろうではないか…」

なのはは慈愛の籠もった温かい眼差しで、お姉さんに心の中で頑張るのだぞ…とエールを送るのだった。
ちなみにユーノは、まだなのはの肩で凹んだままです。

――――――

あの後お姉さんは、旅館のすみっこで落ち込んだ様子で壁を向いてしゃがみ込んでいた。

何かブツブツ喋っている。危ない人では無く、思念通話を使って話しているらしい。

《フェイトおゝヤバイよあの子…関わらない方がいいよっ》

《…そういう訳には行かないよアルフ…》

通話の相手『フェイト・テストロツサ』は、旅館から離れた森の中で、泣き言を言うお姉さん『アルフ』をたしなめた。

《…こっちは進展…次の『ジュエルシード』の位置は大分特定出来たから、今夜には確保出来ると思う…夜に落ち合おう…》

《分かったよフェイト…あたしががんばるよ…!》

アルフはさっき感じた恐怖を振り払う様に、気合いを入れるのであった。

さて時刻はもう遅い時間になっている。夜空にはまん丸お月さんが出て、絶好のサテライトキャノン日和である。

なのは達子供は先に寝かされ、大人達は宴会の真っ最中であつた。

少し混ざりたい気がするなのはだが、どう考えても怒られるだけなので、仕方無く寝ようとした時だった。

「むっ!？」

魔力…じゃなく、気の乱れを感じ取り跳ね起きた。

《なのはっ！》

ユーノも気付いて声を掛けて来る。

それは近くで『ジュエルシード』が発動した反応であった。

旅館より幾分奥に入った場所に綺麗な川がある。

その川に架けられた橋の上でフェイトとアルフは『ジュエルシード』の封印作業に励んでいた。

川の中から青い光の柱が天に向かって伸びている。

フェイトはアルフにサポートして貰い、問題なく『ジュエルシード』の封印に成功した。

「…2つ目…」

『ジュエルシード』が、フェイトの知能を持ったインテリジェンス・デバイス『バルディッシュ』のコア部分にシュルリと吸い込まれる。

作業を終え、フェイトが一息吐いたその時だった。

「また会ったのう…」

何時の間に現れたのか、ユーノを肩に乗せた『バリアジャケット』
姿のなのはが腕組みして橋の欄干に立っていた。

「…何時の間に…!？」

驚いてバルディッシュを構えるフェイト。

「うわっ、出たねっ！」

少々腰が退き気味ながらも、フェイトを庇ってなのはの前に立つア
ルフである。

「ふ…お前はその娘の仲間だったか…」

なのはは不敵に笑うと、欄干から飛び降りた。
その肩からユーノも飛び降り、フェイト達を見据え、

「『ジュエルシード』をどうする気だ？それは危険なものなんだ！」

そう叫んだ時、なのはが前にずいっと出る。

「ユーノよ…所詮は不器用な武道家…拳で語り合うしか道は無いっ
！！」

クワッ！とばかりに言い切るなのはである。

「いやっ…武道家はなのはだけでしょ？話位はしようよっ！」

「たわけがあっ！形は違えど向こうもファイターぞ！その娘よ『
流派東方不敗』高町なのは！お主は！？」

「なのはも話し合う気ゼロだね…」

ユーノは溜め息を吐くしか無い。そんなユーノを余所に、なのはは
独特の片足立ちで、フェイト達に構えるのである。

「フェイト・テストロッサ…」

フェイトもバルディッシュを構えて名乗る。

しかしアルフが一步前に出て、なのは達を睨み付けた。

「そうは行かないよ！フェイトはあたしが守る！！」

その姿が少女から、オレンジ色の毛並みの狼へと変化する。なかなかドン引きの変化だった。

「あいつ…！あの子の使い魔だっ！！」

「使い魔…？」

なのはの疑問に答える様に、ドン引き変身したアルフが、

「そうさ…あたしは、この子に作って貰った魔法生命…製作者の魔力で生きる代わり、命と力の全てを賭けて守ってあげるんだっ！！」

鋭い牙を剥き出しにして、なのは達を威嚇する様に吠えるが、尻尾が思いつ切り下に巻いている。

内心怖くて仕方無いのだろうが、根性で向かって行く気だ。見上げた根性である。

「先に帰ってて、直ぐに追い付くから！」

アルフはそう言い残すと、なのはに向かって飛びかかった。

「アルフっ！」

フェイトが止めようと叫ぶ。しかしアルフは構わず獣の凄まじいスピードでなのはに迫った。

ゴンッ
！

なのはの拳骨がアルフの頭に炸裂し、彼女は橋にべたんとぶつ倒れた。

「いつ、痛あゝいつ」

頭に大きなたんこぶをこさえ、涙目で頭を押さえるアルフである。

「アルフっ！」

「さあ！次々と掛かって来んかあっ！！！」

フェイトがバルディッシュを電光の鎌『サイス・フォーム』に変化させ、挑発するなのはに襲い掛かった。

得意の高速戦闘で、なのはの周りを移動し、背後に回る。

（がら空き…！）

その背中に鎌を一気に振り下ろす。フェイトは勝利を確信した。しかし…

「！！！」

フェイトは驚愕した。振り下ろされたバルディッシュの刃を、なのはは後ろも見ずに、指2本だけで受け止めていたからである。

「悪くは無いが…この高町なのはを倒すには、まだ足りぬわあっ！！」

なのははバルディッシュをむんずと掴むと、フェイトを思いつ切り投げ飛ばした。

ひゅるるゝと夜空を自分がアークセイバーみたいに飛んで行くフ
ェイト。

「フェイトおっ！」

たんこぶをさするアルフが悲鳴に近い声を上げた。

しかしフェイトは空中で何とか体勢を立て直すと、飛行魔法で空に
浮かび、周りに魔力を集める。

彼女の得意魔法、電光の槍『フォトン・ランサー』だ。

「なら、あたしもっ！」

アルフもフォトン・ランサーの発動に入る。

次の瞬間、2人の周りに形成された魔力スフィアから無数のフォト
ン・ランサーがなのは目掛けて発射された。

「なのはあっ！！」

ユーノが叫ぶ。さすがなのはも同時攻撃は危ないと思ったのだ。

フェイト達の『フォトン・ランサー』の雨がなのはに迫る！

しかし、なのははニヤリと笑うと、空中に円を書く様に右手を動かした。全面に梵字が浮かび上がる。

「小賢しい…、ならば！流派東方不敗、十二王方牌いつ！」

梵字から沢山の『小さいなのは』が「なのなの」言いながら現れる。

「！？」

「なななななっ！何だい？あれは！？」

見た事の無い、訳の分からん技に驚くフェイトとアルフ。

「大車併いっ！！」

小さいなのは達が渦を巻いて集まり、凄まじい竜巻と化した。フォトン・ランサーの雨を吹き飛ばし、フェイト達を直撃する。

「うああっ！？」

「わああああああっ！！」

小さいなのは達が巻き起こした竜巻に巻き込まれ、フェイト達は吹き飛ばされてしまった。

小さいなのは達は形は可愛いが、凶悪である。

大地に倒れ伏してしまう2人。そこに不敵な笑みを浮かべ、ゆっくりと歩み寄るなのは。

フェイト達にはその姿が悪魔の様に見えたという…

「此処までの様だな…では、そろそろ止めを刺してくれるわあっ！！」

なのはの暴れっ振りに固まっていたユーノは、その様子を見て、

（なのはの方が悪い人に見える…！！）

などと思ってしまった。もちろん自覚の無いなのはは、腰の布を解き『マスタークロス』の態勢をとる。

「死ねえいつ！！」

「いやっ！殺しちゃ駄目でしょう！！」

「ものの例えだっ！！」

ユーノのツツコミに律儀に返事をしながらなのは、一撃をフェイト達に食らわそうと腕を振り上げる。その時であった。

「そうはさせんぞ！高町なのはっ！！」

「ぬっつ！？」

なのはは声のした頭上の木を見上げる。そこには布をひるがえす人影が！

今まで忍者の様に風景と同じ模様の布を被り、隠れていたらしい。

その人物は、なのはの様に籠手型のデバイスからブレードを展開させ、なのは目掛けて鋭い一撃を振り下ろした。

なのははとっさにマスタークロスで斬撃を受け止める。

（出来る！こ奴何者っ！？）

なのははすかさず、マスタークロスを寄り合わせた剣で反撃する。

しかしその人物は、素速く後方に飛んで攻撃をかわし、フェイト達を庇う様にその前に降り立った。

腰に手を当て不敵に立っているのは、額にVの飾りの付いたけつたいな覆面を被り、カーキ色の軍服を着た、なのはよりも年下らしい少女だった。

覆面から覗く赤い瞳に、長い金髪が目立つ。

「ふははは…私の名は『シュバルツ・シュベスター』！ネ…ミッドチルダのガ…魔導師ファイターだっ！覚えておいて貰おう！！」

ユーノは、そのけつたいな少女…、シュバルツ・シュベスターと噛みまくって名乗る少女を見て思った。

（この子…なのはと同じ匂いがする！？っていうか、何だよ魔導師ファイターって！？）

何だかとっても悪い予感を覚えるユーノであった…

つづく

第8話 師匠温泉に行くの巻（後書き）

えっ… シュバルツですが、バレバレとは思いますが（Gガン本編でも皆さん分かってましたよね？）声はフェイトの中の人の声と同じでご想像下さい。

万が一、Gガンの方の声で想像すると、耳にこびりついて離れない恐れがあります。

ちなみに『シュベスター』はドイツ語で姉妹です。

皆さんお待ちかねえっ！

突如現れた謎の覆面ファイターの正体とは？その猛攻の前に、なのはは絶体絶命の危機に陥ってしまうのです…！

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠とりあえずツツコンでおくの巻』にレディイイツ、ゴオオオウツ…！

第9話 師匠とりあえずツッコンでおくの巻（前書き）

さて…突如なのは前に現れた謎のファイター、シュバルツ・シュベスターとは一体何者なのか？

フェイトに授ける恐るべき秘策とは何なのでしょう。

物語は次々と新しい展開を見せて行きます。

それでは魔導師ファイト、レディイツゴオオウウツ！！

第9話 師匠とりあえずツッコンでおくの巻

満月をバックに睨み合うのはとシュバルツ・シュベスターと名乗る少女。

なのははけったいな覆面少女を見て思う。

（前にも似た様な事が有った…と言うより…もしや…？）

なのはは覆面少女をビシッと指差して、

「シュバルツとやら！その覆面と言い、その技のキレと言い、何者だ？貴様『シュバルツ・ブルード』と関係が有った者か！？」

「高町なのは、貴様こそ何故『流派東方不敗』の技が使えるのだ！？」

シュバルツも両腕のブレードを構え、これまた独特の片足立ちで逆に聞き返して来た。

そこでポーズを取ったままの2人の動きがぴたりと停まる。

（ま…まさか…）

なのはは自分の身に起こった事を思い出す。目の前のシュバルツと名乗る少女も、妙な目つきになっている。

「まさか貴様っ！シュバルツ・ブルーダー本人なのか！？」

なのはの鋭い指摘に、シュバルツはギクリとした様子で、

「お前こそ、その偉そうな話し方といいその不遜な態度、もしか東方不敗マスターアジアなのか！？」

さすがの2人も啞然として、お互いの変わり果てた顔を見合わせて固まってしまった。

2人共3秒程そのままの姿勢が続いたが、

（（まあ…その様な事も有るか…儂（私）もこの形だし…））

両方共細かい事は気にしない事にしたらしい。
恐るべきアバウ…大らかさである。

シュバルツは、誤魔化す様にコホンツと可愛らしい咳払いをし、

「…何の事だ…私は見ての通り、通りすがりのゲルマン忍者で、只のネオドイツの女…その様な者は知らんな…」

「シュバルツ…お主先ほどミッドチルダの魔導師ファイターと言っておらんかったか…？」

なのはは疑り深そうなジト目で見るが、シュバルツはすつとぼけるらしく、

「そんな事はどうでもいい…！」

「良くないわっ！このたわけがあっ！シュバルツ以外にそんな怪しげな者が居ってたまるかあっ…！」

（おおっ！なのはがツツコンだ、あの子とんでもないぞ…！）

ユ一ノはその様子を見て、違った意味で驚いたという。

「そんな事に気を取られている場合か？行くぞおっ高町なのは…！」

シュバルツは目にも停まらぬスピードで、両腕のブレード…という
か『シュピーゲル・ブレード』を振り上げて、なのはに迫る。

「誤魔化しおつてえっ!!」

なのはも剣状にした『マスタークロス』で迎え撃つ。

ガキンツ！と打ち合わされるシュピーゲル・ブレードとマスター
クロス。

そのまま互いに力を込める。2人のパワー比べになっていた。

（シュバルツめっ！儼より小さいなりで何というパワーだっ!!）

なのはの方が押され気味だ。覆面越しにシュバルツは不敵に笑う。

（あの殆ど人間辞めてますの、なのはと互角に戦うなんて…あの子
化け物かつ!？）

ユーノは競り合う2人を見て、凄く失礼な感想を思い浮かべた。

シュバルツはなのはと競り合いながら、フェイト達に向かって叫ぶ。

「何をしているフェイト、早く今の内に『ジュエルシールド』を持って逃げる!!」

ようやく立ち上がったフェイトとアルフは、訳が分からず困惑する。

「でも…あなたは一体…?」

疑問を投げ掛けるフェイトに、シュバルツは、

「そんな事はどうでもいい…早く!!」

「…分かった…」

「何処の誰かは知らないけど、助かったよ!」

フェイトとアルフは覆面少女に礼を言うと、一目散に逃げ出した。

「シュバルツ! 貴様どういっつもりだ!?」

マスタークロスに力を込めながらなのはは怒鳴る。シュバルツも負

けじとブレードに力を入れ、

「ふふふ…東方腐敗いや…今は高町なのはだったな！元々我らは敵同士、こうなっても何ら不思議では無いっ！！」

「字が違っておるわいたわけ者！しかし…確かに面白い！貴様とはまだ決着が着いておらなんだ、ケリを着けてくれようぞ！！」

なのは言うが早いがマスタークロスを布状に戻し、シュバルツを絡めとろつと素速く繰り出した。

「しまった！？」

その小さな体を、白い布が生き物の様にがんじがらめにする。しかし！

「ぬうつ！？」

なのはは思わず声を洩らす。
突如その姿が消えてしまった。マスタークロスに縛られていたのは、只の木の切れっ端だった。

「変わり身!？」

辺りを見回すなのは頭上から高笑いが響く。

「ふはははっ！私は此処だあっ!!」

なのはの頭上数メートルまで跳び上がっていたシュバルツは、くない型の武器『メッサーグランツ』を立て続けに投擲する。

「小癪なっ!」

なのははマスタークロスを扇風機の如く高速回転させ跳ね返す。

「やるな高町なのは!その年で良くぞそこまで修行したものだ!」

「ぬかせ!この一撃を受けてみるが良いわあっ!」

なのはも高く飛び上がり、右手を構える。

それを察したシュバルツはブレードを頭の上で交差させた。

（あわわ…何か訳の分からないノリになって来た…っ？もはや魔法でも何でも無い！）

呆れて見上げるしか無いユーノの視線の先で、なのはの右手が闇色に輝く。

シュバルはブレードを構えたまま、独楽の様に高速回転を始めた。

周りに大風を巻き起こして人間大の竜巻と化すシュバルツ。この態勢は！

（うわあああっ！魔導師ファイターとか言っというて、あの子も全然魔法使ってないし！！）

シュバルツの起こした大風に吹き飛ばされそうになり、必死で木にしがみつくユーノは律儀につっこむが、あっ…今吹き飛ばされた。

木の葉みたいに飛ばされるユーノの横で、2人の魔法？少女が空中で激突する。

「ダああークネス！フィンガああー！！」

「シュツルム・ウント・ドラクウンンッ！」

「うおおっ!？」

竜巻にダークネスフィンガーが見事に弾かれた。吹き飛ばされてしまったのは。

(なのはが競り負けたあっ!？嘘だろっ!！)

飛ばされながら驚愕するユーノだが、その前に自分の身を心配した方がいい。

あれっ、と叫びながらユーノの姿は森の中に飛ばされ、見えなくなってしまった。

着地したなのはは、直ぐにシュバルツの方を向くが、姿が見当たらない。

「何処へ行きおったシュバルツ!逃げるつもりかあっ!！」

すると辺りにシュバルツの声だけが響きわたった。

「ふははははっ!高町なのはよ、フェイト達はもう充分遠くに逃げた頃、もう此処には用は無い、また会おう高町なのは!！」

「おのれシュバルツ！相変わらず忌々しい奴よ！！」

舌打ちするなのは。声はそれには応えず、それっきり辺りは静まり返った。

全く気配を感じられない、もう遠くへ去ってしまった様だ。

大風の余波で吹き飛ばされていたユーノが、やっとの思いでなのはの元に戻って来た。ヨレヨレである。

「ふう…死ぬかと思った…なのは…あの子知り合いなのかい…？」

「ふふふ…前から何かと因縁の有る奴よ…」

なのはは苦笑いしてシュバルツが消えたとおぼしき方向を見つめる。

「次はこうは行かんぞシュバルツ…今度は決着を着けてくれよう！！」

そう言い放つと、ヨレヨレのユーノを肩に乗せ、旅館へと帰って行った。

その背中に落ち込んだ様子は無い。

かえってかつての強敵の出現に高揚している様だ。

ユーノはなのはの肩で色んな意味でグツタリしながら、

（絶対なのは『ジュエルシード』の事忘れてるよね…）

深くため息を吐いた。

数日が経った。

此処は海鳴市の隣に位置する遠見市の住宅街である。

その中にひとときわ背の高い、家賃ひと月いくらか聞くのが怖い位の高級マンションが建っていた。

フェイト達のこの世界での隠れ家である。

ただっ広い電気も点けていない部屋の一室で、フェイトは疲れた体をベッドに横たえていた。

そこに心配した様子のアルフが入って来る。

ベッド横の小さなテーブルに載っている殆ど手付かずの食事のトレイを見付け、

「また食べてない…駄目だよ食べなきゃ…」

心配するアルフに、フェイトは気だるそうに身を起こし、

「…少しだけ食べたよ大丈夫…」

そうは言うが、本当に少ししか口にしていない…精神的に余裕が無いのだろう。

「そろそろ行こうか…あんまり母さんを待たせたくないし…」

直ぐにでも『ジュエルシード』の探索に出ようとするフェイトを心配するアルフは、

「アタシはフェイトが心配なの、広域探查魔法はかなり体力使うのに、フェイトったらロクに食べないし休まないし…その傷だって軽くはないんだよ…」

フェイトの背に何かで打たれた様な傷跡が見える。しかし彼女は気にする風も無く、

「平気だよ…私強いから…」

そうアルフに微笑したその時だった。

「甘いぞフェイトっ!!」

何か子供が無理して、偉そうにしているみたいな声が暗い部屋に響いた。

「だっ誰だっ!?!」

アルフは驚いて怒鳴る。獣人である彼女にも全く気配を感じられなかったからだ。

「ふふふ…私だよ…」

フェイト達が声のした方を見上げると、腕組みをした覆面少女が天井から逆さに立っていた。

その無駄に芝居がかった出現に、ちょっと退き気味のフェイトはその覆面に思い当たる。

「あなたはあの時の…?」

「そう…シュバルツ・シュベスターだっ!」

シュバルツは金髪をなびかせ、ひらりとフェイト達の前に音も無く降り立った。

「何だいアンタは?いつの間に入り込んだ?どうやって此処が!?」

アルフは警戒して、フェイトを庇う様に立つ。

「そんな事はどうでもいいっ!」

シュバルツは偉そうに腕組みのまま、不敵に目を閉じる。

いや…立派に不法侵入だろうと2人共思ったが、何か覆面ちびっ子の迫力に吞まれてしまった。

見てくれは小さな少女なので、何か微笑ましいのだが、覆面をしてるので凄く変だ。

「ふふふ…奴とはいささか因縁が有つてな…それでフェイト・テスト
タロツサお前に、高町なのはの攻略法を教えに来たのだ…」

「何言ってるんだい次は絶対にフェイトは負けないよ！」

アルフはムキになってシュバルツに食ってかかるが、

「はつきり言おう、今のお前達の闘い方では勝てん！ムキになっても勝てぬものは勝てぬわ！！」

うつ…と黙り込んでしまう2人。確かに過去いいようにやられただけである。

シュバルツは、どよんとしてしまうフェイト達にカツと目を見開き、

「だが高町なのはには、まだ付け入る隙が有る！」

「…あの子に隙…？」

フェイトは思わず身を乗り出していた。話に興味を示したのを感じ

たシュバルツは、

「そう…見る限り、今の奴は以前より遥かに劣る。更に魔法を覚えてまだ日が浅いらしく、飛ぶ事や砲撃魔法にまだ慣れていない…」

「…それなら…！」

フェイトはハツとして表情を変えた。

「そうだ！近接戦闘は避け空中戦に誘い込み、遠距離から砲撃魔法を撃ち込みまくってやるのだ！名付けて『ヘタな魔法も数撃ちや当たる戦法』だ！！」

（…もつとマシな名前は無かったのかい…？）

とアルフは思ったが、フェイトはやる気になったらしいので黙って置く事にした。

なのはへの連戦連敗は、彼女にとっても思ふ所が有るのだろう。

ついでにシュバルツの、なのはが以前より遥かに劣るという言葉が気になった。

しかし思いつき、戦意を無くすような話を聞かされる気がしたので、こちらも黙って置く。

話は戻ってシュバルツはフェイトをじろりと見て、

「しかし問題はフェイト、お前自身だ!!」

「…私…?」

いきなりのダメ出しにびっくりするフェイト。

「そうだ！ロクに食事もしない休まないだとおっ！？フェイトよ、お前闘いを舐めているのか！？そんな事では高町なのはに勝って『ジュエルシード』を集めるなど無理の一言おっ!!」

根が素直なフェイトはガアーンと衝撃を受けてしまう。

アルフは、このちびっ子無駄にテンション高いな…とは思ったが、言ってる事はもっともなので黙っとく事にする。

「そうだ最後まで闘い抜くには体力だっ!!」

シュバルツはそう言い放つと、どっから出して来たのか山盛りの日本料理の盛られたお盆をフェイトの前にドンっと置いた。

ホカホカの炊き込みご飯に、熱々の豚カツやら煮物やら妙に美味し

そうだ。

いつの間に用意したのか？きっとゲルマン忍法だと思われます。

自称ネオドイツの女なのに何故日本食？…という言葉も禁句だと思われます。

それはともかく、シュバルツは殆ど手付かずの食事のトレイに目をやり、

「そんな冷凍食品やインスタント食品ばかりでは体に悪い、私が作ったスタミナ料理だ！沢山食べて力を付けるのだフェイト・テスト・ロッサー！」

「分かった…食べるよ…！こんな事じゃ『ジュエルシード』集めも満足に出来ない…！」

決心したフェイトは勇んで料理を食べ始める。何気に美味しい。

「そうだフェイトお前は成長期だ！どんどん食べるのだ！お代わりもたっぷりあるぞ！」

シュバルツはそう言うと、いつの間にか出したお鍋から、なくなったお皿に次々と料理を盛ってやる。

「どうしたあどうしたあっ！そんなチマチマした食べ方では、高町なのはは倒せんぞおっ！！」

「そつだよフェイト！」

シュバルツとアルフの激が飛ぶ。

アルフは色々覆面ちびっ子にツッコミたかったが、フェイトがちやんと食事を探っているのを見て、まずは応援したくなった。

フェイトもシュバルツの料理が美味しいせいも有り、がんばって食べ続ける。

しかし… 3人共少々調子に乗りすぎた様である。

2時間後…

「うっす…」

青い顔でお腹を押さえ、ベッドに横たわるフェイトの姿があった。それを見守るシュバルツとアルフ。

「…食わせ過ぎたか…ふははははっ!!」

「笑って誤魔化すなあ!覆面ちびっ子おっ!!」

アルフが半泣きで高笑いするシュバルツに怒鳴った。

フェイト・テストロッサは食べ過ぎで、お腹を壊しました…

つづく

第9話 師匠とりあえずツツコンでおくの巻（後書き）

あのマスターアジアにキャラソンが有った事に今更気付きました。

そのタイトルは『男道、けもの道、マスターアジアの恨み節』

聞いてみて死ぬ程笑いました。

それで、このお話のイメージソングとして『女道、けもの道、高町なのはの恨み節』みたいな事を妄想しました。

歌手手はマスターの中の人…ではトラウマになりそうなので、なのはの中の人でイメージ下さい。

それでは嘘予告を…

皆さんお待ちかねえっ！！

フェイトとの闘いに苦悩するのはにアリサの怒りが爆発します。

そして再び対峙するなのはとフェイトに、またしても現れるシュバルツの嵐の様な攻撃になのは1人、決死の覚悟で立ち向かって行くのです！

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠ばーつとするの巻』にレディイイツゴオオウウッ！！

第10話 師匠ボーっとするの巻（前書き）

お陰様で評価ポイントが1000を超えました。

こんなアホ作品に付き合って頂き、誠にありがとうございます。励みにがんばります！！

今更なのは劇場版を見ました。なのはのやってる事が、師匠と大差無い気がするの、きつと気のせいですよね…？

それでは魔導師ファイト、レディイイ、ゴオオオウウッ！！

第10話 師匠ボーっとするの巻

温泉郷での死闘？から数日後、今日も小学校に通う元東方不敗マスタージャこと、高町なのはは授業中なのにボーっとしていた。

どれくらいボーっとしているかと言つと、

「ちよつ、ちよつとなのは、手！手えっ！」

アリサの押し殺した声なのはの耳に入ってきた。

「手…？」

なのはは自分の手を見る。

左手は鉛筆を握っているが、（ちなみに両利きです）机に着いている右手が闇色に輝き、机にミシミシと亀裂を作る位にボーっとしていた。

あつ…今机が碎け散った。

「何やってんのよあんたは？授業中に『ダークネス・フィンガー』かましてどーするのよっ！」

結局机を破壊してしまい、先生にしっかりと怒られたなのはである。

「うわっはっはっはっ、つい考え事をしていてなっ！」

なのはは豪快に笑って、心配そうなアリサとすずかの背中をバンバン叩くのであった。2人はバカ力で叩かれむせる。

アリサとすずかは妙な顔をして、高笑いするなのはを見るのだった。

さて…なのはは自宅に帰って机に座り宿題を始めたが、やはりボーっとしていた。

二度目になるが、どれくらいボーっとしているかというと、無意識に『十二王方牌、大車併』を繰り返す位である。

なのはから飛び出した『ミニなのは達』は、攻撃目標を特に指定されていなかったのも、とりあえず手近で心配そうに見ていたユーノ

に襲い掛かって行つた。

「なの〜っ！」×7

「ぎゃああああああっ!？」

ミニなのは達にそれぞれ首、両腕、両足、背骨、尻尾を関節技でガツチリ極められてユーノは悲鳴を上げた。

「痛だだだだっ！なのはああっ！た助けてえええっ！首が腕が足が尻尾があっ！背骨が砕けるうっっ！！」

そこでののはは、ようやくユーノが死にそうになっている事に気付いた。

「おおっ、済まぬユーノ、帰山笑紅塵」

ミニなのは達は死にそうなユーノから離れ（獲物を殺れなくて不満なのか、舌打ちしながら…）なのはの元へと戻った。

「ぬわはははっ！済まぬユーノよ、いささかぼんやりとしていた様だ…」

高笑いするなのはに、ガタガタの身を起こしたユーノは、

「…なのは…君がボーっとすると、周りが危険だから頼むから止めて…似合わないし…それに何か今、綺麗な花畑が見えた気がする…」

危うく臨死体験をする所だったユーノは、抗議の声を上げる。

なのはがボーっとする度に、こんな調子ではユーノは近々、お星様になってしまいそうである。

「それで…なのはは何でボーっとしてるんだい…？理由も分からず戦うのは嫌だなんて間違っても言わないよね…？」

なのはは腕組みをして、何か昔を懐かしむ様に遠くを見つめ、

「…ふむ…実はな…」

なのはが何か言い掛けた時、

「なのはあゝっ、アリサちゃんとすずかちゃんが来てるわよっっ」

桃子母さんのなのはを呼ぶ声が聞こえた。

「さあっ！なのは言いなさい、あんた柄にも無く悩んでるでしょう？」

なのはの部屋に上がったアリサは入るなり、ズバリなのはを問い詰めた。

「なのはちゃん…私達じゃあんまり力になれないかもしれないけど、話を聞く位は出来るよ」

すずかも真剣な表情でなのはを見る。

ユ一ノはそんな2人を見て、

（2人共いい子達だな…なのはを心配して来てくれたんだ、女の子同士の友情かあ…）

ほっこりした気持ちになる。アリサとすずかは、なのはの手をがっしりと握り、

「私達はお互い、死線を超えて来た戦友じゃないの、水くさいわよなのはっ!!」

「そっだよなのはちゃん、カチコミかけるなら何時でも付き合うから!」

「済まぬ! アリサ、すずか、この高町なのは2人の思い確かに受け取ったぞ!!」

女の友情というより、とっても漢らしい友情であった。

アリサもすずかも、なのはから悪い意味での影響をしっかりと受けているみたいである。

(…想像してたのとまるで違う…と言うかこの2人、将来大丈夫かあっ!!?)

ユーノは昔の少年漫画の様に拳を合わせ、背後に炎が見えそんな感じの3人を見てちょっと退いた。

向かい合って座る3人を見てユーノは、

（なのはの悩みって何だろう…？ひょっとして実は魔法関係の事とかで悩んでたのかな…？知り合いらしい子も出て来たし…でもこの世界だと人に言える事じゃ無いだろうな…）

ユーノは心配そうに腕組みをして目を閉じて黙っているなのはを見た。

「…実はな…」

なのはは目を開けるとユーノを指差し、

「其処に居るユーノは実は異世界から来た喋るフェレットで、魔法の石を取り戻しに来ておって、儂はその手伝いで魔法少女をやっておるのだ」

（嘘おっ！？豪快にバラしてどーすんのおおっ！！）

ユーノはその場で、スライディング気味におもいつきりすっこけた。

なのは結局2人に全部話してしまった。

今ユーノはアリサに捕まり「喋ってみなさい」と、もみくちやにされていた。

ユーノはもうパニックである。そんなアリサになのはは笑って、

「はははっ、アリサ魔力が無いと聞き取れんらしいぞ」

「なあんだあゝっ、詰まらないわね」

ブーたれてユーノを持ち上げるアリサ。

《なのはあゝっ、普通こーゆう事は秘密にするんじゃないのおっ！
？》

「何故だ？心配する友に話さんというのは良くなかるっ？」

なのはは全く悪びれていない。こんな事なら最初の時に秘密にするように言っておけば良かったと思うユーノである。

「しっかし…なのはも凄い人生送ってるわねえ…前世で拳法使いのおじさんで、巨大ロボットに乗って人類抹殺しようとしたり、生まれ変わって魔法少女か…」

「凄いよ、なのはちゃん、さすがだねっ」

アリサとすずかは特に抵抗無く受け入れている。ユーノは思い知った。

（なのはの事を知っていると、大概の事は驚かなくなるんだな…っていうか人類抹殺って何！？）

何か凄い物騒ぎな話が普通に会話の中に出て来た気がしたが、聞かなかった事にするユーノであった。

「それでその『フェイト・テストロッサ』って子を見ると、昔の弟子を思い出して仕方ない訳ね…？」

アリスの問い掛けになのはは頷き、

「…初めてドモンに会った時を思い出すわい…あの淋しそうな目だな…」

なのははギアナ高地で道に迷っていた幼いドモンを思い出し、顔をほころばせた。

（何なんだ…この訳の分からない会話は…？）

ユーノは最早別次元に跳んだ話合いに、ひたすら頭を捻った。

結局3人で考えた末に出た結論とは…

「アリスすずかよ、ようやく合点が行ったわっ！うわはははっ！！」

なのはは高笑いして、勢い良く立ち上がるのだった。

次の日

海鳴市のビル街の上空が黒雲に包まれ、あちこちに派手な雷が落ちていた。

フェイト達の魔法雷である。これで『ジュエルシールド』を強制発動させて探し出そうという、少々荒っぽい作戦であった。

その魔法雷の光の中、ビルの屋上で下を見下ろす2人の少女の姿がある。アルフト、腹痛から復活したフェイトだ。

さすが反省したシュバルツが、

「これを飲むがいい、ゲルマン流『正〇丸』これで腹痛もたちどころに直るっ！」

と、臭いぐつと嫌がるフェイトに無理矢理飲ませて立ち去った。

ちなみにシュバルツのゲルマン流、〇露丸につつこめる程こっちの文化が分かっていない2人は、ゲルマン流の薬は効くなあ…と素直に思ったという。

駄情報はこれ位にして、フェイトとアルフの表情が険しくなる。

街中に広域結界が張られて行く。なのは達が嗅ぎ付けた様だ。

「来たね…」

察したアルフがゴクリと息を呑んだ。

発動したジュエルシードの青白い光の柱が天を貫く。

その光を目指し、バリアジャケット姿のなのはは猛然と走る。平気で時速百キロ位は出てそうだ。

なのはの肩に必死でしがみついているユーノが叫ぶ。

「なのは、あの子達より先に封印を！今度は壊さない様に加減というか、流派東方不敗は使わないで！」

「分かっておるわあつ！不屈の闘志レイジング・ハートよ！！」

《c a n n o n m o d e》（砲撃形態）

今回は余計なものも混じっているが、一応ちゃんと名前を呼んで貰えたので、素直に応じるレイジング・ハートである。

なのはの右腕のレイジング・ハートに、桃色の光のリングが形成される。

フェイトもビルの屋上から飛び降りると、バルディッシュを構え砲撃態勢に入った。

「美しき破壊者ディバインバスタああーっ!!」

「サンダーレイジ…!」

桃色と金色の魔法光がほぼ同時に、青白く輝く『ジュエルシード』に炸裂すると、光の柱は消え封印状態となった。

なのはは、上空で緊張した顔でこちらを見下ろすフェイトを見上げながら、ゆっくり歩み寄る。

バルディッシュを構えるフェイト。なのはは彼女の目をしっかり見ると、

「フェイト・テストロッサよ！お前には見所が有る！儂もまだ修行中の身だが、どうだ、共に最強を目指さぬか!？」

「…?」

フェイトにはなのはが何を言っているのかサッパリ分からない。

なのはまるでドモンを見守る様な優しい笑みを浮かべ、

「お前の師匠になりたいのだっ!!」

（ああ…本当に言っただよ…）

ユーノは呆れ顔である。あ後の話し合いの結果、

「なら、いっそのこと弟子にしてしまおう!」

という結論になってしまったのであった。

さて…なのはの師匠宣言を聞いたフェイトは、不覚にもドキリとしてしまうが…

「フェイト!何をしてるんだい!?ジュエルシードを集めるんだろ!?!」

アルフの叫びにハッとしたフェイトは、高く空に飛び上がった。バ
ルディッシュをなのはに構える。

なのははフツと不敵に笑い、

「なる程…弟子にしたいくば、まず倒してみよという事だな…?なら

ば『流派東方不敗』の真髄とくと見るが良いっ!!」

(結局ぶっ飛ばすんだね…)

ユーノは、やはりこの子に平和的な解決は無理なのだなぁ…と、この世界に来てから増えたため息を吐く

そんなユーノの前で、なのははフェイト目掛けてジャンプしようとした時、フェイトの『フォトン・ランサー』の雨が降り注ぐ。

「小癪なあっ!!」

なのはは軽々と金色の槍の雨をかわし、ビルの壁面を蹴ってフェイトに迫ろうとするが、彼女は更に高度をとって砲撃魔法を撃ち込む。

(ほお…そう来たか…良い判断だ、ならば…!)

「不屈の闘志レイジング・ハートよ!!」

《Yes master》

なのはの呼びかけに反応して、彼女の背中に『マスターガンダム』を思わせる二枚の桃色の光の羽根が現れる。

なのはの初飛行である。まるでバーニアを噴かす様にぶっ飛んでフエイトに迫って行くのはだが：

「ぬおっ？ バランスがモビルファイターと違う！？」

バビュンツとフエイトを通り越してしまった。

どうも推進剤を噴射して飛ぶのと、魔法での重力制御とでは勝手が違う。

空中で逆さまになってしまうのは。

（今だっ！）

フエイトはすかさずフォトン・ランサーを発射する。

「これしきっ！」

なのはのマスタークロスが生き物の様に動き、金色の槍を叩き落とす。

更なる追撃に備えて、やつとこさ姿勢を整えたなのは目に、地上に浮かぶジュエルシードに向かって飛ぶフェイトの姿が映った。

なのはを空中に誘い出して、その間にジュエルシードを確保するつもりだ。

「逃さん!!」

なのはは慣れない飛行魔法を解除すると、一気にビルの側面目掛けて落下する。

「うわあっ？なのは、そんな高さで飛行魔法を解除なんて危ない！」

ユーノが真っ青になったかは毛皮で分らないが、とにかく焦って叫んだが、

「嘘…!？」

落ちるのはを見てフェイトはギョツとした。

「ハアアアアア…」

何故ならなのはそのまま、垂直のビルの壁面を物凄い勢いでダカダカ駆け降りて行くではないか。もちろん魔法など欠片も使っていない。

何か物理法則とか魔法も含めて、色んなものを無視してなのははじユエルシード目掛けて走る。

（くっ…！）

フェイトも懸命に飛行のスピードを上げる。

ほぼ同時にジュエルシード手前でレイジング・ハートとバルディッシュがガキッ！と打ち合わされた。

「ぬっ！？」

「！？」

打ち合わされたレイジング・ハートとバルディッシュに亀裂が入った。

2人の膨大な魔力がジュエルシードに注ぎ込まれ、発動してしまったのだ。

凄まじい爆発と共に、光の柱が天を貫いた。衝撃でぶっ飛ばされる2人。空間がビリビリと震えた。

「何のこれしき!!」

とつさにダークネスフィンガーで衝撃波を防ぎながら、なのはは発動しているジュエルシードに走る。

フェイトは一旦距離を取ったので出遅れてしまった。

「もう一度封印してくれるわあっ!!」

なのはがジュエルシードに手が掛かる所まで来た時だ。

「そうはさせんぞ! 高町なのは!!」

いつの間に現れたのか、覆面ちびっ子こと、シュバルツ・シュベスターがシュピーゲルブレードを振り上げて向かって来る。

「小癪なあっ! ダああークネスっ!」

「シュピーゲル!」

なのはの右手が闇色に輝き、シュバルツのブレードが閃光と化す。

「フィンガアアアッ!!」

「ブレードオオオッ!!」

ダークネスフィンガーとシュピーゲルブレードが、ジュエルシールドを挟んで、真っ向からぶつかり合ってスパークした。

「うおおおおおおっ!!」

2人が吼える。青白く輝くジュエルシールドが更に輝きを増し、空間が震えた。

「こ…これは次元振? 大変だ、なのは危ないっ!!」

ユーノが焦って叫ぶ。しかし全く話を聞いてない2人は、

「これしきいいいいっ!!」

なのはとシュバルツが炎と燃えた。2人の気が爆発して渦を巻く。

パキイインッ

何かが碎け散る澄んだ音がした。

「「あっ……」」

なのはとシュバルツが同時に気の抜けた声を出す。

気が付くと光の柱と次元振が収まっていた。ついでに、ジュエルシードも粉々になっていた…

「「あんたら何やってんだああああっ！！」」

固唾を飲んでその様子を見ていたアルフとユーノの叫び声が綺麗にハモった。

つづく

第10話 師匠ボーっとするの巻（後書き）

なのはの利き腕ですが、アニメでは左利きですがマスターアジアは右利きなので、なら両方使えるだろうと思い、両利きです。戦闘では右手、日常は左手を使っています。

アニメの設定だと、師匠がドモンと初めて会ったのは、ドモンが家出して宇宙船に密航した時に会っただと思いましたが、こちらでは島本版、超級！の方の設定になっています。

それでは嘘次回予告を…

皆さんお待ちかねえっ！！

再び対峙するなのはとフェイト、お互いの譲れない想いの為、2人の闘いは終わらないのです。

その時謎の黒い魔導師がなのは達の前に現れるのです。なのはは黒い魔導師の前に絶対絶命の危機に陥ってしまうのでしょうか！？

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠うつかりするの巻』にレディイイ、ゴオオオウウッ！！

第11話 師匠うつかりするの巻（前書き）

それは平凡な小学3年生だった筈の儂、高町なのはに訪れた小さな事件：

受け取ったのは不屈の闘志、手にしたのは魔法の力。

すれ違ったままぶつかり合った想いは光と共に消え去り、手探りで進んで行く道が本当に正しいのかどうか、悩む暇が有ったら突き進め！壁にぶつかったならばち抜いて進めいっ！立ち止まらずに駆け抜けた足跡は、きっと自らの糧となるうぞ！！

魔闘少女リリカルマスターなのはレディイツ、ゴオオオウウ！！

「…もうこのナレーション辞めようよ…」 ユーノ

第11話 師匠すっかりするの巻

砕け散り、綺麗な光の粒子となって消えて行く『ジュエルシード』を見て、フェイトとアルフの目が点だけになっていた。

ポカーンとしていたアルフだが、ハッと正氣に戻ると、半泣きでシュバルツに詰め寄り、

「アンタ何やってんだい！何で壊せるんだよ！って、それよりも壊してどーすんのさあつー！」

シュバルツは決まりが悪そうに明後日の方向を見ていたが、

「一番焦っているのは、この私だつー！」

クワッ！とばかりに叫んだ。気のせいかな、逆ギレして誤魔化そうとしている気が…

「ぬわっはっはっはっ！つい熱くなっちゃったのうー！」

なのは腕組みで、ひたすら笑っている。こちらはあんまり気にしてない…

この状況を見てユーノは、天を仰いで思わず叫んでいた。

「何かやらかす気がしたんだよ、こんちくしょおおおっ!」

なのはと同類と思われる覆面ちびっ子が現れた時点で、イヤな予感がしていたのである。

フェイトは驚きを通り越して放心していた。

(『ジュエルシード』が…母さん…)

思わず泣きそうになってしまっ、その時である。彼女の肩をポンと叩く者があった。

「フェイトよ…」

フェイトが振り向くと、神妙な顔をしたなのはが立っていた。

「これを持って行くがよい…」

おもむろにそう言うと、右腕の『レイジング・ハート』から『ジュエルシード』を取り出し、フェイトに放り投げた。

「…えっ…？」

啞然として受け取ったフェイトは訳が分からない。

「やるなあああっ！！」

ユーノの叫びをまったく聞いてないのはは、コホンと軽く咳払いをすると、

「今回は未来の弟子のフェイトに免じてやる…今だけは退いてやろう…」

「ちょっと、なのはああっ！！」

なのははまだ叫んでいるユーノをつまみ上げ、フツと微笑むと、きびすを返して、去って行ってしまった。

フェイトはポカーンとしたままで、その妙に哀愁を感じさせる小さ

な背中を見る。シュバルツもその後ろ姿に目をやり、

「ふっ…高町なのは…そういう所は変わっておらん…」

シュバルツは、なのはがマスター時代、ドモンと敵対しながらも、甘い所が有ったのを思い出し、笑みを浮かべた。
しかし子供が無理して渋がっているみたいである。

「そーいうアンタは少しは反省しな！」

アルフがツツコミを入れるが、シュバルツは相変わらずの調子で、

「フハハハッ！さらばだ2人共、また会おう！！」

そう言い残すと、ノミの様に一気に飛び上がり姿を消した。

「馬鹿あつ！もう来るなあつ！！」

アルフはシュバルツの消えた方向に向かって怒鳴るのであった。

次の日の朝、フェイトとアルフは、隠れ家に行っている高級マンションの屋上に立っていた。

今までに手に入れた『ジュエルシールド』を渡す為と報告の為に、自分達の本拠地に向かうのである。

フェイトがバルディッシュを掲げ次元座標を詠唱すると、2人は金色の光と共に転移する。

しかしフェイト達は気付かなかったが、その背後に潜む者が約一名居たのである。

着いた先は、薄暗い高次元空間に浮かぶ、異形の巨大な丘を丸ごと改造した、巨大次元航行船『時の庭園』である。

その中の一室『玉座の間』と呼ばれる部屋に呼び出されたフェイトは、俯いて立っていた。

「たったの4つ…これは余りにも酷いわ…」

フェイトの前に立つ、四十前後の濃い紫色のマントを羽織った女性

『プレシア・テストロッサ』は、じろりフェイトを見すえる。

「私はあなたに21個の『ジュエルシード』を集める様に言った筈よ…母さんの研究にはどうしてもアレが必要なの…」

「はい…ごめんなさい母さん…」

フェイトは俯いたまま、消え入りそう声で謝るしかない。

プレシアは持っていた杖を鞭状に変化させてフェイトを冷たい目で見ると、

「残念だわフェイト…私はアナタを叱らなくちゃいけない…！」

プレシアのフェイトを見る目が狂気を帯びた。

静まり返った『時の庭園』の中、しきりに何かを打つ音が響く。それに聞こえて来る少女の苦しい声。

フェイトが母プレシアに鞭で折檻を受けているのだ。

部屋から締め出されたアルフは、耳を塞いでうずくまっていた。無力感が襲う。聞こえて来るフェイトの声が痛ましかった。

「…何なんだよ…一体何なんだよ…！あんまりじゃないか…！！」

悔しがるアルフの耳に、折檻の音に混じって、別の音が聞こえた気がして顔を上げた。
見ると柱の陰から黒いものが見える。

「…？」

近付いて覗き込んだアルフはビクリして叫んでいた。

「フェイトおっ！？」

そこには、床にあお向けで寝かされているフェイトの姿があった。毛布の代わりといった感じで見覚えのあるカーキ色の軍服が掛けられている。

訳が分からないアルフだが、とりあえずフェイトを抱き起こす。

「フェイトしっかりするんだっ！」

「…んんっ…もう無理だよ…もう食べられない…」

寢言を言っている。どうやら気絶しているだけらしい。直ぐにフェイトは目を開けた。

「…えっ…？何で此処に…？ついさっき、母さんに叱られてたのに…」

フェイトはビククリして、辺りをキョロキョロ見回す。キツネに摘まれた様な顔になっていた。

「…じゃあ…今あの人に折檻されてるのって誰だい…？」

まだ鞭が人の体を打つ音が聞こえている。

フェイトとそっくりな声もまだ聞こえるが、気のせいか響いて来る声が悲鳴というより、痛みを堪える漢らしいものな気がした。

しばらくして折檻の音が止んだ。フェイトとアルフはプレシアが出て行ったのを確認すると、玉座の間に入ってみる。

部屋を見回すと部屋の中央に、全身痣だらけの少女が倒れていた。

うつ伏せになって顔は見えないが、フェイトと同じ金髪の少女である。

おそろおそろ少女に近寄ろうとした時、フェイトが持って来ていたカーキ色の軍服が不意にバサリと広がり、2人の前を覆ってしまった。

「「!？」」

一瞬視界を塞がれて慌てるフェイトとアルフだが、カーキ色の布が取り払われると、聞き覚えのある笑い声が木霊した。

「フハハハ…甘いぞフェイトっ！」

其処には、覆面ちびっ子ことシュバルツ・シュベスターがカーキ色の軍服を纏って腕組みをして立っていた。

「アンタいつの間に…？」

驚くアルフに、シュバルツは覆面越しにフツと笑い、

「少し用事が有ってな…お前達にくっ付いて邪魔させて貰ったのだ」

「用事って何なの…？此処は秘密の場所なんだよ…！」

あっさり時の庭園に來られてしまつて警戒するフェイトだが、

「心配するな…用事が終われば直ぐに出て行く、この場所の事も誰にも言わん…っ！」

そこまで言つた時、シュバルツは顔をしかめ少しよろけた。アルフはハツとして、

「アンタまさか…フェイトの身代わりに…？」

「フツ…変わり身の術を少しやってみただけの事…それよりも、か…あの人は何時からあんなつた…？」

シュバルツの真剣な眼差しにフェイトは淋しそうな目をして、

「4年前位から…私が事故に遭った後からだよ…シュバルツは母さんを知ってるの…？」

「少しな……」

シュバルツは一旦考え込む様に目を閉じるが、おもむろに目を開け、

「邪魔したな…さらばだフェイト・テストロッサ、アルフよ、また会おう！」

その小さな体が木枯らしの様な渦巻きに包まれると、かき消す様にその場から姿を消した。

シュバルツが消え去った跡を見ながらアルフは、

（アイツ…フェイトの味方なのは本当らしいね…）

アルフは、痛みを堪えて強がるシュバルツの姿に、胡散臭いと疑っていた考えを改めるのだったが、今までの事を思い出し、微妙な表情で唸った。

フェイト達と別れたシュバルツは、物音一つしない静かな庭園内を足音を立てず、影の様に静かに進んでいた。

あちこち歩いている内に隠し部屋を発見する。

何かの研究室らしい。部屋の中に入ったシュバルツは思わず声を洩らした。

「そついう事が…」

シュバルツの前には液体に満たされた円筒形のカプセルが置かれており、その中に金髪のフェイトそっくりの5才位の少女の遺体が浮かんでいた。

――

その日の夕方、そこから眺める沈む夕日の燃え具合が『流派東方不敗』に相応しいと、なのはお気に入り海鳴臨海公園の空中にて、高町なのはとフェイト・テストロッサは再び向かい合っていた。

2人の横に、たった今封印したばかりの『ジュエルシード』が青く

輝きながら浮いている。

ついさつき、公園の木と融合して怪物になった所を、なのはとフェイトに寄ってたかってボコにされて封印されたのだ。

向かい合う2人を見守るのは、ユーノと狼の姿のアルフだ。姿は見えないが、シュバルツも何処かで見ている筈である。

なのはは幾らか魔法での飛行に慣れたのか、桃色のラウンドシールド型の二枚の光の羽根で、一応空に浮かんでいる。

「ジュエルシールドは譲れないから…」

フェイトはバルディッシュを構え宣言する。

なのはは不敵な笑みを浮かべ『流派東方不敗』の構えをとり、

「僕はフェイトを弟子にしたいだけだ、僕が勝ったら弟子の話を考えるのだぞ！」

フェイトはピクリと眉をひそめる。それが合図だったかの様に2人は同時に動いた。

なのはは右手のレイジング・ハートを繰り出し、フェイトはバルディッシュを振り上げる。

2人が激突しようとしたその時だ。
突如閃光と共に光る魔法陣が現れ、その中から黒尽くめの少年が出現した。

少年は、2人のデバイスを同時に掴んで「ストップだ！」と制止の警告を出して止めさせるつもりだった。

少年は2人のデバイスを掴もうと手を伸ばし、

「ス…！」

まで言い掛けた時、確かになのはのデバイスを掴んだと思った左手がスカッと空を掴む。

ハッとした次の瞬間、なのはが幾つもの残像を残して、少年に迫って来た。

「酔舞再現江湖・デッドリーウェイブうっ…！」

なのはの凶器と化した一撃が、少年にパッカンッとももの見事にヒットした。

「ぎゅっっっっっっっ！？」

少年は小型の竜巻の様に凄い勢いでスピンス、空に綺麗な放物線を描いてドボーンッ！と海に真っ逆様に落下した。

二本の足が海面に突き出て、何かピクピク痙攣している。

（うわあ…犬〇家の一族、スケ〇ヨ被害者第2号…）

ユーノは数日前にテレビで見た探偵映画を思い出し、少年に心から同情した。

「いかんっ！」

なのは焦った様子で痙攣する少年の元に降り立つ。

「たわけがあっ！いきなりファイトの最中に入って来る奴があるか、ウツカリ本気で当ててしまったではないかっ！ガンダムファイターは急には停まれんということわざを知らんのかあっ！！」

ガンダムファイターってどんな人間凶器なんだよ…と怖くなるユーノ。

なのはは少年の足を掴んで、陸に引っ張り上げた。

「どうだいなのは…?」

ユーノは引き上げられた少年の元に駆けつけるが、なのはは深刻な顔をし、

「…息をしておらんな…」

「ええええっ!?!」

焦るユーノを前に、なのはは慌てず少年の胸に手を当て、

「まだ間に合う!はあああっ!!!」

なのはは掌から気を発し、ドムツとばかりに心臓に打ち込んだ。一種の心臓マッサージである。

「げぼっ!げぼっ!」

少年は飲んでいた海水を吐き出して蘇生した。彼は上体を起こし、

「…何か…川の向こうで…死んだ父さんを見た様な気が…」

などとブツブツ言っている。なのはは臨死体験から生還した少年の肩を叩き、

「危ない所だったぞ…儂が居らなんだら、死んでいた所だ…次からはファイトの最中に入るなど無謀な真似は止める事だ…」

「はあ…どうも…すいません次からは気を付けます…」

まだぼんやりしている少年は素直に頷く。

「いや…やったのものはだけどね…」

コーノは乾いた笑みを浮かべて、とりあえずつつこんでおく。その時である。多数の気配がし、男の叫び声がした。

「『時空管理局』だ！抵抗を止めて執務官を解放しろ！！」

コーノが振り向くと、バリアジャケットを纏いデバイスを構えた、

数十人の男達に囲まれていた。

「時空管理局！この子、執務官だったのか！」

ユーノは脂汗を流して後退った。しかしなのははズイツとばかりに前へ出る。

「何奴…儂に武器を向けて只で済むと思っておるのか…？」

不敵に笑うなのは。執務官を一撃で倒す映像を見ていた武装局員達はビビリ気味だ。

「て…抵抗するか！」

一斉にデバイスをなのはに向ける。エライ事になったとユーノは固まってしまった。

しかしなのはは余裕である。カツ！と目を見開き、

「闘る気か！ならば、流派東方不敗が奥義つ、十二王方牌いっ！」

「ちょっとストップだ！みんなも止めるんだ！！」

局員達のあられもない悲鳴が上がり、ミニなのは達の竜巻に吹っ飛ばされ、壊れた人形みたいに宙を舞う。

黒衣の少年『クロノ・ハラウン』は、全滅した局員達の中に仁王立ちのなのはを見て青ざめた。その姿はまさしく悪魔。ちなみにユーノは横で頭を抱えていた。

「ふん…たわいも無い奴らよ…」

なのは鼻で笑ってバリアジャケットの埃を払う。

そんななのはに、クロノは正直恐怖を覚えるが、逃げる訳にもいかないので恐る恐る、

「い…色々行き違いがあつたみたいだけど…時空管理局・執務官クロノ・ハラウンだ。事情を話して貰えるか…？」

腰が思いっきり退けているのは見なかった事にしようと思うユーノであつたが…

「抜かったわ…フェイト達が居らん！」

急になのはが叫んだ。思わずビクツとしてしまうクロノ。
ユーノもハツとして辺りを見回すが、影も形も無い。

どさくさ紛れに『ジュエルシード』を持ってとんずらしたらしい。

「ぬわっはっはっはっ！今回は仕方なかるう！危うくウツカリこの
子供をあの世に送る所だったからのう！」

なのははクロノに近付くと、豪快に笑って肩をバンバン叩く。

（僕はウツカリであの世逝きだったのか…？）

冷や汗をかくクロノは、なのはの馬鹿力にむせながら、何もかも投げ捨てて帰りたくなったという…

つづく

第11話 師匠すっかりするの巻（後書き）

クロノ嫌いではないですがこんな様に…

アンチ？ハハハッ、そんな真面目な要素がこの話に有る訳ないじゃないですか！という訳で嘘予告です。

皆さんお待ちかねええっ！

第三の魔法使いクロノの出現に、ついに明かされるジュエルシードの正体とは一体何なのでしょう？

事態は大きく進展します。そしてなのははアースラ艦長リンディと火花を散らすのです！

魔闘少女リリカルマスターなのは、師匠語るの巻にレディイツ、ゴオオオウ！！

第12話 師匠語るの巻（前書き）

さて皆さん…なのは達の前に現れた『時空管理局』とは一体何なのでしょうか…

彼らはなのにとって、どのような存在になるのでしょうか…それは運命というもののだけが知っているのかもしれませんが。

それでは魔導師ファイト、レディイツ、ゴオオオウウツ…！！

第12話 師匠語るの巻

次元の海と呼ばれる、次元世界と次元世界との狭間の異空間に、一見宇宙船にも見える船が留まっていた。

『時空管理局』通称『海』と呼ばれる『本局』所属の次元航行船『アースラ』である。

其処の転送ポートから、とても偉そうな少女がフェレットと黒髪の少年を引き連れて出て来た。

もちろん元マスターアジアこと高町なのはとユーノ、クロノである。

実際はクロノが1人と1匹を連れて来たのだが、なのはが偉そうなのでそうにしか見えない。

転送ポート室を出ると、SFチックな長い通路が続いている。

「…こつちだよ…」

黒髪の少年クロノが先に立ってなのは達を案内するが、内心少し不安だった。なのはの異様なまでに高い戦闘能力のせいである。

あの後艦長でもある母親のリンディから、なのは達を連れて来る様に言われ、なのはも応じたので、アースラに案内して来たのだ。

武装局員達は気絶させられただけで、話を通じない相手でも無い様なので、下手に敵に回すより話し合いで何とかしようと判断したのだろう。

万が一暴れられても艦の防御システムや全武装局員総掛かりで制圧する事も出来ると踏んだのだろうか…

そんなクロノの心の内を余所に、なのはは興味深そうに艦内を見回し、

《ユーノよ…此処は？》

《時空管理局の次元航行船の中だね…別世界の記憶が有るなのはなら判ると思うけど、幾つも存在する次元世界…その次元世界の狭間を移動する為の船だよ》

なのはの念話に、後をちょこちょこ歩くユーノが同じく念話で応える。彼女は頷くと、

《時空管理局とは、いかなるものだ…？》

《簡単に言つと…それぞれの世界に干渉し合う様な出来事を管理してるのが彼ら時空管理局、なのは達の世界の警察みたいなものだよ》

「ふむ…」

なのはは大体の所は理解した様だ。元々数百年後の別世界の記憶と知識があり、博識な彼女は理解も早い。しかしそこでなのはは首を捻り、

「クロノよ…」

「なっ何かな？」

急に声を掛けられたクロノは、少し声がうわずりながらも返事をする。

明らかに自分より年下だと分かっているのだが、妙な迫力に押されがちだ。なのはは真剣な表情で、

「時空管理局という名前はセンスが無い、時空シャッフル同盟か時空魔導師ファイター協会にならんか？」

クロノもユーノも（「うわあ…そのセンスもどうよ？」）ともの凄く思ったが、この事に対してツツコミを入れると、何か問答無用で殴られそうな気がしたので、

「…い、いや…僕が付けた訳じゃ無いし…名称を変えられる程偉くも無いから…」

クロノは当たり障り無い返事をして置いた。

げんなりした顔でため息を吐くが、ふとまだバリアジャケット姿のなのはを見て、

「何時までもその格好も窮屈だな…バリアジャケットとデバイスを解除しても平気だよ…」

「良かるう…」

なのはは光に包まれ、元の小学校の白い制服姿に戻った。

クロノにしてみれば、戦闘態勢を解いてくれた様に見えて一安心である。

しかしなのはがバリアジャケットを着ているのは、服を汚して桃子母さんに怒られない為で、戦闘能力はあまり変わらない。

それを知らないクロノはホッとして、床のユーノにも声を掛ける。

「君も元の姿に戻っても良いんじゃないか？」

「ああつ、そういえばそうですね、ずっとこの姿でいたから忘れてました」

「？」

2人の会話に訝しげな顔で首を傾げるなのは横で、ユーノの小さな体が急に光り出した。

「これは…！？」

驚くなのは前でユーノの姿が変わって行く。そしてその姿があま色の髪をしたなのはと同一年位の少年に…その時、

「おのれ何奴っ！！十二王方牌・大車併っ！！」

「うぎゃああああああああああっ！！？」

立ち上がろうとした少年ことユーノの、あられない悲鳴が通路に木霊する。

ミニなのは達が「なあのおっ！！」とばかりに襲い掛かり、その五体をひっ掴んで通路の壁にビターンツと磔にしまった。

「ちょちょちよつとおっ！？なのは僕だよユーノだよっ！！」

磔状態のユーノは悲鳴を上げた。なのはは疑わしい目をして、

「ユーノだと…？」

「なのはにこの姿を見せるのは二回目だよね？」

ミニなのは達の殺意満々の目に泣きそうになりながらも、必死で説明するユーノである。

「最初からフェレットだったわい！たわけが最初に言っておかんか、どこぞの妖怪変化かと思ったぞ！！帰山笑紅塵！」

仕方無くといった感じでユーノを離すミニ達。戻る前にユーノを見ると、一斉に首を指でかつ斬る仕草をしてから、なのはの元に洩々帰って行った。床にドシンと落下したユーノは、

（あいつら…僕を狙っている！殆ど使い魔じゃないかあつ！？何かどんどん凶悪化してるぞ…！）

青くなるユーノと、ちょっと決まりが悪そうに腕組みするのはにクロノが、

「き…君達の間で、何か見解の相違でも…？」

ユーノが声のした方を見ると、顔面蒼白で固まっているクロノの姿が有った。十歩位後退りしているが、誰が今の彼を責められようか…

何やかんやで目的の部屋に着いた様だ。クロノはなのは達を促し部屋に入る。

「艦長、来て貰いました…」

「む…？」

部屋に入ったのはは思わず声を洩らした。

SFの様な部屋の中が『和』テイストだったからだ。盆栽が並べられ、満開の桜が植えられた室内は日本庭園の様である。

部屋の真ん中に茶道の野外のお茶会『野点』（のだて）の道具一式が並べられている。

その紅い敷物に正座している緑色の髪をした美女が、なのは達を見て優しい笑みを浮かべた。

「大変だったわね、私は時空管理局所属アースラ艦長『リンディ・ハラウン』です」

「僕は『流派東方不敗』高町なのは、無敵を目指す拳法家です」

なのはは左手の平に拳を当て、拳法家特有の挨拶をする。一応敬語も使えるのだ。

「僕はユーノ・スクライアと言います」

続いてユーノも（大変だったのはクロノの方ですよ…）と思いながらも挨拶をする。

リンディは少しなのはの自己紹介に怪訝な顔をしたが、直ぐにニッコリと笑い、2人に座る様に進めた。

「そうですか…あの『ロストロギア・ジュエルシード』を発掘したのはあなたでしたか…」

一通りの事情をユーノから聞いたリンディは、納得した表情を見せた。

「…それで僕が回収しようと…」

ユーノは目を伏せる、落ち込んだ様子だ。クロノがそんなユーノを怒った様に見すえ、

「だけど、それは同時に無謀でもある…！」

「まあ…そう言うなクロノよ…男子たるもの退く訳にはいかぬ時も有るのだ…」

なのはは見事な正座で、出された和菓子と抹茶をたしなみながら静かに言うが、少し顔をしかめる。

小学生のお子ちゃま味覚にはまだ早かった様だ。

(何なんだ…この子は…?)

クロノは異様なまでの威厳と風格を漂わせているなのはに気圧されるのであった。

それはともかく、リンディは『ロストロギア』や『ジュエルシード』について、なのはに説明してくれた。

ロストロギアは異常な程、科学や技術が発達し過ぎた結果、滅んでしまった次元世界の遺産の総称で、物によっては世界を滅ぼしかねないものであると言う。

「なる程…今考えてみると『デビルガンダム』もロストロギアだったのかもしれない…」

感慨深そうに呟くのはだが、リンディとクロノは?という顔ををした。不審に思いながらもクロノが更に説明する。

「『ジュエルシード』は次元干渉型の高エネルギー結晶体、複数個集めて発動させれば『次元震』はおろか最悪『次元断層』を引き起こして、次元世界の一つや二つ簡単に消滅させてしまう…」

「そんなに物騒ぎな物かのう…あっさり壊れおつたが…」

「はっ…?」

なのはがポツリと洩らしたセリフにリンディとクロノが素っ頓狂な声を出した。

クロノが何か思い出した顔をし、

「そういえば…こちらで次元震を確認した時…次元震が妙な消え方を…まるで無理矢理消し飛ばしたかの様な…まさか…」

「だから儂が壊したと言っておろう…」

なのはは平然と言う。続いてユーノが何とも言えない表情をして、

「…本当です…ガンダムファイターという人達は色々ともんでもなくて…」

「えええええっ!?!どどうやって!?!」

リンディとクロノの声が綺麗にハモる。さすが親子息がぴったりである。なのはは不敵に笑みを浮かべ、

「無論、気合いでだ！『流派東方不敗』に砕けぬものなど無いっ！」

雄々しく拳を掲げるのはである。背後に燃え盛る炎が見えた気がした。

（（気合いで砕けたら苦労は要らない！この子何者！？）（

絶句するリンディとクロノだが、気を取り直したリンディが、

「気合いはともかく、二度とやってはいけません！ヘタをしたら爆発とか、とんでもない事になるかもしれませんから！！」

怒られてしまった…だがどこ吹く風なのは見て、リンディ提督は関わり合いになると、とんでもない迷惑を掛けられる気がした。

気を落ち着ける為に、何故か茶釜の横に置いていた砂糖壺から砂糖を山盛りにすくってお茶に入れようとする。

日本文化かぶれなのだが、抹茶の苦味がちょっと合わなくて、砂糖を入れて飲んでいるのだ。その時、

「待たれよリンディ殿…！」

なのはの鋭い声が飛んだ。リンディはきょんととして、

「な…何？なのはさん…」

「リンディ殿…もしやその砂糖をお茶に入れるつもりではあるまいな…？」

リンディ提督はテヘツとばかりに笑うと、

「ちょっと苦味が苦手で…」

なのはは静かに首を横に振り、

「無理をするからそういう事になる、良いか？茶の心は『もてなしの心』！すなわちもてなす側ともてなされる側との命を賭けた真剣勝負なり！！（なのはの勝手な解釈です）」

「其処までのものとは…！」

ガーンと衝撃を受ける今年三十うん歳のリンディ・ハラオウンであった。

「その真剣勝負の場にて茶に砂糖を入れるなど、闘いの場に置いて敵に背を向け、負けを認めるに等しき事！喫茶翠屋の娘として敢えて言わせて貰おう！！」

などと始まり、30分程自然との調和だのを茶道の成り立ちなどを暑…熱く語り、何か感激したリンディとお茶談義の場と化した…

「なら…苦味が苦手な場合どうしたらいいのかしら…？」

「最初から無理をせず、煎茶から始めるのが良からう、煎茶道なるものもある！これからがリンディ殿の、茶道家ファイターとしての第一歩となろうぞ！！」

やけに的確なアドバイスを要らぬ煽りと共に暑く語るのはであった。

（何て凄まじくどうでもいい話なんだ…今まで真面目な話をしていた筈なのに…）

ユーノは深々とため息を吐いた。今のでまた一つ彼の幸せが逃げたのかもしれない…

さすがにお茶談義に我慢しきれなくなったクロノが呆れた様子で声を掛ける。

「母さ…艦長…話が思いつきり逸れてます!」

「あら?ごめんなさい、なのはさんの話があんまりになるんでいいね…」

照れ隠しでオホホと笑うリンディ提督であつた。何気にノリがいい。少々照れた様子でコホンと咳払いをしたリンディはなのはとユーノを見ると、

「『ロストログア』は然るべき手続きをもつて、然るべき場所に保管しなければいけません…そういう訳なので、これより『ジュエルシード』の回収は私達が担当します」

言い方は柔らかかったが、ユーノは思わず拳を握り締めていた。向こうが言っている事が正しいのは判っている。

しかし、はいそうですかと返事をするには納得行かない気持ちが強かった。だがクロノが追い討ちを掛ける様に、

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻るといい…専門家に任せるのが一番なんだ…」

もつともな意見だった。しかしなのはがそう簡単に引き下がるとは思えない。ユーノは隣の偉そうな少女に視線をやる。なのはは静かに口を開いた。

「そういう事ならば、そちらに任せよう…」

「なのはっ!?!」

意外な返事にユーノは驚いてしまう。絶対引き下がらないと思っていたからだ。ぽかんとするユーノを横目に、

「ならば…こちらが持っている『ジュエルシード』を渡して置こう…色々有って1個しかないがな…」

(えっ1個…?確か、こっちは2個持ってる筈…)

首を傾げるユーノ。リンディは少し残念そうだが、クロノは安心し

た様子で、

「それじゃあ…後はあの金髪の子の事を知っていたら教えて貰いたいんだが…」

なのはは神妙に頷いてクロノを見ると、

「あ奴の名は『ファイト・デストラップ』女装させられている男子だ…親の趣味であの様な格好をさせている、髪もカツラで顔も塗りたくっていて原型を留めておらん…その内自分が女子だと思い込んでしまった哀れな子供よ…」

「えっ、そうなのかい？酷いな…」

あんまりな話を聞いたクロノは同情が入り混じった表情をする。

（なのはあっ！？）

とんでもないデタラメを言い出したなのはにビックリするユーノだが、彼女がこちらに向かってニヤリと笑ったのを見て、その考えを察した。

高町なのはは管理局を出し抜く気なのだと…

「くしゅんっ！」

その頃まんまと『ジュエルシード』を手に入れ、マンションにたどり着いていたフェイトはくしゃみをしていた。

何処かであんまりな噂をされている気がして、とてもやな感じを覚えた…

つづく

第12話 師匠語るの巻（後書き）

皆さんお待ちかねえっ!!

ジュエルシード探索を開始する管理局に、苦闘するフェイトとアルフ。なのはは決意を固め、自ら死地へと赴いて行くのです。

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠すつとぼけるの巻』にレディイツ、ゴオオオウウッ!!

第13話 師匠すつとぼけるの巻（前書き）

それは平凡な小学3年生だった筈の儂、高町なのはに訪れた小さな事件：

新たな出会いを契機に、再び怒涛の如く動きだす運命、地獄の森を進んで行く闘志を照らす熱い炎は、必ずや心の中にある！

愚直に信じて進むと赤く燃える東方に誓ったからには、行き先がたとえ暗闇の空でも儂の闘志で赤く染め上げてくれようぞ！

魔闘少女リリカルマスターなのは、レディイツ、ゴオオオウウツ！！

いい加減怒られる気がしてきました…

第13話 師匠すつとぼけるの巻

赤く燃える夕日（残念ながら西日である）に照らされた海鳴臨海公園に、なのはとユーノは戻って来ていた。

『アースラ』の転移ポートで元の場所に帰して貰ったのである。

「それで…なのははこれからどうするんだい…？」

少年の姿のユーノは、隣で腕組みして夕日を眺める偉そうな少女に聞いてみる。

管理局を出し抜く気満々の彼女が不安でもあった。

「僕はフェイトを弟子にする、ユーノは『ジュエルシード』を悪用されたく無い、そうだな…？」

「うん…」

ユーノは力無く頷いた。発掘してしまった身としては、リンディの言う通りにするのは後ろめたさがある。なのははそんなユーノをビシッとばかりに指差し、

「今さら引き下がるのは納得が行かんだろう？ いや…お前の中の男

が許さん筈だ、そうだな!？」

「なのはは逃げ場が無くなる様な事を言うね……」

ユーノは直球のなのはの言葉に冷や汗をかくが、少し考えた後にキツと表情を引き締め、

「分かったよなのは、今更逃げる訳にはいかない、最後まで付き合うよ!」

「良くぞ言ったユーノよ!」

なのはは笑みを浮かべて満足げに頷いた。ユーノは不覚にもその笑みにドキリとしてしまう。

無駄に可愛いのはは困るなあ……とユーノは思ってしまった。

見てくれはユーノと同じ年の美少女なので、たまにリアクションに困る事がある。

そんな彼の複雑なオトコ心はお構いなしに、なのはは腕を無駄にオーバーにクロスさせ、

「そういう訳だ管理局に先んじて、フェイトとジュエルシードを確保すれば良いっ!これぞ一挙両得!」

自信たっぷりの言葉にユーノは苦笑するが、気になった事を聞いてみる。

「それで…ジュエルシードを餌にあの子達と交渉するんだね、でも悪い目的に使うつもりだったら…？あの子達はともかく、誰かやらせてる人間が居そうだけど…」

なのはは獰猛な笑みを浮かべて、見かけだけは可愛らしい拳をグイッとユーノの前に突き出し、

「その時は黒幕を叩き潰してやれば良いだけの事よ！！」

とっても分かり易いのはらしい答えであった。その時のなのはは全く容赦しないだろう。

その時の光景が目には浮かぶようである。

しかしユーノは心配になった。

「でも…そう簡単に行くかなあ…？管理局の船には色々なセンサーとかが付いている筈だし…出し抜けるかな…？」

「心配は無用だ、細工はりゅうりゅう、これを見よ！！」

不敵な表情のなのはから、によきによきと小さな影達が湧いて…
いや出て来た。言わずと知れたミニなのは達である。

「うわっ！出たあっ！！」

ユーノは思わず後退ってしまった。ミニなのは達は凶悪な笑いを浮かべ、彼を舐め回す様に視線を送る。

「ふふふ…ユーノよ、良く見てみい…」

「えっ…？」

なのはの言葉に、恐る恐る彼女の肩にたむろってるミニ達を見ると、

「あっ！いっぴ…1人足りない！？」

ユーノはギロリとミニ達に睨まれて慌てて言い直しておく。確か7人だった筈のミニ達が、6人しか居ない事に気が付いた。

前に体の7ヶ所を（尻尾含む）関節技で極められて、あの世を垣間見たユーノが忘れる訳が無い。

「…ま…まさか…」

「ぬわはははっ！そのまさかよ！兵法とは悪戯に兵力をぶつけるだけのものにあらず！敵を攪乱し勝てる状況を作り出すものなり！！」

なのはは高笑いして赤く燃える夕日に目をやり、

「さあ、これから忙しくなるぞ！見事管理局を出し抜いて見せようぞ！見よユーノ、東方は赤く燃えているうっつ！！」

と沈む夕日に向かって力強く拳を向けるのであった。
もちろん西日なのは分かっているが、ノリというやつである。

場面は変わり、此処は次元の羽間に係留中の『アースラ』のモニタールームである。

「凄いや…どっちもAAAクラスの魔導師だよっ」

16歳になる茶色の髪をショートカットにした少女、アースラのオペレーター主任『エイミィ・リミエツタ』は、計測中のなのはとフエイトの魔力数値を見て、感嘆の声を上げた。

隣で同じくモニターを見ているクロノは複雑な表情である。なのはとフエイトの魔力値は相当なものらしい。

エイミィはモニターに映るのはを見て、

「この紫の服の子、殆ど魔力を使ってないんだよね…一体何の力なんだろクロノ君…？」

エイミィは、武装局員達に襲い掛かるミニなのは達を見て、「うっはあゝっ、何これえゝっ？」などと声を上げている。

「…『流派東方不敗』という、この世界の『シューティングアーツ』みたいなものらしい…此処にはあんなのがさらに居るんだらうか…？まだ幼い女の子まであんな力を…」

さすがにクロノも背筋が寒くなる気がした。

実際の所流派東方不敗が使えるのは、この世界でなのは1人なのだが、色々勘違いしている様である。

エイミイは悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「クロノ君の好みっぽい可愛い子なんだけどねっ？」

「恐ろしい事言わないでくれっ！僕は危うく死ぬ所だったんだぞお
おっ！！」

クロノは殆ど涙目で絶叫した。うっかり息の根を止められる所だった身としては無理も無い。

「あはははっ、ごめんごめん」

「まったく……」

ぶーたれるクロノがふと視線を落とした時、何か小さな人影を見た気がしてハツとした。

キョロキョロして辺りを見回すが、何も見つからない。

「どうしたの？クロノ君」

「いや…何でも無い…気のせいだろう…」

疲れているんだろうと思う。色々非常識な経験をしたせいだ。今日は早く休んでおこうと思うクロノであった。

そのクロノを物陰から見て、邪悪な笑みを浮かべるミニなのはの姿が有った…

その夜、周りの夜景の灯りが射し込む暗い部屋の中、フェイトはソファーに倒れ込んでいた。その表情は暗くて良く見えない…

「フェイトお…」

ソファー横のアルフは心配そうにフェイトに声を掛けた。
金髪の少女は少し苦しげに、優しい使い魔の少女を見上げ、

「大丈夫だよ……」

と儚げに笑みを浮かべた時、

「甘いぞフェイトっ！たかが食休みで何を雰囲気を出している！！」

声が響いたかと思うと、室内に小さな竜巻が巻き起こった。その中から腕組みをした覆面ちびっ子が姿を現す。

シュバルツ・シユベスターであった。

フェイトは只お腹いっぱい、食休みをしていただけである。ちなみに今日フェイトは殆ど何もしていない。

シュバルツは、あれ以来フェイト達の食事を作り、何処からともなく現れる様になっていた。

フェイト達も『時の庭園』での一件以来、シュバルツを何となく信用する様になっていた。

「管理局が出て来た様だな……」

シュバルツの言葉にアルフは深刻な表情をしてフェイトを見ると、

「管理局まで出て来たんじゃないや、もつどうにもならないよ…」

「…大丈夫だよ…」

フェイトはお腹をさすりながら身を起こした。そろそろお腹がこなれたらしい。何だか悲壮感の欠片も無い…

きちんと探索を続けているが、シュバルツの食事と、最低限の休息を義務付けられているので体調は万全である。顔色がたいへん良い。

「心配するな…管理局は私が引き受けよう…」

シュバルツの心強い言葉だった。確かになのはと互角以上の戦闘能力を持つシュバルツの申し出はありがたい。

覆面ちびっ子はそこまで言った所で一旦言葉を切り、フェイトを見ると、

「何なら『高町なのは』も私が引き受けてもいいが…?」

「うっんっ、あの子は私が…!」

フエイトは思わず声を上げていた。このまま負けっぱなしは嫌だった。

（そんな事をしたら…きつとあの子に呆れられる…）

それだけは我慢出来なかった。そんな彼女の表情を見たシュバルツは、満足げに頷く。

「良く言った！フエイト・テストロッサ！高町なのはに、お前の力見せ付けてやるのだ！！」

シュバルツの暑くる…熱い激励を受け、コクリと頷くフエイト。アルフは微妙な顔をしてシュバルツに、

「何か目的がズレて来てないかい…？まずはジュエルシード集めだろ…？」

たしなめるつもりで文句を言ってみたが、シュバルはカッと目を見開き、

「そんな事はどうでもいいっ！！」

「良かないわいっ！この覆面ちびっ子おっ！！」

シュバルツの身も蓋もない即答にアルフはマッハの速度でツッコミを入れた。

次の日：小学校の教室になのはの姿は無かった。

「そういう訳で、高町さんはご家庭の事情で何日か学校をお休みするそうです。でも病気や怪我は高町さんにはまず有り得ませんし、不幸な事が有った訳でも無いので、全く心配有りません」

言葉通り担任の女先生は、全く心配していない調子で欠席の理由を話した。

同級生達も「師匠だからなあ……」「山に修行にでも行ったんじゃね？」などといった調子である。

そんな中、アリサとすずかは、ポツンと空いているのはの机を見て、ニヤリと笑い合う。事情は2人共知っているのだ。

フェイトを追う為に家族に事情を話したなのは、とりあえず融通の利くすずかの家を拠点に動く事にしたのである。

アリスもすずかも、なのはを全面的にバックアップする気満々であった。

「雑魚があつ！叩き潰してくれるわあつ！！」

人気の無い森に可愛い声だが、じじくさい言葉遣いの声が轟いた。

声の主、高町なのはは目の前のジュエルシードと鳥が融合したお化け怪鳥に向け、右腕の『レイジング・ハート』を向けた。

その手のひらから闇色の光弾が次々と飛び出し、怪鳥に炸裂する。

なのはの新魔法かと思いきや『ダークネスフィンガー』の応用技『ダークネスショット』である。

魔法を＋する事によって、マスターガンダムの技を使える様になったのだ。また一步人間凶器いや…人外凶器に近付いたのはである。

絶叫を上げる怪鳥に間髪入れずなのはは、右手を構えて突っ込んだ。

「ダあああクネス、フィンガああっ！！」

怪鳥の顔面に、なのはの右手がグワシッとばかりに叩き込まれた。
絶叫する怪鳥。なのはは叫ぶ。

「爆う発ううっ！！」

怪鳥はダークネスフィンガーを受け、光の粒子となって砕け散ってしまった。

怪鳥が消えた場所から飛び去って行く小鳥と、青く輝くジュエルシードが現れる。

なのははレイジング・ハートで無事ジュエルシードを確保した。この間に要した時間は僅か5秒。

（さすがにあれだけ壊すと加減が分かるんだな…）

後ろで見ていた人間姿のユーノはホッと胸を撫で下ろした。転移魔法でなのはを此处まで連れて来たのである。

「ユーノよ、そろそろクロノ達が来る頃だ」

なのははそう言うのとバリアジャケットを解除し私服姿になると、レイジング・ハートを木陰に隠して置く。

暫くして地面に魔法陣が浮き出て来たかと思うと、クロノ以下数名の武装局員が現れた。

クロノは、なのはの姿を見てギョツとしてしまう。

「なっ何故君達が此处に？」

なのはは相変わらずの腕組みでふんぞり返って、

「ふっ… たまたま修行に入った所で偶然ジュエルシードの気を捉えてのっ… 来てみたが既に誰も居らなんだ…」

しれっと大嘘を言うなのはである。クロノは疑わしそうな目で見るが、見る所デバイスも持っていない様子だ。

それに発動したジュエルシードの反応はアースラが最初に捉えている。

魔法素人のなのはと、まだ子供のユーノが先回り出来るとは思えなかった。

只…反応をキャッチしてクロノ達が現場に向かおうとした時、機械トラブルで探査機の電源が落ちてしまった。

お陰で数十秒程全てのモニターとセンサーが麻痺し、到着が遅れてしまったのである。

（…偶然なんだろうか…？）

首を捻るクロノになのはは実に残念そうな顔をして、

「クロノよ、挫けるでないぞ、これに負けず精進せよ！ぬわっはっはっ！！」

高笑いしてクロノの背中をバンバン叩くと、ユーノを引き連れてさっさと去って行った。

ぬけぬけとはこういうのを言うのだろう。

歩きながらなのははニヤリと黒い笑いをし、

「どうやらバレてはおらん様だな…分身が上手くやってくれおった、ユーノよ…これが兵法というものよ」

どうやらアースラに置いて来たミニなのはが色々と工作をしたらしい。

ユーノはアースラの中を人知れず徘徊し、凶悪な笑みを浮かべるミニなのはの姿を思い浮かべてゾツとした。

それともう一つ思ったのは（この子を敵に回すのだけは絶対に避けよう）という事だった。

さて…話を戻すと、ミニなのはは、アースラの機械に細工を施し、状況を本体であるなのはに伝えた。

それを受けた彼女はユーノの転移魔法で先回りする事に成功したという訳である。

ユーノは、何で次元空間のアースラに居るミニと連絡が取れるのか疑問に思ったが、きつと「流派東方不敗に不可能は無い！」の一言で終わりそうなので聞かなかった。

だが、どうしても気になったのは「なのなの」しか言えないミニとなのはがどうやって話をしているのかという事だった。

つづく

第13話 師匠すつとぼけるの巻（後書き）

バカ話で少しでも明るくなるといいなあ…などと身の程知らずな事を少しだけ思っておきます。

ではウソ次回予告を…

皆さんお待ちかねえっ！！

ついに激突する時空管理局とフェイト達、なのははこの争いに死力を尽くして止めようとするのです！しかし両者の争いは泥沼と化して行きます。なのはの叫びは届くのでしょうか！？

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠見てるだけの巻』にレディイツ、ゴオオオウウッ！！

第14話 師匠見てるだけの巻（前書き）

なのはのエイプリルフルネタ。

「4月馬鹿者があつー!!」

完

失礼しました…さて皆さん…今回なのはの前に立ちふさがるは、デビルガンダム四天王に、シャッフル同盟、ナンバー百まで居るナンバーズ。

更にはフツケバインまで総掛かりでなのはに襲い掛かって来るのです。

なのははどう立ち向かって行くのでしょうか!?

それでは魔導師ファイト、レディイツ、ゴオオウウツ!!

エイプリルフルなので、何時もより嘘ナレーションが酷くなっております。

第14話 師匠見てるだけの巻

「うわあっ!？」

「ぐはっ!！」

武装局員の悲鳴が林の中に木霊する。『ジュエルシード』確保に出動した局員達に、金髪の少女と橙色の毛並みの狼が襲い掛かった。

フェイトとアルフである。ジュエルシードを横取りする為の襲撃だ。あっという間に蹴散らされる局員達。さすがに2人共強い。

「其処までだっ!！」

局員達をのしたフェイトがジュエルシードを手にとろうとした時、制止する少年の声が響く。

現れる黒衣の少年。クロノ執務官である。フェイトとアルフは戦闘態勢で身構えた。

前回は現れて直ぐに、なのはにぶっ飛ばされていたので実力の程は分からないが、油断は禁物な気がした。

一撃でやられたのは相手が悪過ぎなので、参考にはならないだろう。自分達もコテンパンにやられたのだから…

「時空管理局・執務官クロノ・ハラオウンだ、抵抗は止めるんだ！」
デバイスを構えるクロノ。フェイトもバルディッシュを構えて臨戦態勢である。しかしクロノはそこで、とても同情する様な目で彼女を見ると、

「目を覚ますんだ！そんな事は間違っている！！」

物凄く気の毒な人を見る目でフェイトに呼び掛けた。
気のせいか、ひどく同情されている気がする。

そつえば戦っている最中、武装局員達もやけに生暖かい目でこちらを見ていた気がした。

何か分からないが、とっても失礼な目で見られている気がするフェイトだが…

「目を覚ませ！今ならまだ引き返せる、君はれっきとした男なんだからっつ！？」

「…えっ…？」

「なっ!?!」

クロノのともでも発言に、フェイトとアルフは素っ頓狂な声を上げた。

クロノは思いっきり、なのはのデタラメ情報を真に受けている。

フェイトは衝撃を受けた顔をして（ちよつと涙目）

「…アルフ…私って男の子に見えるのかな…」

「そんな事ある訳無いだろ! フェイトはどこから見ても立派な女の子だよ!」

アルフは慌てて、ずず〜んと凹みそうになるフェイトを元氣付けるが、さすがにいじめてしまいたくなるフェイトであった。

アルフは頭に来て、クロノをギロリと睨み付ける。

「言うに事欠いて何て滅茶苦茶な事を…! アンタ命が惜しくないみたいだねえっ!」

怒りのあまり牙を剥いて、クロノに言い返そうとした時だ。

「フハハハッ、其処までだっ!!」

聞き覚えの有る偉そうなちびっ子の声が辺りに響き渡った。

クロノはハッとして声のした方向を見ると、近くの小さな沼から水柱が勢い良く吹き上がる。

「何だあっ!？」

驚くクロノ。何故なら、その水柱の上に腕組みをした覆面少女が立っていたからである。

無駄に芝居がかった派手な登場。覆面ちびっ子参上である。

「なっ、何なんだ君はっ!？」

クロノは水柱の上の少女に呼び掛けるが、内心イヤな予感を覚えた。つい最近、息の根を止められそうになった少女と、同じノリを感じたからである。

シュバルツは、十メートルはある水柱から軽々と飛び降りると、クロノの前にストンと着地し、

「フハハハッ、私の名は『シュバルツ・シュベスター』ネオベルカの魔導師ファイターだ。覚えて置いて貰おう!」

この間はネオミッドだのネオドイツだの言っていた気がするが…まあ、管理局のクロノにネオドイツと言っても解らないと思ったのだろつ。

「…何だよネオベルカって…魔導師ファイター？君はふざけているのか！？」

勿論ネオベルカも魔導師ファイターも聞いた事も無い。クロノはイヤな予感を感じつつ突っ込んでみるが…

「私は何時でも本気だ！！」

シュバルツは心外だと言わんばかりに言い返す。これが素の反応だから質が悪い。

今こそクロノはイヤな予感の理由に思い当たった。

（この覆面、なのはって子と感じがそっくりだ！まさか同類！？）

思わず後退りし掛けるが、仕事なのでそういう訳にも行かない。勤め人は辛いのだ…

「どつ、何処の誰かは知らないが、彼らは危険な事をしているんだ。済まないが退いていてくれないか…？」

シュバルツは腕組みして静かに目を閉じていたが、カッと目を見開き、

「そういう訳には行かん！何故ならこの不幸なオカマ2人は私の弟達だからだ！！」

「ちょっと待てえええいつ！！」

いつの間にか、フェイトとセットでオカマにされてしまったアルフが、たまらず声を上げるが…

《今は私に合わせるアルフ！》

シュバルツが念話を送って来た。アルフはプリプリ怒りながら、

《どういつ事だよ！》

《恐らく管理局に出鱈目を吹き込んだのは、高町なのはだろう…お前達の素性が分からない様にな…だからこのまま通すのだ!》

えええゝっ!?!となるアルフとフェイト。いくら素性を隠す為とはいえ、2人の精神ダメージがキツすぎる。シュバルツは構わずクロノに構え、

「そついう訳だ、済まんなクロノ・ハラウンよ!!」

言つが早いがクロノに疾風の如く襲い掛かった。強烈な蹴りが跳ぶ。どう見ても、フェイト達より年下にしか見えないシュバルツに、クロノはツツコミを入れたかったが、反射的に砲撃魔法を放っていた。青い魔法光のナイフが、超至近距離からシュバルツに高速で打ち込まれる。

『非殺傷設定』は掛かっているが、当たれば暫く動けない程のダメージだ。

並みの魔導師なら反応すら出来まい。しかし!

「なっ!?!」

クロノはビツクリして声を上げた。

シュバルツは、至近距離から放たれた弾丸並みの速度の攻撃を、軽く体を振っただけで、ことごとくかわしてしまったからだ。

「そ…そんな馬鹿なあつ…!?!」

人間の反応速度じゃ無い!?!と蒼くなるクロノの前から、不意にシュバルツの姿が消え失せた。

「ばっ馬鹿なっ! 何処へ消えたんだ!?!」

油断無く辺りを見回すクロノ。その足元の影に紅い二つの目が!

「フハハハッ! 私は此処だあつ!?!」

クロノの影の中からシュバルツが、金髪を振り乱して勢い良く飛び出した。ゲルマン忍法『影隠れの術』だ!

「ええええっ!?!」

シュバルツは驚くクロノに向かって、組み合わせた両手をパカッと

開いた。

その手のひらから、金属製の網が投網の様に一気に飛び出しクロノを包む。網が全身に絡みつき動けなくなってしまった。
ゲルマン忍法『アイアンネット』である。

「フッフ…済まん…暫くそうしていてくれ」

もがくクロノを残し、フェイト達の方を見ると、2人共ブツブツ言いながらしゃがみ込んでいじけていた…
色んなものが傷付いたらしい。

その後、シュバルツに（強引に）なだめられたフェイト達は『ジュエルシールド』を奪って立ち去って行った。

その後ろ姿は目的を果たしたのに、エラく落ち込んでいたという…
その間クロノは、何とかアイアンネットから脱出しようともがいていた。

「何だこれ！？バインドかと思ったら、金属製の網じゃないか！重いっつー！！」

クロノは四苦八苦して、何とか魔法で網を破って脱出する事に成功する。

「あの子…こんな重いもの、どうやって持ち歩いてたんだ…？」

と、もったもな疑問を浮かべるクロノだが、ゲルマン忍法に言うだけ野暮というものである。

その一部始終を偉そうに見てるだけの人物が居た。高町なのである。

幾分離れた杉の木のでっぺんに立ち、様子をずっと見守っていたのだ。

見ているだけなのに、何か悪のボスがふんぞり返って嘲笑う様に見えるのは、きつと気のせいだと思いたい…

「今回は少し出遅れた様だな…」

なのはは不敵に下を見下ろして呟いた。フェレット姿のユーノは、風で飛ばされない様にその肩にしがみつinaながら、

「今日はミニにやらせなかったのかい？」

「あまり連続してやらせるとさすが怪しまれよう、何事にも限度が有る…もう少し『ジユエルシード』を集めておきたいでな…」

「交渉には、もう少し必要って訳ね…さすがなのは…老獪だね…」

高町なのは恐ろしい子！と思いつつも、とりあえず誉めておくユーノである。

「ぬわっはっはっ！これぞ『流派東方不敗・兵法術』よ！退き際を心得ぬ者は、自ずと身を滅ぼすなりだ！」

木のてっぺんで豪快に高笑いするなのはである。ユーノはあんまりなのはが体を揺らして笑うので落ちそうになった。

「さて…今日の所は退くぞユーノ！」

ユーノのノの字を言い終わるか終わらないかで、なのはは一気に杉の木から飛び降りる。

ユーノは動きについて行けず、悲鳴を上げて宙を舞った。

――――

月村家

月村家の現当主、月村忍は外出先から自宅に戻って来た。

メイド長のノエルさんに迎えられ、ひと息吐こうとお茶を頼んだ所で、少女達のコロコロ笑う声が入る。

「ああ、今日はアリサちゃんも来てるのね？」

「はい…先程いらっしゃって、今すぐかお嬢様となのはお嬢様と、お話をされておいでで…」

「そうなの、じゃあ少し顔を出して来ないとな」

忍さんは楽しそうな笑い声のする、大きなリビングに向かう。

理由は細かく聞いていないが、なのははここ数日月村家に泊まっている筈なのに姿を見ない。

ついでに何をしているのか聞こうと思った。

忍さんの耳に、なのは達の会話が途切れ途切れに入ってくる。

「クロノ…君て言うんだ…」

「…それなのはは…と…したい訳ね…?」

「何とか…したいものだが…」

忍さんは思わず頬をほころばせた。男の子の話題で盛り上がるなんて、3人共やつぱり女の子ね、などと微笑ましくなった。

忍さんはにこやかにドアを開け、

「いらっしやいアリサちゃん、なのはちゃんもちつとも姿が見えなかったじゃない? みんなで何を楽しそうにお話してるの?」

と声を掛けると、テーブルでお茶を飲みつつ話をしていた3人は挨拶を返した。すずかは、にこやかに姉に笑いかけ、

「うんっ、クロノ君て子がいい手駒になりそうだから、みんなどう誘導して利用しようか考えてたの、こっぴうの兵法って言うんだよね?」

忍さんはその場で絶句してしまった。危うくすっ転ける所だった。

しかし今の妹の言葉で分かった。突っ込んだ理由は聞かない方がいいという事である。

すずかはそんな姉の様子に気付かず微笑んで、

「なのはちゃんの兵法は色々凄いよ、悪い親戚の人達が、またちよつかい掛けて来ても『流派東方不敗・八卦の陣』で返り討ちだよお姉ちゃん」

「そつ…そうなの……？」

忍さんは顔を引きつらせる。妹の行く末がとても不安になった。

なのはとアリサは2人して笑みを浮かべて、すずかを手招きする。すずかもニンマリして相談に戻った。

忍さんがふとテーブルを見ると、フェレット姿のユーノを椅子代わりにして、ビスクレットをハムスターみたいに一生懸命かじっているミニなのはの姿を見付けた。

（えっ？何この小さいなのはちゃんは！？）

辺りを見回すと、部屋にたむろしている猫のお腹に潜り込んでスヤスヤ寝ている奴や、アリサやすずかの頭によじ登っている奴とかが居る。

アリサもすずかも普通に構ってやったり、お菓子をあげたりしていた。

忍さんは今日はきつと疲れてるんだと思う事にしたそうなの……

ちなみにミニ達の椅子代わりにされているユーノは、すずか達に襲い掛からないミニ達を見て、

「この世渡り上手共っ！何で僕はっかり！？」

と叫びたかったが、命が惜しかったので心の中だけで叫びました。

――――

それから10日余りが経った。次元空間に浮かぶ『アースラ』の休憩室でクロノは1人ため息を吐いていた。

結果が思わしくないからである。あれからアースラでは探査機器の故障が続き、フェイト達と謎の覆面少女により『ジュエルシード』

2個を奪われてしまった。

こちらが集められたジュエルシードは1個だけである。

残りの反応が有った分も先を越されたい。散々な結果だとクロノはまた、ため息を吐いた。

実は先を越された分のジュエルシードは全てなのはが持っているのだが…

クロノは色々状況について考えていた。彼は優秀である。伊達に14歳で執務官をやっている訳では無いのだ。

状況に不自然な点を感じたのである。時たまではあるが、度重なる機器の故障に、何度かの先越され、意味するものは…

（アースラに何者かが入り込んでいる！？）

クロノはそう推理した。思い立ったら即決、クロノは直ちにエイミイに知らせ、アースラ全クルーに連絡させた。

《全武装局員に告ぐ、何者かが艦内に侵入の可能性有り、徹底的に艦内の搜索を行って下さい！》

艦内に緊急事態を告げる放送が鳴り響く中、通路を武装局員がデバ

イスを携えて走る。

アースラ内は上へ下への大騒ぎとなった。

ついに侵入がバレたミニなのは、見つかってしまうのであろうか？

つづく

第14話 師匠見てるだけの巻（後書き）

皆さんお待ちかねええっ！！（本当に遅くてすいません）

荒れ狂う海上で闘うなのはの前に、歴代ガンダムが襲い掛かって来るのです！

ツインサテライトキャノンと月光蝶に、〇〇ライザーの猛攻を凌げるのでしょうか！？

決まるか星光碎石波天驚拳！！

魔闘少女リリカルマスターなのは『スタンバイレディーツゴーツ！』にレディーツ、ゴオオウウツ！！

もちろん嘘次回予告も酷くなっております…

第15話 師匠気合いを入れてみるの巻（前書き）

読んで下さっている皆さんありがとうございます！それでは噓ナレ
ーションを、

さて皆さん…優しさとは何でしょう…？世の中には悪い事も満ち溢
れているかもしれませんが、確かに優しさも存在するのです…それ
を高町なのはという少女が示してくれるのかもしれませんが。

それでは魔導師ファイト、レディイツ、ゴオオウウツ！！

第15話 師匠気合いを入れてみるの巻

次元空間に浮かぶ、次元航行艦船『アースラ』は、今てんやわんやの状態である。

侵入者を捜して武装局員が、艦内のあちこちを調べて回っているのだ。

リンディもブリッジに詰めて状況を見守っている所である。

エイミィ達オペレーターは、艦内のセンサーで侵入者を捜そうと躍起になっているが、反応を捉えられない。

そんな中クロノも、何者かの姿を求めて艦内を捜し歩いていた。

年若い執務官は搜索を続けながらも考える。

（一体何者が入り込んだんだ…？最近入った部外者は、あの2人だけだが…

センサーでも反応を捉えられない、余程高性能な結界を装備しているのか…？）

クロノはなのはとユーノを疑ってみるが、そんな技術を魔法素人のなのはと、民間人のユーノが持っているとは考え辛いのだが…

（でも…あの子色々非常識だからな…疑わしいのも事実だけど…まずは侵入者を見付ける事が先決だ！）

クロノは高笑いするなのは顔を思い出してげんなりした表情をするが、とりあえず思考を切り替え、搜索に集中する事にした。

通路を急ぐクロノ。しかしその時アースラを、再び機械トラブルが襲った。

――――

同じ頃、海鳴市の沖合の海上に、フェイトと少女の姿をしたアルフの姿が有った。

空には一面の雷雲。そして海上には、金色の巨大な魔法陣が浮かんでいる。

残りの『ジュエルシード』が海中に有ると推測したフェイトは、魔力流を片っ端から撃ち込んで強制発動させ、まとめて捕まえる魂胆である。

シユバルツが協力してくれる今、管理局相手に焦らなくても良さそうなものだが…

（フェイト…こんな無理しなくても…）

アルフが心配そうに、大規模魔法に集中しているフェイトを見守っている。

なのはが先を越して回収した分の『ジュエルシールド』も、管理局に回収されてしまったと勘違いしているフェイトは焦ってしまった様だ。

いくらシュバルツが強くとも、なのはの存在も気になる。

フェイトは人外凶器少女が、必ずまた現れると確信していた。

それに早くプレシアに『ジュエルシールド』を届けたい。

時間を掛けるだけ不利と、子供なりに思ったフェイトは一発勝負に出たのである。

「はあああああっ！」

フェイトの叫びと共に、無数の魔法雷が海面に撃ち込まれた。魔力を受け震える海に、青白い光が浮き上がって来たかと思うと、6つの光の柱が天を貫く。

「見つけた…！」

肩で息をするフェイト。この魔法は相当に魔力を使ってしまうらしい。

その時、6つの光の柱がぐねぐねとのた打ち、海水の竜巻の如き姿

に変化して行く。ジュエルシードが暴走を始めたのだ。

本番はこれからである。フェイトとアルフは身構えた。

その様子を離れた位置の空中に浮かび、偉そうに腕組みして見ている者が居る。

紫色のバリアジャケットに、風になびくおさげ髪、高町なのはであった。それに少年の姿のユーノが一緒である。

「派手にやつておるな……」

なのははドモンの試合を見守る様に、フェイトの戦いを見つめている。ユーノもその様子を見て、

「一度に6個も？無茶だ、個人で出せる魔力量を超えているよ、このままじゃあの子達が危ないよ！」

人の良いユーノは心配そうに声を上げた。

そうしている間にも、ジュエルシード暴走体はフェイト達に襲い掛かって行く。明らかに苦戦していた。

しかしなのはは微動だにせずフェイト達を見て、

「獅子は我が子を千尋の谷に突き落とすという…儂もそれに習うとしよう…」

「放って置けないと言わないんだね…」

ことわざの正確な意味は判らなかったが、何となく意味を察したユ一ノは顔色を無くす。

なのはは苦戦するフェイトを見つめ、

「儂はフェイトが何処までやれるのかを見たい、何でも手を貸せば良いというものでは無いのだ!!」

「…厳しいんだね……」

ユ一ノはため息を吐いた。その間にもフェイトは戦っている。

迫る巨大な暴走体に『バルディッシュ』を電光の鎌に変形させ立ち向かうが、跳ね飛ばされ海中にたたき込まれてしまう。

「フェイトっ！フェイトおおっ！！」

助けに向かおうとするアルフも暴走体に絡み着かれ、動けなくなっ
てしまった。

フェイトは追撃を何とか逃れて海上に飛び上がったが、魔力が限界
の様だ。

バルディッシュの電光の刃が電池切れした様に明滅する。フェイト
も消耗して息が荒い。

このままでは彼女達がやられるのは時間の問題に見えた。

「このままじゃあの子達やられてしまうよ！！」

ユーノが悲痛な声を上げた。なのはしばらく考え込む様に無言だ
ったが、

「行くとするかユーノよ……」

「なのは！」

ユーノは何だかんだ言ってもなのはは優しいなと感激し、飛び出す
少女の後に続いた。

――――
警告音が鳴り響くアースラの通路を、クロノは侵入者を捜して走っていた。

潜入がバレた事に気付いた侵入者は、開き直ったとばかりにセンサーの類の配線をおおっぴらに切ってしまったのだ。

それに気付き、駆けつけた武装局員達が侵入者に攻撃を受け倒されてしまった。

駆けつけたクロノは、頭にたんこぶをこさえて気絶していた局員を起こして話を聞いたが、一瞬で倒されたので襲撃者の姿は見えていない。

その後艦内を捜したがやはり見付けられなかった。

クロノは焦っていた。今アースラはセンサー類の修理が終わるまで、目隠しをされたも同然なのだ。

（クソっ！何処に隠れているんだ！？）

焦る気持ちを何とか鎮め、見落としが無いか頭の中を整理する。後一つ捜していない場所があった。自分の部屋である。

クロノは早速自分の部屋に向かう。デバイスを構え、用心しながら扉を開けた。

センサーが感知して点く筈の部屋の灯りが点かない。暗い中、注意深く部屋の中に入ると、床に何かが散乱している。

通路の灯りに照らし出されたものは、お菓子の空き袋だった。

クロノの密かな楽しみ、クラナガンでしか売っていないゲツちゃん酢漬けクラナガンイカの空き袋。

（ん…？）

その時クロノは、通路の灯りが届かない奥のベッドの辺りから、カサコソ音が聞こえて来るのに気付いた。

目を凝らすとベッドの上に何かが蠢いていて、一心不乱にゲツちゃん酢漬けクラナガンイカを食べている。

「動くなっ！」

クロノは何者かにデバイスを向けて叫んだ。

「…のおおっ！！」

何者かは奇声を上げると、凄まじいスピードでクロノに迫る。

とっさに捕まえ様としたが、そいつはクロノの股下を素速くぐぐり抜けて、部屋の外へ駆け出した。

見ると枕カバー？というか、枕カバーにくるまった小さな何者かである。一瞬動物でも紛れ込んだのかと思ったが、

（誰かの使い魔？それとも変身魔法か！？）

その可能性に思い立ったクロノは直ぐに後を追う。

SF的な通路の中、逃げる枕カバーを追う黒衣の少年…シユールな光景であった。

クロノの連絡を受け、一番近くに居た武装局員達も駆けつけて来る。

「そいつを捕まえるんだ！！」

クロノの指示に武装局員達は、チヨロチヨロ動き回る枕カバーを捕まえ様と手を伸ばす。

だが枕カバーは、ゴムボールみたいに壁やら床をピョンピョン跳ね回り、大きさに合わない破壊力で武装局員達を蹴散らして行く。

「クソっ！」

クロノは捕縛魔法を繰り出そうとするが、枕カバーは敏感に察して小猿みたいなすばしっこさで逃げ出した。

後を追うクロノだが、枕カバーの逃げる方向に気付き、

（あっちは転移ポートが有る、クソっ逃がすかあっ！）

彼は動く枕カバー（ミニなのは）に追い付こうと全力で猛ダッシュした。

――――

フェイトは肩で荒く息を吐いた。竜巻の怪物が迫って来ている。ギリツと歯を食いしばった時だった。

「何を弱気になっておるかあっ!!」

とても偉そうな少女の声が響き渡る。

フェイトが声のした方向を見上げると、腕組みして宙に浮かぶなのはの姿があった。

「フェイトの邪魔をするなああっ!!」

捕らわれたアルフは力づくで暴走体から脱出し、怒りの形相でなのはに殴り掛かろうとする。

「待ってくれっ!」

その時ユーノが目の前に現れて、魔法障壁でアルフを押し留めた。

「僕達は戦いに来たんじゃない！今はジュエルシードを止めないと、融合して手がつけられない状態になるかもしれない！」

そう言うとなのは達の方を促す。

アルフも疑わしそうにしながらも、なのはを見た。

なのはは息も絶え絶えのフェイトにカツと目を見開き、

「喝！！其処までかあつ！貴様の力はその程度なのかあつ！あれしきの敵に打ち勝てんで何とする！立てえいっ！立ってみせえいっ！」

魂の激励である。フェイトはバルディッシュを持つ手を強く握り締めた。そこまで言われては彼女も奮い立つしか無い。

なのはにみつともない姿を晒すのだけは嫌だった。その時海面が勢い良く噴き出し、

「その通り！甘いぞフェイトっ！！」

噴き出した水柱の上に立つ覆面ちびっ子。シュバルツ参上である。こちらでも助けもせずフェイトを陰で見ていた様だ。

「ふっ…シュバルツよ、珍しく意見が合うではないか…」

「フッ……」

なのはは不適に笑う。シュバルツも覆面越しに笑みを浮かべた。再び覆面ちびっ子はフェイトをクワツとばかりに見ると、

「フェイト・テストロッサよ！此处で挫けてどうする？ジュエルシードを集めるのだろう？」

行くのだフェイト・テストロッサ！お前の力を高町なのはに見せてやるのだ！！」

「私は母さんの為にも絶対諦めない！」

フェイトは吼えた。満足げな表情のなのはとシュバルツは、後押しの意味で同時に叫ぶ。

「行けっ！フェイトっ！！」

2人の激励を受け、フェイトは勢い良くバルディッシュを構えた。

ユーノは（激励だけ！？行かないの！？）と思い、アルフも邪魔に
来た訳では無いとは認めたものの（アンタ達見てるだけ？）とツツ
コミたくなった。

しかしユーノもアルフも、1人立ち向かうフェイトを応援したくな
ってしまふ。

金髪の黒衣の少女は荒れ狂う暴走体を睨み付け、一気に突入した。

「はあああああああつ！！」

バルディッシュを思い切り振りかぶる。一撃が暴走体に見事に叩き
込まれ…

べしいっ

たと思ったら、逆に一撃ですぽんと吹っ飛ばされ、パンツと見
事な音を上げて海に落ちた。

飛び込みで失敗した時の様に腹を思い切り打ったらしい。

水死体みたいに海にぷかりと浮かぶフェイト。勢いだけでは無理が
あつたようだ…

「フェイトおおおっ！？」

アルフは慌てて降下してフェイトを介抱する。フェイトは弱々しい笑みを浮かべ、

「…平気だよ……」

と強がるが顔面もモロに打ったので、鼻血がタラリと出ていて締まらなかった。アルフはその顔を見て、

（フェイトお…すっかり天然ボケキャラが板に着いて来てるよ…）

などと思ってしまった。

なのははその様子を訝し気に見て、

「おかしいのお…？あの勢いなら行けると思ったのだが…」

「ウム…スーパーモードが発動して反撃する流れなのだが…修行が足りなかった様だな残念だ…」

シュバルツも腕組みをして、さも残念そうに首を振った。

「残念なのはアンタらの常識と頭の中だああっ！！」

ユーノは力の限りの声を振り絞ってツツコミを入れた。なのはは意外そうな顔をし、

「何を言っているのだユーノ、人間は無限の可能性を秘めておる、魂の炎を燃やせば砕けぬもの無し！！」

なのはは拳を握り締め、堂々と言い切った。

「魔力の源が気合いで回復したら、誰も苦勞はしないよ！頼むから、なのは達の常識で判断しないで、命が幾つ有っても足りないから！！」

ユーノは立て続けにツツコミを入れエゼエ息を吐いた。

このまま放って置くと、他人も同じ事をやれると勘違いしたまま、どれくらい迷惑を掛ける気がしたからである。

案の定なのはとシュバルツは顔を見合わせて「何と不便な…」だの「明鏡止水なら行けるのでは…？」などと言っている。

更に何か文句を言おうとしたユーノだが、なのは達の後ろを見て顔面蒼白になった。

「大変だあつ！！」

見ると、こんな事をやってる間に6つの暴走体は一つに融合して、更に巨大な海水の竜巻と化していた。

「うわあつ！本当に手が着けられなくなってるうつ！！」

見事なまでに状況が悪化している。ユーノは、本当にこの2人は何しに出て来たんだと、絶望の声を上げた。
あたふたするユーノに、なのはは、

「馬鹿者があつ！男子たるもの、これしきの事で動じるでないわあつ！シュバルツ手を貸せえいっ！！」

「仕方有るまい、長引くと管理局も嗅ぎ付けるか！」

シュバルツも即答し、同時に高速で飛び出し暴走体へ向かう。

「儂の分身がしばらくは時間を稼いでおるが、そろそろまずい！手早く片付ける！遅れるで無いぞ！！」

「言われるまでも無い！そちらこそ遅れをとるなよ！！」

突っ込む2人に、荒れ狂う暴走体が襲い掛かる。

なのはとシュバルツは瞬間移動するかの如くあちこちをシュバツ、シュツバツと移動して攻撃を避け、

「僕は此処であっ！！」

「何処を狙っている！！」

なのはは腰布を解き『マスタークロス』を剣状にして斬り掛かる。
シュバルツは『シユピーゲルブレード』を振り上げ突進だ。

「ぬわあああっ！！」

「はあっ！！」

凄まじい2人の斬撃が、海水で出来ている暴走体の体を切り裂く。
しかしあまりの巨体に効果は薄そうだ。

「チマチマ攻撃しても埒が開かん！同時に行くぞおっ！！」

「応っ！行くぞ高町なのはっ！！」

なのはがまるでバレエダンサーみたいに両手を広げ片足を上げる。

シュバルツはシュピーゲルブレードを展開し、頭上でガツチリと組み合わせた。ユーノはデジャブを感じた。

（この流れは…）

ユーノのイヤな予感を余所に、なのはとシュバルツが同時に叫ぶ。

「超級霸王！！」

「シュツルム・ウントツ！！」

バックに稲妻を走らせて、なのはの体が頭を残して猛回転する気の塊に包まれた。

一方、シュバルツの体が独楽の様に超高速回転を始め、大風が巻き起こる。

「わあああっ！ちよっと待ったああっ！！」

ユーノは慌てて叫ぶが、やっぱり全く話を聞いていない2人は、

「電 影 弾 っ …！」

「ドランクウウンツツッ！！」

渦巻く気の塊と化したなのはと、独楽みたいに高速回転するシュバルツが、とんでもない勢いで超巨大暴走体にぶち当たった。

凄まじい閃光と轟音が響く。激突したなのは上空に舞い上がり、流派東方不敗のポーズをビシッと決め叫ぶ。

「爆う発っ！！！！」

その瞬間、暴走体は大爆発を起こして跡形も無く吹き飛んでしまった。

ちなみにシュバルツは無言で水面に立ち、ブレードを構えて決めポーズである。

爆煙が収まった中、ユーノはジュエルシールドが無事なのか非常に気になった。

あの2人は前にやらかした事が有るので不安だ。

爆発の有った場所になのはとシュバルツが近付いて行くのが見える。

その様子をアルフと、抱きかかえられたフェイトも心配そうに見守っていた。

なのはとシュバルツは何やら唸っていたが、爽やかな笑顔を浮かべてユーノ達を振り返り、

「喜べ！ジュエルシードは無事だ！ぬわっはっはっはっ！！」

シュバルツも満足げに頷いて、宙に浮かぶジュエルシードを示し、

「見ろ、3個も無事に残っているぞ！フハハハハハッ！！」

ユーノとアルフ、フェイトは真っ白になっていた。余りにも堂々と言われたので一瞬意味が解らなかったが、ようやく理解して、

「阿呆かあああつ！結局3個も壊してるじゃないかあつ！アンタら頼むから、もう帰れえええっ！！！」

ユーノとアルフの魂のツツコミが見事にユニゾンした時である。

突如としてその一帯を、紫色をした凄まじいまでの落雷が襲った。

それはまるで「この馬鹿タレ共がああっ！！」と言わんばかりの怒りの落雷であった。

つづく

第15話 師匠気合いを入れてみるの巻（後書き）

どうでもいい駄裏設定です。ゲツちゃん酢漬けクラナガンイカ。レジアス・ゲイツの実家ゲツちゃん食品の主力商品。

クラナガン沖で採れた新鮮なクラナガンイカを酢漬けにした物。（商品記述より抜粋）

最近アニメ『侵略クラナガンイカ娘』とのコラボをした。すいません忘れて下さい…

皆さんお待ちかねえええっ！

雷の猛攻になのはの運命は？そしてミニなのはを追うクロノを危機が襲うのです！そしてついになのはの前に姿を現すプレシア・テスタロッサの恐るべき野望とは！？なのはの闘志は真っ赤に燃え上がるのです！

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠突入するの巻』にレディイツ、ゴオオウウツ！！

第16話 師匠突入すの巻（前書き）

読んで下さって誠にありがとうございます！

Gガンに合っているなと思った、島本和彦先生著作より、島本流にとわざ解釈を一つ。

『七転び八起き』

七回転んだら、起きるのも七回、七転び七起きじゃないのか？計算が合わないとの問いに、

七回倒されても、七回も負けずに立ち上がるなら、最後に魂も一緒に立つ！！

これで計算が合うそうです。グレートだ…

失礼しました…それでは、魔導師ファイト、レディイツ、ゴオオオウウツ！！

第16話 師匠突入すの巻

突如としてなのは達を襲った紫色の落雷。それは凄まじいものであった。

なのは達の居る場所一帯に、落雷の雨といった感じにビカビカと降り注いでいる。

次元跳躍型の砲撃魔法であった。

その攻撃は次元空間に係留していた『アースラ』にも襲い掛かる。只でさえ、ミニなのはのせいで大騒ぎだった艦内は、パニック状態であった。

「何だっ!？」

枕カバーにくるまったミニなのはを追っていたクロノは、砲撃の衝撃に驚いた。

その隙に枕カバーは、武装転移ポートにちょこちょこ駆け込む。ポートが起動を始めていた。

「逃がすかあああっ!!」

クロノは一気に転移ポート内に飛び込み、枕カバーに掴みかかった。

「…のおっ!!」

しかし枕カバーは、巧みにクロノの手をすり抜ける。その時光が2人?を包み込んだ。

「しまった!？」

時既に遅く、クロノとミニなのはは光の中に消えてしまった。

さて…所は戻って、凄まじい魔法砲撃の中なのはは、

「儂は此処だあっ!!」

などと腕組みしながら、降り注ぐ落雷をかわしていた。ユーノもアタフタしながらも、何とか落雷の雨を避ける。

一方フェイトとアルフにとっては、最悪のタイミングであった。

フェイトは大規模魔法で消耗しているのに加え、吹っ飛ばされた衝撃でとっさには動けない。

アルフもそんなフェイトを抱えていて、逃げ遅れてしまった。

「母さん…?」

フェイトが呟いた時、ひときわ大きな落雷の塊が2人を襲った。直撃コースである。

「「!」」

「「危ないっ!!」」

その時なのはとシュバルツが、2人を思いつ切り突き飛ばした。なのはとシュバルツに降り注ぐ雷。

もちろん当たる様な2人では無い。シュパッシュパッと軽々とかわして行く。

しかし馬鹿力で吹っ飛ばされたフェイトとアルフは、タイミング悪く、別の落雷に見事に直撃を食らった。

「「うぎゃああああああああっ!?!」」

フェイトとアルフの悲鳴が仲良く海風に乗って辺りに響いた。

「……」

なのはとシュバルツはその状況を無言で見ていたが、いい笑顔を浮かべ（片方は覆面だが…）

「危ない所であつたな…」

「ウム…私達が居なくば、あれしきでは済まなかった…」

「アンタら頼むから、少しは反省してくれえええつ…！」

コーノは落雷に右往左往しながらも、律儀にツツコミを入れる。ナイスツツコミ根性であった。

ヒュルル〜と海に落下して行くフェイトとアルフ。

慌てて助けに行こうとしたなのはとシュバルツに、ひときわデカい落雷が襲った。

「母さん…？」

シュバルツはハツとして、ついさっき誰かさんが言っていたのと同じセリフを呟いた。一瞬動きが停まる。

「シュバルツ何を呆けておる！！」

なのはの叫びにハツと我に還った覆面ちびっ子は、危ない所で落雷を避けるが…

「シュバルツ貴様…？」

なのはは思わず声を洩らした。

砲撃の余波でシュバルツの覆面が裂け、ハラリとドイツ国旗と同じ配色のマスクが海風に舞う。

「お…お前はっ！？」

露わになったシュバルツの素顔を見て、なのははこの状況に思いつ切りデジャブを感じた。

しかし、それは今はまったく関係ないので置いていて…

「貴様…その顔はっ！？」

なのは驚いて声を洩らす。ユーノは気になって素顔を見ようとするが、シュバルツは直ぐに服の袖で顔を隠してしまった。なのはは少々ウンザリした態度で、

「あれか？また前と同じきよ……」

「ええいつ！言うなあっ！！読んでいる方々全員にバレバレだろうと、まだ秘密にするのがお約束というものだ！！」

シュバルツは慌ててなのはの言葉を、思いっきりのメタ発言で遮る。一応まだ隠し通すつもりらしい。

「こんな事をしている場合では無いっ！！」

誤魔化す様に言い残し、シュバルツは金髪をひるがえして、海に墜ちて行くフェイト達の元に飛ぶ。

その時である。降り注ぐ落雷の中、宙に浮かんでいる『ジュエルシード』と、墜ちて行くフェイト達の真上に、光る魔法陣が浮かび上がった。

「あれは転移魔法！」

ユーノは状況を察して声を上げる。このどさくさに紛れて『ジュエルシード』とフェイト達両方の回収をする気らしい。同じく察したなのは、

「行くぞユーノ!!」

「えっ?なのはどうする気...わあああっ!?!」

なのははポカンとしていたユーノの襟元をむんずとひっ掴み、位置的に近い『ジュエルシード』を転移しようとしているゲートに向かって高速で飛び出した。

「決まっておろう!このまま、フェイトの自宅に乗り込むのだ!!」

なのはのとってもシンプルな答えにユーノは青くなった。

「まっ、待つてよなのは!転移魔法に強引に割り込むなんて無茶苦茶だあっ!そんな事出来る訳が!?!」

デリケートな転移魔法に無理矢理割り込むのは危険とされている。まともな魔導師ならまずやらないのだが...

「たわけがあつ！虎穴に入らねば虎児を獲ず！危険を冒さずして何を得られようぞ！！」

「危険も何も無茶だあつ！離してくれえええええつ！！」

「無茶を通して道理を叩き壊すのが『流派東方不敗』なり！これしき気合いで何とでもなる！！」

なのはは、あらゆる物理法則を根底から無視する根性論を述べる。多分Gガン世界の自然法則だと思われる。

「分かったよおつ！もうヤケクソだあつ！なのはの非常識さに賭けるよおつ！！」

観念した殆ど半泣きのユーノは、少しでも影響を減らそうと、フェレットモードになってなのはの肩にしがみ着いた。

ゲートはもう閉じかけている。なのはは速度を上げて突っ込む。

またしてもその時、なのは達の前に不意に魔法陣が現れた。

そこから飛び出して来たのは、枕カバーを頭に被せられて懸命に外そうとしているクロノだ。

それを押さえ付けて揉み合っているのはミニなのはである。

「わあああつ？ぶつかるうううううつ！？」

突入コースに割り込んで来たクロノ達を見て、ユーノが毛を逆立てて悲鳴を上げる。

「問題ない！儂の兵法の内よおおおっ！！」

なのはは、そのままクロノとミニなのはを、ほとんど激突する勢いでひっ掴む。

ミニは、なのはの体に「なのおっつ」と戻り、クロノは「グエツ」と衝撃で声を上げた。『ジュエルシールド』がゲートの中に吸い込まれる。

「ぬわああああああああっ！！！！」

音速を超えたなのはは、衝撃波を立てながらゲートの中に強引に突入した。ほとんど特攻である。

本当に無理矢理という感じで、なのは達の体が狭いゲートに吸い込まれる様に消え失せた。

何だか閉まる寸前のゲートを、なのはが殴ってこじ開けた気がするが、きつと目の錯覚だろう…

――――
稲妻走る高次元空間に浮かぶ、巨大な異形の岩の塊、巨大次元航行船『時の庭園』である。

その転移ポートの前に、悪の女幹部といった格好をした女性が立っていた。フェイトの母親『プレシア・テストロッサ』である。

ポートが光り輝き、気絶しているフェイトとアルフが現れる。
そしてほぼ同時に『ジュエルシード』が現れたが、ついでに数名の人影がポート内にドサリと投げ出された。

「何っ!？」

プレシアはビックリして思わず後退りしてしまう。

現れたのはなのはとユーノ、それに頭に枕カバーを被せられたクロノであった。

さすがになのはは尻餅を着いてしまっている。何はともあれ、気合いで何とか目的地に無事着いたらしい。

「…ぬうつ…着いたのか…？」

なのはクラクラする頭を振り、顔を上げた。ユーノもヨロヨロと投げ出された床から身を起こし、

「痛ててて……」

と打った背中をさする。ふと横を見ると、頭に枕カバーを被せられたクロノが、思いつきりなのはお尻の下敷きになって床に伸びていた。

訳も分からない内に連れて来られてしまった上にこの有り様、彼にとつては災難であるが…

（そういえば…これも策の内とか言ってたけど…）

ユーノは突入前に、なのはが言っていた言葉を思い出した時、

「いつ!？」

ユーノは周りを見てギョツとした。

西洋の鎧騎士みたいな3メートル位はある兵士達に、周りをグルリと囲まれている。機械の兵士傀儡兵だ。

「アナタ達は何者なの…？」

傀儡兵の中央に立つプレシア・テストロッサは、感情を感じさせない冷たい声で、訳の分からない珍入者達を問い質す。

傀儡兵達は槍や剣を構え、何時でも攻撃出来る態勢である。

返答次第では只では置かんといい事だろう。なかなか最悪な状況だった。

なのはは軽く頭を振り、周りの状況をまるで気にしない態度で悠々と立ち上がる。

「どうも！お初にお目にかかる。僕は『流派東方不敗・高町なのは』無敵を目指す拳法家！フェイトの母上とお見受けする！」

左手のひらに拳を合わせ、拳法家独特の挨拶で高らかに名乗った。プレシアはそのあまりにも堂々とした態度に、少々気圧された様子だったが、眉をよせ、

「その拳法家が此処に何の用なの…？これは明らかに不法侵入よ…どんな目に遭っても文句は言えないわね…」

その目が狂気を帯びる。しかしなのははその狂気の眼差しを、どこ吹く風で受け流し、

「故有つて無断で上がり込んだ事は謝罪しましょう…許されよ。これもあなたに是非話を聞いて貰いたいが故…」

プレシアは不審そうな顔をした。無理も無い。本拠地にノコノコ来られてしまったのだ。

それに、目の前の少女が『ジュエルシード』を破壊する様子はモニターしている。

得体の知れない事この上ない。そんなプレシアの目をなのはしっかりと見上げ、

「話とは他でも無い、フェイト・テストロッサを儂の弟子に迎えた、如何であろう?」

「はっ…?」

プレシアは訳が分からず首を捻った。彼女には、なのはが何を言っているのか、まったく意味不明である。だが偉そうな少女は気にした風も無く、

「娘さんには才能が有る…何れ『流派東方不敗』の屈強な拳法家となる…如何かな?」

プレシアは冷たい目で目の前の、声と喋り方がまったく合っていない妙な少女を見下ろし、

「…その話を信じると…？信用出来ないわね…それにそれで此方に何の得が有ると言うの…？」

まったく信用していない様子である。そうだよな…と固唾を呑んで2人のやり取りを見ていたユーノも思った。

実際なのはの言っている事は全部本当なのだが、他から見ていると胡散臭い事この上ない。

最もなのはもそんな事は百も承知なのか、人を食った様な笑みを浮かべる。

「そう言われと思ってな…コレを」

枕カバーを被せられたまま気絶している足元のクロノを指差し、

「コレは『時空管理局』の執務官なる者だ…そちらと敵対していた様なので捕まえて置いた。色々と取引に使えんと思つてな…」

管理局の名を聞いて、表情を陰しくするプレシアだが、なのはは心配無用とばかりに、

「もちろんデバイスは既に捨ててあります。管理局に発見される事も無ければ、暴れられる事ありません…これで少しは信用されようか…？」

「……………」

プレシアは無言でクロノのチェックをセンサーで行う。なのはの言う事が嘘では無いと判断するが、まだ疑わしそうだ。

なのははニヤリと笑い、右腕の『レイジング・ハート』をおもむろに掲げた。

「では…此方は5個の『ジュエルシールド』を持っていると言ったら何とします…？」

「！」

プレシアの表情が明らかに変わった。ニンマリと嘲笑う様に笑みを浮かべ、

「所詮は子供ね…だったらアナタから取り上げればいいだけの話よねっ！？」

プレシアの声に従い、傀儡兵達が一斉に一步前に踏み出した。
なのはは不敵に腕組みの姿勢を崩さない。ユーノは冷や汗をかいて
身構えた時、

「待つて母さん！」

「

フェイトの叫び声が響く。見ると意識を取り戻したフェイトが、アルフに手を貸して貰いながらも立ち上がっていた。プレシアに向かい、

「そんな事したら、その子は『ジュエルシールド』を壊してしまいます…！」

「う…」

なのはの暴れっぷりをモニターしていたプレシアもその事に思い当たり、ハッとした。

信じ難い事だが、目の前で見せ付けられては信じるしかない。

「ふふふ…良い判断だぞフェイト…」

なのは教え子を誉める様な調子で笑う。

此方も最初から『ジュエルシード』を取引に使う気である。

フェイトは無言のプレシアに必死な様子で、

「母さんお願い、私にやらせて下さい！必ず『ジュエルシード』を無傷で手に入れて見せます！」

プレシアは妙な顔をしてフェイトを見つめた。しばらく考え込んでいる様子だったが、

「……いいわ……やってみなさい……ただし必ずよ……、大魔導師プレシア・テストロッサの娘に失敗は許されないわ……！」

「はいっ！」

フェイトは勢い込んで返事をした。その時プレシアはぼそりと、

「……もこういう事が好きだったわね……」

誰にも聞こえない様に呟いた。

それには気付かずフェイトは振り向いて、不敵に笑うのはを指差し、

「あなたに1対1の勝負を申し込む…勝った方が相手の言う事を聞く、あなたの言う条件で決着を着けよう！」

「面白い！その魔導師ファイト受けて立とうぞ！」

なのはは得たりとばかりに即答する。フェイトはなのはの正面に立ち、キツと視線を合わせた。

火花が散りそうな睨み合いである。2人の背後に稲妻が走り、対峙する竜と寅が見えた…気がする位の気迫であった。

ユーノはゴクリと唾を飲み込んだ。ちなみに、伸びているクロノの枕カバーの下顔は、何故か幸せそうであったという。

つづく

第16話 師匠突入すの巻（後書き）

皆さんお待ちかねえっ！

様々な危機を乗り越え、命がけで『時の庭園』に突入したなのは達の前に、次々と死の罠が襲い掛かるのです！

そして遂にフェイトとの、命と誇りを賭けた魔導師ファイトが始まるのです！

必勝の策を巡らすフェイトに、なのはは勝つ事が出来るのでしょうか！？

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠腕を奮うの巻』に、レディイツ、ゴオオオウウッ！！

第17話 師匠腕を奮うの巻（前書き）

さて皆さん…ついに正面对決する事となった、高町なのはとフェイト・テストアロツサの2人の魔法少女…

この闘いの先に待ち受けているものとは何なのでしょう…？

お互いの闘う理由とプライドを賭けた魔導師ファイトが今始まるのです！

それでは魔導師ファイト、レディイイツ、ゴオオウウウツ！！

第17話 師匠腕を奮うの巻

『時空管理局・執務官クロノ・ハラウン』はポカーンとしていた。自分が何処か知らない場所に、閉じ込められているのに気付いたからである。

最後に覚えているのは、ふんわりと良い香りのする柔らかい感触だけだ。

「…何が…どうなっているんだ…？」

クロノは辺りを見回してみる。此処はゴツゴツした岩肌に、ポツカリ開いた穴の中で、入り口にあたる部分には魔法障壁が張られていた。

簡易型の牢屋という所である。当然の様にデバイスも手元に無い。

（クソっ…何はともあれ、此処から脱出してデバイスを取り返さないと！）

クロノは直ぐに混乱から立ち直り、注意深く脱出出来る隙が無いか調べてみる。

さすがに若くして執務官なだけは有り、こんな状況でも判断能力は失われていない。

岩部分は頑丈な上、障壁にも脱出出来そうな隙間は無い。デバイス無しでは難しかった。

どうしたものやら頭を捻っていた時、人の足音と、ガチャンガチャンという金属音が聞こえて来た。

「ふふふ…良いざまだな管理局よ…」

可愛らしいが、偉そうな言葉遣いの声がクロノの耳に入った。

現れたのは、食事のトレイを持った高町なのはだ。肩にはフェレット姿のユーノが乗っている。

そして後ろには3メートルは有りそうな鎧の機械兵士、傀儡兵が剣を携えて付いて来ていた。

一瞬なのはに捕まったのかと思ったクロノだが、傀儡兵がなのは達を監視しているのに気付く。

《その通りだクロノよ》

「!？」

クロノの頭の中に、なのはの声が響いた。彼女の念話である。

《監視されておる。儂の言う事に合わせておけ…向こうは儂がお前を捕らえたと思っておる…》

クロノはなのはの言う通り、無言でなのはを睨む素振りをしながら、

《一体どうなっているんだ？何故君達が…？》

《うむ…実は『ファイト・デストラップ』に、以前の事を恨まれていた様でな…改めて勝負を挑まれ、奴らの本拠地に連れて来られてしまったのだ…》

ヌケヌケと大嘘を吐く高町なのは9歳である。あんまり堂々としてるので、レッドな嘘とは気付いていないクロノは同情して、

《そうか…それは災難だったね…済まない…僕達がもっと早く対応していれば…でも何で僕が？》

なのはは表面上はクロノに「いい様な管理局よ…これは武士の情け、大人しくしておれ」などと言いながら、

《奴らがお前達の船にスパイを送り込んだ時、クロノも巻き込まれてしまったらしい…》

あのままだとお前の身が危なかったのでな、儂が奴らを信用させる為にも捕らえてみせるふりをした訳だ……》

《そんな事が…感謝するよ…》

思いつきり真に受けたクロノは感謝する。

なのはの念話を一緒に聞いていたユーノは引きつった笑みを浮かべ、

(…騙されてる…騙されてるよクロノ…君の災難は全部なのはのせいなんだよ…)

と物凄く良心が痛んだが、なのはは気にした風も無い。

彼女は牢屋の隙間から食事の入ったトレイを牢屋の中に入れ、

《こうなっては仕方あるまい…明日ファイトと魔導師ファイトをする事になっておる。その際に、お前のデバイスを取り返してやろう。チャンスを待つのだ》

《でもそれじゃあ…》

《長居すると怪しまれる。儂に任せておけいっ!》

そう言われてはクロノも黙るしか無い。

クルリときびすを返したなのは立ち去りながら、

《その料理は儂が作ったものだ安心せい。ファイトまで逃げない限り、少しは自由にさせてくれたでな。さあ食べ！そして大きく一人前…いや、英気を養っておくが良い》

なのは達が立ち去った後、クロノはお腹が空いていた事もあり、料理を口にしてみる。

『時の庭園』に有ったあり合わせの食材で作った、四川風料理だ。

「何だ？凄く美味い！」

一口食べたクロノは美味さに驚いた。さすがは元マスターアジアが腕を奮っただけあり、四川料理はお手の物である。

遠ざかるクロノの方を振り向いてユーノは、

《クロノをどうする気なんだい…？》

《ふふふ…あ奴は腕が立つ…現時点ではフェイトより上である…色々と役に立って貰う。駒として!》

(悪だ…悪が居るっ!)

と内心青くなるユーノになのはは、

《日本のことわざに、この様なものが有る…『立っているものは親でも使え』だ。ぬわっはっはっ!》

なのはは微妙な顔のユーノに念話で高笑いするのであった。

ファイト…じゃ無かった。フェイトの自室である。フェイトはベッドに座り込んで目を閉じていた。

『バルディッシュ』から送信される戦闘データを元に、頭の中でイメージファイトを行っているのである。

決闘は明日という事になった。大規模魔法使用後のフェイトには不

利と、なのはの提案である。

アルフはそんなフェイトを心配そうに見守っていた。

暫くしてアルフは、ふと自分の影に違和感を感じる。

何だろう？と思って見てみると、影の中からいきつと頭が出て来た。

「わあああつ！？」

ビックリして声を上げるアルフの影から、腕組みをした覆面ちびっ子が現れる。シュバルツ・シュベスター見参であった。

「どうだフェイト・テストロツサよ…？」

「…シュバルツ…」

フェイトも気付いて呟いた。アルフは口を尖らして、

「アンタ…普通に出て来れないのかい？ビックリするじゃないか…」

ぶつぶつ文句を言うが、シュバルツはどこ吹く風だ。多分これが彼女にとっての普通なのだろう。

フェイトは何か馴れてしまったのか特に気にせず、

「アルフと『バルディッシュ』と私とで考えた『下手な魔法も数撃ちや当たる作戦』が上手く行けば…！」

アルフに変えた方がいいと言われたが、何故かこの作戦名をまだ使っている。

「ウム…そうか…心せよフェイト・テストロッサっ！」

偉そつに頷くシュバルツである。フェイトは待機形態のバルディッシュを手のひらに載せ、

「母さんの為にも必ず勝ってみせる…！バルディッシュと一緒に…」

バルディッシュを労る様にさするフェイトを見てシュバルツは、

「大事にしているのだな…」

「うん…『リニス』が遺してくれたものだから…」

フェイトが昔を懐かしむ表情になった。アルフも懐かしそうに笑みを浮かべる。

「リニス……」

思い当たったかの様に呟くシュバルツにフェイトは、

「私の魔法の先生で母さんの使い魔だったんだ……」

過去形という事は亡くなったのだろう。シュバルツは暫く黙とうする様に目を閉じ、

「ならば…バルディツシュはリニスの分身だな…」

「そうだね…」

フェイトは微笑んだ。シュバルツは湿っぽくなった雰囲気を消し飛ばさんばかりの勢いで、

「バルディッシュはリニスの分身。すなわち、お前とリニス、バルディッシュは三位一体という事だ！！リニスもお前の闘いを、何時までも見守ってくれているぞ！！」

「…三位一体……？」

「要するに、3人で1人と言う意味だ」

シュバルツの説明で意味を理解したフェイトは強く頷くと、何か明後日の方向を見上げ、

「…リニス私必ず勝つてみせるよ！」

「その意気だフェイト・テストロッサ！！」

シュバルツもフェイトと同じ明後日の方向を向いて、ビシッと何も無い場所を指差すのであった。

気のせいか、呆れた顔をした猫耳の女の人の幻が見えた気がするが、きつと幻覚だろう…

アルフは2人のやり取りを見てポツリと、

「…いい話なんだろうけど…何でこう暑苦しくなるんだろうね…
…?」

――――

決戦の時は来た。なのはとフェイトは、それぞれバリアジャケット姿で、海に浮かぶ広大な島で向かい合っていた。

周りの海には朽ち果てた高層ビル群が、半分以上沈んだ格好で頭を覗かせている。

此処には全く生き物の気配は無い。2人の立っている島は、ゴツゴツした崖や岩が目立つ天然の要害の様だ。

気のせいか、ランタオ島にそっくりな気がするのに加え、沈んだ街並みはネオ・ホンコンっぽい。

その様子を少し離れた廃ビルの上で、人間姿のユーノとアルフが固唾を飲んで見守っていた。するといきなり、

「訓練用の戦闘空間か…疑似空間に訓練用のレイヤー建造物。誰にも見つからないし、どんなに壊しても大丈夫という訳か…」

と声がする。アルフとユーノはビクリして声のした方を見ると、周りと同じ景色の布を頭から被ったシュバルツが腕組みして横に立っていた。

「君は確かシュバルツ…やっぱりこの子達の仲間だったのか!？」

ユーノは、こそ泥みたいに身を隠しているシュバルツに一応聞いてみるが、

「そんな事はどうでもいいっ!!」

と返されてしまった。アルフはたじろぐユーノの肩を叩き、

「…あれは口癖みたいなものだから…」

「はあ…」

気の抜けた返事をするユーノを尻目にシュバルツは、なのはとフェイトを腕組みして見つめ、

「まさしくルール無用のデスマッチ…フェイト・テストロッサよ…どう闘う…?」

と偉そうに呟くのだが、布を被ったままなので少々間抜けである。一応姿を隠している様だ。

ユーノは一言言ってやりたかったが、問答無用で訳の分からない説教を聞かされる気がしたので止めておいた。

フェイトは『バルディッシュ』を構える。何時でも始められる態勢だ。

（母さんの為にも…必ず勝って『ジュエルシード』を手に入れる…）

悲壮な決意で挑むフェイトに、なのはは不敵に笑みを浮かべ、

「フェイトよ死ぬ気でかかって来い！お前の全力見せてみよ！全て儂が受け止めてくれよう！！」

なのはも右腕のキング・オブ・ハート…じゃなかった『レイジング・ハート』を突き出し叫ぶ。

そして2人は睨み合った。緊張感が辺りを包む。次の一瞬なのはは鋭く声を上げた。

「行くぞおっ！魔導師ファイトツ…レディイイイツ…！」

「ゴオオオッ！！」

フェイトが叫ぶ。2人の闘いが始まった。

ここから先は『ゴッドフィンガー』を繰り出す時のBGMを脳内再生してお読み下さい。

金色の光が空に飛び上がる。桃色の光がそれを追って急上昇した。

2つの光が高速でぶつかり合いながら空を舞う。

金色の光から無数の光の槍が撃ち出され爆発が起きた。巻き添えて廃ビルや岩場が崩れ落ちる。

2匹の怪獣が暴れまわっているみたいである。

フェイトは徹底して遠距離からの砲撃魔法を繰り出した。マシンガンの様な連射である。

「ぬわあああああっ！！」

その連射をなのはは避けもせず正面から受け止め、拳で跳ね返した。砲撃魔法を叩き落としたのはは、決して組み合おうとはしないフ

エイトを追ってバーニアを噴かす様に飛ぶ。
しかしフェイトは巧みに空中で急停止し上昇に移る。なのははフェイトを追い抜く形になってしまった。

素早く背後に回ったフェイトは『フォトン・ランサー』の連射をなのはの背後に撃ち込む。

Gガンダムの実況中継風に言うと、

【ああーっと、やはり空中戦ではフェイト・テストロッサが有利な様です！徹底して自分の得意分野で闘うつもりなのでしょう！高町なのははどうするつもりなのでしょう！？】

と言った所である。

「fire！」

なのはに電光の槍が降り注ぐ。

「甘いわあっ！！」

なのははレイジング・ハートの一振りでフォトン・ランサーを弾き飛ばした。

（くっ…やっぱりそう簡単には行かないか…）

フェイトは直ぐに距離を取る。そのフェイトを闇色の光弾が襲う。
『ダークネス・ショット』である。

「はああっ！」

フェイトはバルディッシュをサイスフォーム、電光の鎌で切り裂いた。爆発が辺りを覆う。

フェイトはその隙に更に距離を稼いだ。

「さあ！次々と掛かって来んかあっ！！！」

爆煙の中からはが、手招きしながら叫んだ。フェイトはキツとなのはを見据え、バルディッシュを構える。

（やっぱり…恐ろしく強い…接近戦だとまず勝ち目は無い…砲撃技も有るし、こんな短期間で飛行魔法も相当にレベルアップしてる…でも…！）

フェイトはバルディッシュを突撃形態に変え、最大スピードで突っ込んだ。

（負ける訳には行かないんだっ！）

バルディッシュの鋭い切っ先がなのはに激突する。

「っ…！」

フェイトはギリツと歯噛みした。バルディッシュの切っ先をなのはの右腕がガツチリ掴んでいる。

「良い一撃だ…だがまだだ…繰り出す攻撃の一つ一つに己の魂を込めるのだっ…！」

なのはは歯を食いしばるフェイトの目を真っ直ぐに見つめ、

「さればそれは己の魂を伝える道具となる…！」

「えっ…？」

その言葉に何かを感じるフェイトだが、言うだけ言っただなのはは、バルディッシュごとフェイトを容赦なく投げ飛ばした…

「いくらあの子が凄い魔導師でも、なのはに勝てる訳が無い…」

ユーノは2人の闘いを見て呟いた。

高町なのはという少女の人外っぷりは嫌という程見て来ている。安心して見ていられるというものだが。

「果たしてそうかな…？」

布を被ったままのシュバルツが聞き咎めてユーノに話し掛けて来た。

「どついつ意味だい…？なのはの事を前から知っているなら、この戦いは無謀だと思うんだけど…」

シュバルツはフツと鼻で笑い、

「確かに奴は強い…だが今の高町なのはは以前に比べ遥かに及ばん上に、明らかにまともにフェイトの攻撃を受け過ぎている…」

「そういえば…魔法防御も『マスタークロス』も全然使ってない…」

ユーノは今までの闘いからその事に思い当たった。

「恐らく…フェイトの全てを受け止めるつもりなのだろう…だが今の小さき体でどこまで保つか…？命取りにならないか…」

ともかく態度のデカい覆面ちびっ子にユーノは怯む。しかしシュバルツの言う通り不安を感じた。

「後はフェイト次第…やれるか！？フェイト・テストロッサ…！」

シュバルツはガンダムファイトを見守る様に、戦況に目を向けた。

投げ飛ばされたフェイトは空中で姿勢を整える。かなり消耗して来ている。

今まで散々砲撃魔法を撃ち込み、高速で飛び回っていたのだ。疲れて当然だったが、なのははまだピンピンしている。鍛え方が違うの

だ。

（でも…お陰でこっちの狙いには気付かれていない筈…！）

フェイトは汗で滑るバルディッシュをぐっと握り直す。しかしそれは一瞬の間になってしまった。

「はっ！？」

フェイトが気付いた時、一瞬で間合いを詰めたなのはが目前に迫っていた。

「ダアアクネスツフィンガアアアアッ…！」

闇色に輝く右手が迫る。フェイトはとつさに魔法障壁を張り巡らす。が、一撃で防御を碎かれ廃ビルに叩き付けられてしまった。

「かつ…！」

ビルの中に突っ込み、背中を強打し呻くフェイト。薄れる意識の中、

（…もう少しなのに…やっぱり私じゃ勝てないの…？）

そんな考えが頭をよぎった時だ。

「馬鹿者があつ！何をしておるかああつ！お前の力はその程度のものかあつ！！」

可愛らしい怒鳴り声がフェイトの耳に突き刺さった。宙に浮かぶなのはだ。瓦礫に座り込むフェイトに更に叫ぶ。

「足を踏ん張り腰を入れんかあ！そんな事では小娘の儼1人倒せんぞ！立ていつ！立ってみせえいつ！！」

それを聞いたフェイトの目にカツと光が灯った。

「勝つんだ…勝って母さんの所へ帰るんだあああつ！！」

叫びと共に瓦礫を除けて弾丸の如く飛び出した。そしてバルディッシュを勢い良く振り上げる。

彼女の周りに次々と金色の球体が現れた。魔力スフィアである。

次々と増えて行くその数は優に1000を超え、フェイトの周りに半円を描く様に展開された。

フェイトの最後の切り札にして、最強の破壊力を持った砲撃魔法『フォトンランサー・フアリンクスシフト』である。

「ふふふ…面白い…それがお前の全力という訳か…!？」

なのはが構えた時、突如としてブロック状の『バインド』拘束魔法が彼女の体を捕らえた。

「これは!？」

不思議そうにバインドを見るなのはの体を、次々とブロック状のバインドが拘束して行く。

「設置型のバインド…!？それにアレは…って、しまった!なのははまだ一度もバインドを見た事も使った事も無い!!」

ユーノは意外な穴を発見し、シュバルツとアルフが隣に居るにも関わらず、声を出してしまった。ニヤリとするシュバルツ。

なのはを拘束するブロック状のバインドが10個以上。彼女の体を感じがらめに空中に固定してしまった。まるでダンボール箱を着込んだ様である。

「馬鹿な…あれだけの数のバインドを戦いながら設置していたって言うのか？有り得ない…まさか！？」

ユーノは隣のシュバルツ達をハツとして見た。

「戦いの前から、あらかじめ罠を張っていたんだな…？卑怯だぞ！」

シュバルツは目を閉じて不敵に笑い、

「高町なのはならこれしきの策に文句など言わん！敵の本拠地で闘うのだ。あちらも承知の上だろう！！」

確かに…とユーノは何も言えなくなってしまう。

（なのは…）

ユーノは空中に縛り付けられているのはに、不安げに視線を向けた。

「…ごめん…始まる前に仕掛けてた…狡いかな…？でも…あなたに勝つにはこれ位しないと勝てない…」

フェイトは少し罪悪感を感じながらもしつかりした口調で事実を述べる。なのははフツと笑い、

「己に有利な戦場を作り出す…兵法の基本なり…むしろ良く考えたと誉めてやろう！この場所に誘い込む為にわざと派手に動いておったな？」

フェイトが頷くと同時に、魔力スフィアが発射態勢を整え、一斉にスパークする。

「来いフェイト！お前の魂の一撃、しかと儼に見せてみよおおおおっ！！」

なのははバインドを外そうともせず、空中で仁王立ちで叫んだ。フェイトはそれに応え様にバルディッシュを更に高く掲げる。

「ファランクス…撃ち碎けえええーっ！！」

バルディッシュが振り下ろされると同時に、1000を超える電光の槍の一斉射撃が動けないのは目掛けて発射された。

つづく

第17話 師匠腕を奮うの巻（後書き）

念のため：ランタオ島はGガンダム決勝戦の舞台になった島です。中にはデビルガンダムが隠れていたり、周りをバリヤーで囲まれました。

もちろん本編では、デビルガンダムが隠れていたりはまだ無いです。

それでは嘘次回予告を…

皆さんお待ちかねええっ！

フェイトの必殺技によりなのは絶対絶命の危機に陥ってしまうのでしょうか！？

襲い来るデスアー…では無く傀儡兵。そしてついに本気を出すプレシア・テストロッサ。捕らわれのクロノの運命は！？

戦場と化す庭園でなのは如何に闘うのでしょうか！！

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠此処は儂に任せて先に行け』
と言ってみるの巻』に、レディイイツ、ゴオオウウウッ！！

第18話 師匠此処は僕に任せて先に行けと言ってみるの巻（前書き）

さて皆さん…なのはとフェイト2人の魔法少女の闘いもいよいよクライマックス。闘いの果てに待ち受けるものとは？

なのはの魂の拳はフェイトに届くのでしょうか…？

それではリリカルファイト、レディイイツ、ゴオオウウッ…！

金色の槍の一斉射撃はそれでもまだ止まなかった。槍の雨と爆煙で最早なのは姿は見えない。

そしてフェイトは、まだ金色の槍が撃ち込まれる中左手を掲げ、何かを掴む様に手を開く。

その手に、長さ数十メートルは有る巨大な電光の槍が形成された。特大級の『フォトン・ランサー』だ。

「スパアアクッ！」

フェイトは止めの一撃をありったけの力を込めて、勢い良く投擲する。

特大級の金色の槍は、衝撃波で周りを巻き込みながら、凄まじいスピードで爆煙の中に炸裂した。

「…エンド…！」

フェイトの声と共に、なのはの居た筈の場所は一瞬眩い光を放ち、特大級の大爆発を起こした。

「なのはあああっ!?!」

ユーノの悲痛な叫び声が爆音に紛れてしまう。あまりの威力に周りの廃ビルが、魔力崩壊を起こして崩れ去った。

なのはの居た筈の海上には、巨大な爆煙がもうもつと上がっている。フェイトは息も荒くその爆煙を見つめ、

（…全部直撃した…幾らあの子でも…ひとたまりも無い筈…）

と思いながらも油断無く爆煙を見つめていた時だ。

「!?!」

フェイトが違和感を感じた時、ガシツと体を拘束されて身動き出来なくなっていた。

（バインドっ？何時の間に!?!）

フェイトはハッとして自分の体に目をやると、

「なの!」「なの!」「なの!」「なの!」「なの!」「なの!」
「なのおっっ!」「（訳「捕まえたなの、この羽虫がああおっっ!」
なのおっ!」

「ひゃあああああああっ!?!」

フェイトは思わず悲鳴を上げてしまった。
7匹…いや7人の『ミニなのは』達が、まるで悪霊みたいにフェイトの体を押さえつけているではないか！

「ふふふ…」

含み笑いと共に、煙が晴れた中からなのはが腕組みしながら現れる。
殆ど無傷だ。

「これが僕のバインドよおおっ！！」

「バインドじゃねえっ！魔法ですらねええっ！！」

律儀にツツコミを入れるユーノだがホッと息を吐き、

「でも…あの攻撃の中良く無事だったな…とっさに防御魔法を張ったんだな…」

「どこに目を付けている！ファイター同士の魂の伝え合いに、あの高町なのはがそんな無粋な真似をするものか！」

何故かシュバルツに怒られてしまった。少しムツと来たユーノは、

「無粋も何も…防御魔法を使わなかったら、今の攻撃でやられているよ！他に何が？」

「フツ…明白な事だ…」

シュバルツは偉そうに目を閉じ、

「高町なのはは、あの攻撃を全て殺して受けたのだ…」

「はあ…？」

訳が分からず不信そうな顔をするユーノに、シュバルツは憐れむ様な視線を向け、

「高町なのはは敢えて攻撃を受け、攻撃が当たる瞬間にわずかに力を抜き己の体をクツシヨンの様に変え、全ての攻撃を耐えたのだ！単純な事ではないかつ！？」

「ああ…なる程…それなら納得する…訳あるかあああつ…！」

ユーノは新たにノリツツコミをマスターした様だ。

「何そのトンでも理屈！？そんなムチャクチャな理屈で納得出来る訳ないだろっ！何その「こんな事も分からないのか？」的な態度？そんな事出来たら苦労は要らないよ！」

シュバルツの言っている理屈は、生身で拳銃の一斉射撃はこうすれば耐えられるよ的なレベルの、インチキ理論にしか聞こえない。

嵐の様にツツコミを入れるユーノに、シュバルツはまたしてもムカつく鼻先笑いをし、空に浮いているのはを無言で指差した。

「お前の攻撃全て殺して受けたのだあつ！ぬわっはっはっ…！」

「その通りかよおおおっ…！」

高笑いするなのはにユーノは、思わず頭を抱えてしゃがみ込んでいた。

（そうだった…なのはに常識を求める事自体間違だった…）

あの理屈…ガンダムファイターの間では常識だと思われる。

またしてもGガン世界の不条理さに、頭を抱えるユーノを尻目になのは叫んだ。

「フエイトの魂の拳しかと受け取った…！ならばそれに応えて、儼も今の最強の技で応えてくれよう…！」

なのはは目を閉じ右手を前に掲げ、深く息を吸い込んだ。体に魔力…では無く『気』が満ちて行く。

それに伴い、掲げた右手のひらに眩い光が発生して行くではないか！

身動き取れないフエイトの前に強烈な光が輝く、実際に熱さを感じる程のエネルギーだ。

「あれはまさか…噂に聞くあの技か？高町なのは、そのレベルにまで達していたのかっ…！」

シュバルツは驚きの声を発していた。今なのはが使おうとしている技は『超級霸王日輪弾』と呼ばれている技である。

『石波天驚拳』が完成する前のマスターアジア最大の技。その力は気弾による超高熱で、ガンダムを蒸発させる程の威力を持っているのだ！

えっ？どういう理屈で？考えるだけ無駄だと思います。

その光が頂点に達した時、なのはの目がクワツと見開かれた。

「受けてみよ！フェイト！！」

前に繰り出された手が太陽の如く輝いた。

「超級霸王っ！日輪弾っ！！」

強烈な光、気弾が裂帛の気合いと共にフェイトに撃ち込まれた。

周りの建物を分解させながら滅凄まじいスピードでフェイトに迫る！

「あなたも耐えたんだ…受けて立つ！私だって負けない！！」

フェイトは仁王立ちで吼えた。前面に何重にも重ねた魔法陣型の障壁を張り巡らす。

次の瞬間なのはの気弾とフェイトの防御魔法が真っ向からぶつかり合ったが！

「ひゃああああああああっ！！」

一撃で防御をガラスの様に碎かれ、フェイトは光の中に消えた。

「フェイトおおおおおっ!？」

アルフの悲鳴が響き渡る。強烈な光の余波を受け、ランタオ島もどきが周りの海水と一緒に蒸発してしまった。

さつきから被害が大き過ぎるのは、疑似空間の魔法プログラムが崩壊しているからではあるが、現実世界でもかなりの威力であろう。

助けなければと、慌てて飛び出そうとするアルフにシュバルツは、

「心配は無用だ!あれを見ろ!」

シュバルツが指差す方向を見ると、爆煙の中からフェイトを抱えたなのはの姿が現れた。

「フェイトおっ無事だっ…あああゝっ!？」

喜びの声を上げ様としたアルフだが、素っ頓狂な声を上げてしまう。なのはにお姫様抱っこされているフェイトは、黒焦げで頭が金髪ア

フロになっていて、口から煙突みたいに煙を吹いていた。

「…よつ容赦ないなあ…なのはは…アハハ…あれじゃあ超級霸王日輪弾じゃ無くて、超級霸王アフロ弾だね…」

さすがに今ののでは、ガンダムを蒸発させる程の力はまだ無い様である。

まあ…それはともかく、フェイトの色々と台無しな姿に、ユーノは乾いた笑い声を上げるしかない。

ふと気付くとなのはの周りに小さな姿が見えるミニなのは達だ。全員巻き添えを食らったらしく、7人全員焦げて頭がアフロになっていた。

「ぷっ…！」

ユーノはその姿を見て思わず吹き出してしまったが…

「………なのっっ！！」「……………」（訳「今笑ったなの！死なすなの！！」）

耳聴く聞きつけたミニなのは達は、一斉にユーノに襲い掛かった。

「地獄耳いいっ！ぎゃああああああああっ！！」

ユーノがアフロミニ達にビルから逆さ吊りにされている時、不意に疑似戦闘空間が解除されて行く。

気が付くと、元の『時の庭園』に戻っていた。

ユーノはようやく逆さ吊りから解放というか、床にベチャツと投げ出された。

「痛たた…」

腰をさするユーノは、ふと気配を感じて顔を上げると…

「わわわわっ！？」

思わず叫んでしまった。なのは達を待っていたのは、傀儡兵の大群であった。

最初に見た時より遥かに多い。おまけに身長が6メートル以上有るデカイ奴やら、肩に大砲背負った奴まで居る。

「ふふんっ…やはりこう来たか…」

なのはフェイトを近くで突っ立っているアルフに預け、不敵に微笑む。

そのなのはの前に空間モニターが現れ、プレシアの顔が映し出された。

ちなみにシュバルツはちゃっかり姿を消している。

《お遊びは終わりよ…さあ…アナタが持っている『ジュエルシールド』を渡して貰いましょうか…?》

「断ると言ったら、何とする?」

なのははあくまで腕組みのまま偉そうに応える。プレシアは嫌な笑みを浮かべ、

《子供にも分かる様に教えてあげるわ…渡さなければ命は無いって事よ!》

プレシアの狂気を含んだ声と共に、傀儡兵達が一斉に剣や槍をなのはにガシャリとばかりに向けた。

「なのは…不味いよ」

ユーノは周りを見て青い顔で息を呑む。なのはは至って涼しげな表情である。

その時ユーノは足元にチヨロチヨロつと何かが駆け去って行く気配を感じた。

（ミニなのは達か…？）

反撃する気かと足元を見てみるが、既に姿は無い。

そんな事をしている内にも傀儡兵は近付いて来る。すると復活したフェイトがモニターの前に飛び出した。

「母さんごめんなさい…でもこんな…」

彼女はプレシアの期待に応えられず正直居たたまれない気持ちだったが、いくら何でも乱暴だと思ったのだ。

プレシアの命令は絶対の筈のフェイトにしては珍しい。なのはとの闘いで感じるものがあつたのかもしれない。まだアフロだが。

モニターに映るプレシアは冷たい目でフェイトを見るが、慌てたように目を逸らした。
少しアフロがツボに入つたのだろうか？

《コホンッ…もういいわ…》

態勢を整えたらしいプレシアは冷たく呟き、なのはをじろりと見ると、

「それよりどうするの…？大人しく『ジュエルシールド』を渡すの…？」

なのはは怯えた様に下を向き、肩を震わせてしまう。

プレシアは所詮は子供ね…とニタリと笑みを浮かべた時、突然爆発する様な高笑いが響いた。

「ぬわっはっはっはっ！残念だったなプレシアよ！僕は『ジュエルシールド』を持っておらん！！」

ガバツと顔を上げたなのはが、モニター越しにプレシアに向かって豪快に言い放った。

《騙したの…！？》

プレシアは明らかにキレる寸前と言った感じである。ハッキリ言うて恐い。

「いや…騙してはおらん…こんな事も有ろうかと『ジュエルシールド』はあの管理局の小僧に持たせてある…！」

なのはは得意げに言うが、もちろん真つ赤な嘘である。『ジュエルシールド』は右腕のレイジング・ハートの中だ。

（うわあ…やっぱり残りを全部クロノに押し付ける気だ…）

ユーノはドン引きな表情をするが、やっぱり気にしていないのはは、

「今頃脱出して、この中で大暴れを始めている頃だろうて！ぬわっはっはっはっ！…！」

《図ったわね！？傀儡兵！あの管理局の小僧から『ジュエルシールド』を奪うのよ！》

プレシアの命令に、なのは達を取り囲んでいる連中とは別に待機していた残り全機の傀儡兵が、次々とクロノの元に転送を開始した。

その頃牢屋の中でクロノは床に座り込んでいた。
そわそわ落ち着かない様子である。今は待つ事しか出来ない自分が
不甲斐ない。

そんな事を考えて膝を抱えていた時、此方に向かって来る小さな足
音を聞きつけた。

「誰だっ!？」

クロノは警戒して声を出す、相手の姿が見えない。キョロキョロ
辺りを見回していると、

「なのっ!」「なのっ!」

と可愛らしい声がする。クロノが下を覗いてみると、杖状のデバイ
スをえっちらおっちら運んで来たミニなのは2人の姿が有った。

「あっ!僕のS2U!」

《届いた様だな…？》

その時なのはからの念話が入って来た。ちなみにクロノのデバイスは『時の庭園』に乗り込んだ時、ミニなのは達を使って隠して置いたのである。

《その偉そ…いやその声…なのは君か…？》

可愛らしい声とまったく合っていない偉そつな喋り方、間違えようが無い。

《ふふふ…なのはで良い。この高町なのはが許す！》

《…それはどうも…》

相変わらずの物言いに引きつった表情を浮かべるクロノだが、牢屋の隙間からデバイスを受け取り、

《感謝するよ！》

言うが早いがデバイスを起動させ、牢屋の魔法障壁を砲撃魔法で破壊し外へ出た。

《状況はどうなってるんだい？》

クロノは辺りを警戒しながら、早速なのはに念話を送った。

《うむ…実はだな…》

クロノの念話を受け取ったのはは神妙な顔をし、

《今ファイト達と闘っている最中だ。奴らの親玉はクロノが居る場所から左手に行った所の奥に居る！雑魚共は儂が引き受けた！行くが良い！！》

《君達は大丈夫なのか？》

《案ずるでない…敵の頭を叩くは兵法の初歩の初歩。行けえいっく
ロノ・ハラオウン！此処は儂に任せて先に行けえいっ！！》

《済まない！必ず頭を押さえて助けに行く！！》

なのはの熱い言葉にまんまと乗せられたと言うか…奮い立ったクロノは、教えて貰った方向目掛け猛然と駆け出した。もちろんデタラメである。

雄叫びを上げて走って行くクロノの後ろ姿を、ミニ2人は腰布をハシカチ代わりに振って「お達者でえ〜」とばかりに見送るのであった。

走るクロノの前に無数の光る魔法陣が現れる。その中から続々とゴツイ傀儡兵が出現した。

「うおおおおおっ！！退けええっ！！」

クロノは敵の群れに飛び込みながら、野獣の様に吼えるのであった。

さて…一方の鬼畜なのはだが、クロノが思惑通りに乗ってくれたので、満足げに笑みを浮かべた。

同時にクロノとのやり取りを聞かされていたユーノは冷や汗をかきながら念話で、

《クロノ大丈夫かな……》

《心配するで無い…奴にはそれ位の實力は有る！これで敵の戦力を分散する事が出来る！！》

《でも…なのはの力なら…》

ユーノの疑問に、なのははゆっくりと首を振り、

《儂とてまだまだ修行中の身…雑魚共に体力を使っってしまったては勝てるものも勝てん！儂はクロノを信用したのだ！！》

ものは言いようだが、今の自分の戦力を冷静に考えた結果らしい。意外と真剣なのはに、ユーノはゴクリと息を呑んだ。

しかしなのはそこでコホンッと可愛らしい咳払いをし、

「まあ…クロノは少々死にそうになるかもしれんが…魂の炎を燃やし尽くせば死にはせんだろう…」

澄まし顔で最後にポツリと言った。

（鬼だ！やっぱりなのは鬼だあっ！！）

ユーノは年若い執務官の無事を心から祈るのだったが、こちらもかなり不味い状況なのを思い出した。

傀儡兵達がなのはとユーノに迫っている。

つづく

第18話 師匠此処は僕に任せて先に行けと言ってみるの巻（後書き）

『超級霸王日輪弾』は漫画にのみ出て来た技です。手元に本が無かったので一部と言っか、全部想像であります。

今現在だと溜めに時間が掛かり、威力は人間を黒こげアフロにする位ですが、たまにノリで変化するかもしれません。

それでは嘘次回予告を…

皆さんお待ちかねええっ！

ついに明かされる衝撃の真実！崩れ落ちるフェイトに、狂気の笑いを上げるプレシア・テストロッサ。

怒りに燃えたなのはとプレシアの激闘の行方はどうなるのでしょうか！？

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠怒るの巻』にレディイイツ、ゴオオウウウツ！！

第19話 師匠怒るの巻（前書き）

平凡な小学3年生だった儂、高町なのはに訪れた小さな事件：

死闘の先に待つものは悲劇の始まりか？又は煉獄への旅路か！？
道を切り開くは、己の拳のみ！

魔導師ファイト、レディッツ、ゴオオウウツ！！

「クロノオオツ！？」 ユーノ

第19話 師匠怒るの巻

「うおおおおおっ!!」

クロノの雄叫びと共に、傀儡兵の群れに青色の砲撃魔法が炸裂した。

ボディーを撃ち抜かれ崩れ落ちる傀儡兵。しかし敵は多い。巨大な剣や槍を振るい、クロノを叩き潰そうと迫って来た。

だが少年は一步も退かない。なのはの口車…もとい激励に奮い立った男の子は踏ん張るのである。

『此処は任せて先に行け』

この黄金のキーワードは、何時の時代も少年の心を熱くするのだ。言ったのが美少女なら尚更である。(中身は置いといて…)

「退けええええっ!!」

クロノは襲い来る傀儡兵をなぎ倒して前に進む。なのはに教わった場所に豪華なドアがあった。

(あそこか? 親玉の居る部屋はあっ!!)

此処は行き止まりで他に部屋は無い。間違いないとクロノは思った。

少年は駆ける。手向かう敵をなぎ倒し、素早い動きで巨大な傀儡兵を翻弄する。

さすがは若くして執務官を勤めるだけあり、大した腕前だ。だがさすがに敵の数が多い。

（体力が保たない…頭を押さえて、こいつらを止めないと！）

クロノはドアを遮っている一団に、連続して砲撃魔法をぶち込んだ。

何体かが破壊され、敵の群れの中に道が出来る。その中をクロノは、破片を蹴散らしながらドアに走った。

駆けながら砲撃魔法をドアに撃ち込み破壊する。

その勢いのまま、スライディング気味に部屋の中に飛び込み、中に向かってデバイスを構えた。

アクション映画の主人公さながらである。

「ここまでだ！時空管理局・執務官クロノ・ハラオウンだ！抵抗は止めて大人しくして貰い？」

カッコ良く名乗りを上げたクロノの言葉が、ピタリと止まってしまった。

「はいっ!？」

クロノの口があんぐりと開きっぱなしになってしまう。

その部屋は簡潔に言つと『トイレ』だった。

無駄に広く豪華な作りだが、どこからどう身ても、これ以上無い程見事に『トイレ』であった。

大事でもない事ですが、一応2回言いました。

茫然と立ち尽くすクロノの後ろから、壁を壊す音がする。傀儡兵達が、トイレの壁をぶち抜いて迫って来たのである。

逃げ場が無くなってしまった。此処に飛び込んだ事でかえってピンチに陥ってしまった様だ。

その時クロノの頭に、ある考えというか、疑惑が浮かんで来た。

(まさか…僕は最初からなのという子にのせられてたんじゃ…?)

まるで出鱈目だった敵の情報。そして『アースラ』で追い掛けた枕力バーと、ミニなのは達の姿が重なる。

証拠は無いのだが、そんな考えが浮かぶ。だがゆっくり考える暇は無かった。

大型の傀儡兵が肩に背負った大砲を向けて来る。他の奴もゴッイ

武器を構えて、じりじり迫っている。クロノは少し泣きたくなった…

なのはとユーノに迫る傀儡兵の群れ。

ユーノは正直恐怖を感じるが気力を振り絞り、モニターのプレシアをキツと見据えた。男の子なのである。

「一体『ジュエルシード』を何に使ったもりなんだ!？」

ユーノの質問にプレシアは、ニヤリと狂気の笑みを浮かべる。完全に優位に立ったと思っているのだろう。

《…教えてあげるわ『アルハザード』にたどり着く為よ……》

「アルハザード!？」

ユーノは驚いて声を上げた。意味が分からないのは首を捻る。

「ガンダムアルハザード…？」

「いや…ガンダムは要らないから…僕達の世界に伝わってる伝説の都だよ。禁断の秘術が眠っていて、どんな不可能も可能に出来る都…おとぎ話の類なんだけどね…？」

とユーノが、なのはに説明していると、

《アルハザードは実在するわ！！》

耳聴く聞きつけたプレシアに怒鳴られてしまった。

キレ気味のプレシアは、一瞬フェイトに視線をやり、モニターを操作したらしく、もう一つの空間モニターが映し出される。

「あつ…！？」

フェイトがそれを見て声を洩らす。そこに映し出されたのは、円筒形のカプセルの中に浮かんでいる、フェイトと瓜二つの少女の遺体であった。

年齢はフェイトより下に見える。訳が分からず呆然とするフェイトにプレシアは、

「…私の娘『アリシア』…、この子を蘇らせる為にはアルハザード

の力が必要なのよ……！」

狂気さえ感じさせる口調で言い放った。息を呑むユーノ。

プレシアは立ち尽くすフェイトに冷たい視線を向け、

《……もういいわ……終わりにする……この子を亡くしてから暗鬱な日々も……偽物を娘として扱うのも……聞いていて……？フェイトアナタの事よ！》

「……！」

フェイトの顔から血の気が引いて蒼白になる。

「そついう事だったのか……」

ユーノが気付くと、隠れていたシュバルツが、煙と共に姿を現していた。

「シュバルツよ、どういふ事だ？」

シュバルツは沈痛な面持ち（覆面で見えないが……）様子でモニターのアリシアを見上げ、

「此処にたどり着く為に色々調べた…

彼女は事故で娘を亡くした後『プロジェクトF』なる研究を続け、死者の再生を成そうとしていた…

フェイトはその研究で作られ出されたアリシアのクローンだろう……」

「なる程…以前のシュバルツと似たようなものだ…？」

なのはは特に驚いた様子もなく偉そうに頷いた。

この時ユーノは、なのは達の言葉の意味は良く判らなかったが、何故か猛烈に「一緒にすんな！」と叫びたくなった。

プレシアはフェイトに再び、侮蔑した冷たい視線を送り、

「せつかくあの子の記憶をあげたのに…そっくりなのは見た目だけ…役立たずでちっとも使えない私のお人形……」

プレシアの低い残酷な言葉だけが辺りに木霊す。

《あの子は何時も私に優しくかったわ…あの子はフハハハと何時も高笑いして、私が落ち込んでも「そんな事はどうでもいい！」と励ましてくれた…ともかくキャラが濃かったわ…》

内容がどんどんおかしくなる…

どんな奴だよそれ！？とユーノはツツコミを入れたかったが、ふとそんな奴が直ぐ近くに居た気がした。

プレシアは更に容赦なく言葉を続け、

《フェイト…やっぱりアナタはアリシアの偽物よ…せっかくアリシアの記憶もアナタじゃ駄目だった…》

そんな奴に似たくないんじゃない？とユーノは思ったと言うか、ここはひょっとして笑う所なのかとまで思ってしまった。

《アリシアを蘇らせる間に私が慰みに使うだけのお人形…だからアナタはもう要らないわ…何処へなりと消えなさい！》

アリシアの人となりはともかく。はつきりとした、残酷なまでの拒絶の言葉であった。

「…私は偽物…だからキャラが薄いんだ…！」

フェイトはガクリと床に膝を着いて、絶望の呻きを上げる。

「フェイト落ち込む所違う!？」

心配して駆け寄ったアルフは、フェイトの変な方向の落ち込み方に、思わずつつこんだ。

何か今まで散々なのはにぶっ飛ばされ、シュバルツの暑苦しい指導？を受けて、本当なら生きる希望を無くしてしまう所が、変な意味で遅しくなってしまった様である。

ユーノは思った。とても悲惨な状況の筈なのに、何でコントみたいになってるんだろうと…やはりここは笑う所なのだろうか？と思考していたら、

「止めぬかあつ！このたわけ者があ！我が子に何という事を！！待っておれ、今直ぐに貴様に目にも物を見せてくれるわああつ！！」

怒ったなのはがモニターのプレシアに怒鳴った。背後に炎が見えそうな程激怒している。

なのはの怒りに、周りの空気が脅えた様にびりびりと震えた。

ユーノは笑わなくて良かったと、息を呑んだ。なのはが本気で怒ったのを見たのは、初めてである。

しかしモニター越しで、凄まじさが分からないのか、プレシアは狂気的笑みを浮かべ、

《吠えるがいいわ！そいつらを突破して私の元にたどり着けたら相手を上げてあげるわ。アハハハッ！！》

言うだけ言うと、空間モニターはプツンと消えてしまった。

それと同時に、傀儡兵の群れが一斉に武器を振り上げ、なのはに襲い掛かって来る。

「雑魚があっ！」

なのはは3メートル以上はある、傀儡兵達の突撃に仁王立ちのまま、腰に巻いている白い布をシュルリと引き抜いた。

なのはの得意技『マスタークロス』！

「ぬわあああっ！！」

なのはの可愛い雄叫びと共に、布が生き物の様に自在に動く。

鋭利な刃物と化した布が、周囲の傀儡兵を大根の如く切り裂いた。

綺麗に輪切りになった傀儡兵達の体がゴロゴロ転がる中、魔法少女？は傀儡兵の群れに突っ込んで行く。

その小さな体を狙い、巨大な戦斧が振り下ろされる。しかしなのはは素手でその一撃を、ガッチリと受け止めた。

「モビルスーツに比べれば微温いわあっ!!」

そのまま戦斧をひっ掴んで、傀儡兵をぶん投げる。

投げ飛ばされた傀儡兵は、猛スピードで他の傀儡兵に激突し、鋼鉄のボディがひしゃげてまとめて碎け散った。

なのはの勢いは止まらない。本当に怒っている様だ。

疾風の如く駆けるなのはの前面に、梵字が浮かび上がる。

「流派東方不敗が奥義、十二王方牌・大車併っっ!!」

「なのおっ!!」「なのおっ!!」「なのおっ!!」「なのおっ!!」
「なのおっ!!」「なのおっ!!」「なのおっ!!」「なのおっ!!」

なのはの怒りに反応して、何時もより気合いの入っているミニなのは達は弾丸のように飛び出し、傀儡兵をオモチャみたいに次々と破壊して行く。

無茶苦茶な光景であった。

9歳の女の子が、3メートル以上はあるロボットの群れを、素手で破壊しまくっている光景はシニールを通り越してギャグですらある。

最もマスター時代、素手で十数メートルのモビルスーツを破壊し

たり、ビームやレールガンを受け止めたりしていたので、あまり驚く事では無いのかもしれないと思ったアナタはもう毒されています。

「す…凄い…なのはがぁんに怒るなんて…」

ユーノはなのはの暴れっ振りを見て、人外な戦いっぷりよりも、怒りの凄まじさに驚いていた。

何時も余裕で高笑いしているイメージがあったからである。

「フツ…高町なのはらしいと言えるかもしれんな…」

シュバルツは、暴れ狂うなのはを見て呟いた。疑問を浮かべるユーノに覆面ちびっ子は、

「高町なのはは前世で愛弟子を裏切り人類抹殺を企て、散々弟子を苦しませて来た…プレシアに以前の自分の姿を見たのだろう…」

「はあ………」

ユーノは若干引きながらも返事をする。
リアクションに困る話ではあるが、物騒ぎな内容を除けば納得は

行く。

（なのはにも色々と有るんだな…）

としんみりした気持ちになっていると…

「あだっ！？」

十二王方牌の後も暴れまくっていたミニなのはの巻き添えで、頭に跳び蹴りを食らった…

「なのなのなのなのっ！！」（訳、ボサツとしてるんじゃないなの！潰すぞなの！！！）

ぶんすか怒って捨て台詞を残し、飛び出すミニの後ろ姿に『前言撤回だあ！』とおでこを押さえて涙目のユーノを余所になのはは、

「雑魚にこれ以上かまける暇は無い！一気に叩き潰してくれるわああっ！！」

両手を広げ、片足立ちの構えをとる。バレエダンサーみたいに見えるのは気のせいだ。

「超級つ霸王っ！電・影・弾っ！！」

なのはの背後に稲妻が走る。書き文字まで見えた気がする。何時もの幻覚らしいが、今日はやけにハッキリ見えた。

「ぬわあああああああつー！」

輝く気の塊を纏い、高速回転する弾丸と化したなのは、傀儡兵の群れに超スピードで突撃する。

傀儡兵がまるで草刈りでもされるみたいに、バツバツとなぎ倒された。

上空に舞い上がったなのは気を解除し、流派東方不敗の構えをビシッと決め叫ぶ。

「爆う発うっー！」

掛け声と共に、百体は居た傀儡兵は次々と粉々に発し、スクラップの山と化した。

煙の中に仁王立ちの少女の姿は、まさしく悪魔の如しである。

一通り敵を片付けたなのは、床に両手を着いて悔し涙を流しているフェイトにツカツカと歩み寄った。

涙で顔をクシャクシャにしているフェイトの前に膝を着き、

「フェイトよ…お前は何だ…？」

「……………？」

「何だと問うておる！応えよフェイト！！」

なのはの問答無用の迫力に押され、フェイトはおずおずと、

「…キャラが薄い…アリシアの……偽物…」

「馬鹿者があああつ！！」

次の瞬間フェイトは、なのはの強烈なパンチを食らい、パッコーンと吹っ飛んだ。

「へぶえっ！？」

軽く数メートルは吹っ飛び床にベターンツと落下する。全く容赦が無い。

どうやらなのはの前では、おちおち落ち込む暇も無い様だ。

「何すんだああああっ!!」

怒り狂ったアルフが、なのはに向かおうとするのを、シュバルツが押し留める。

なのはは、頭にたんこぶをこさえて半泣きのフェイトに怒鳴った。

「お前はフェイトであろう! 儂の見込んだのはアリシアでは無い! フェイト・テストロッサお前だ! 良いかあっ!!」

フェイトは目を白黒させる。

「それだけは言うておく…後はどうするかはお前次第だ…儂はこれからお前の母上と対決して来る…」

「…母さんと……」

ぼそりと呟くフェイトに、なのはは立ち上がりながら、

「もう一つ言うておこう…最初に出会った時からお前はファイターで、1人前の漢女^{おこめ}であつたぞ!」

なのはそう言って微笑むと、フェイトに背を向け歩き出した。近くで立ち尽くすユーノに、

「ユーノよ…僕は行く！お前はどつする？闘う意志は有るか！？」

「覚悟は出来てるよ！」

即答である。別になのはにつられた訳では無いが、自分には見届ける義務があるとユーノは思った。

「よい答えだ！そこで『ユーノ・スクライアお供いたします』と続ければ言う事はないぞ、ぬわっはっはっ！よし僕は続けえいっ！！」

なのはは満足そうに微笑み、猛然と駆け出した。ユーノも後に続く。

アルフに助け起こされたフェイトは、その後ろ姿をジッと見つめていた。

ただっ広い時の庭園の中をひたすら走るなのは。ユーノはとても追いつけないので、飛行魔法で何とか後を着いて行く。

「なのは、プレシアの居場所に心当たりが有るのかい？」

「昨晚我が分身達で探らせて、大体の見当は付いておる！」

その時2人に追いついて来る影が一つ。

「シュバルツか…」

なのはの横を金髪をなびかせて併走する、覆面ちびっ子の姿。

「此処は私に任せて貰おう！」

なのははシュバルツの紅い瞳を、しばらく無言で見ていたが、

「シュバルツよ…お前の正体は見当が付いておる…説得するつもりだな…？」

シュバルツはなのはの目をジッと見つめた後頷き、

「…そうだ…今のあの人を止められるのは私だけだろう…」

「おそらくそれでは、フェイトとプレシアの問題の解決にはならぬぞ！」

なのはは鋭く言い放った。ハツとして黙るシュバルツ。

「僕に任せておけ…お前達カッシュ家には借りが有ったな……」

なのははひどく真剣な目でシュバルツに語りかける。ユーノが一度も見た事の無い表情だった。

明日は槍ならぬ、ガンダムが降って来そうな気がする。

「…承知した…高町なのは…任せたぞ…！」

シュバルツは感慨深そうに頷いた。なのはの言う意味が分かったらしい。

「なのは…どうする気なんだい…？」

ユーノは、何時もとノリが違うなのは達が気になって聞いてみた。

「無論これで語るまで!」

なのはは見かけだけは可愛らしい小さな手を、何時もように力強くかざすのである。

ユーノは、ああ…やっぱり何が有っても、なのははなのはだ…と解脱した様に悟った表情をする。その時庭園を謎の振動が襲った。

「なっ、何だあっ!?!」

ユーノは、びりびりと震える周りに焦った。まるで庭園を含めたこの空間全てが揺れている様だ。シュバルツはハッとして、

「『ジュエルシード』を発動させたのか!?!」

それは『ジュエルシード』により引き起こされた『次元震』の前面に触れであった。

その頃のクロノ

トイレに追い詰められたクロノに向かい、大型傀儡兵の大砲が発

射された。

思いつき横っ飛びに跳んだクロノの今居た場所が爆発し吹っ飛んでしまう。

爆煙と瓦礫の中、クロノはムチャクチャに砲撃魔法を乱射して、どうにか包囲を突破する。

しかし傀儡兵達は次々とやって来る。なかなかシャレにならない状況だ。全部なのはのせいである。

年若い執務官は、愛機のデバイスを構え敵の大群を睨み、

「世界はこんな筈じゃ無かった事ばかり過ぎだあつ！こんちくしよおおおおおっ！！」

庭園中に響き渡る魂の叫び。少年は敵の大群にヤケクソ気味で突入するのだった…

つづく

第19話 師匠怒るの巻（後書き）

プレシア戦まで行けなかったです…まあ、誰も予告を信用してはいないと思いますが…（汗）
それでは噓次回予告を…

皆さんお待ちかねええっ！
遂に発動してしまうジュエルシード！真の力を解放したプレシアの猛攻がなのはを襲うのです！
なのははプレシアに勝つ事が出来るのでしょうか！？

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠やかすの巻』に、レディ
イツ、ゴオオウウツ！！

第20話 師匠やらかすの巻（前編）（前書き）

平凡な小学3年生だった筈の儂、高町なのはに襲い掛かる小さな事件：

信じたのは不屈の闘志、手にしたのは魔法の力なり！

想いが壊れようと、願いが遠くとも、構わず進め！無理を通して道理を叩き壊せば、必ず道は開けよう！

想いを拳に乗せ、願いを技に込めて、魔闘少女リリカルマスターなのは、レディイツ、ゴオオオウウッ！！

原作12話のナレーションと比べると、頭の悪さが際立ちます。

第20話 師匠やかすの巻（前編）

プレシアの目の前の空中に、青い9個の光が瞬いていた。『ジュエルシードが発動しているのである。

なのはの恐るべき戦闘能力を目の当たりにし、更にはクロノの脱出で管理局に嗅ぎ付けられたと思い込んでしまったプレシアは、追い詰められ賭けに出たのだ。

プレシアは、『ジュエルシード』とアリシアのカプセルと共に『時の庭園』の最深部に入る。

其処は朽ち果てた巨木や岩石が、オブジェの様に置かれた薄暗い広大な部屋だ。

床のあちこちの裂け目から異様な空間が覗いていた。次元震の影響で発生した『虚数空間』である。

プレシアはアリシアの遺体が入っているカプセルを愛おしげに撫で、

「もう少しよアリシア…もう直ぐ失った時間を…全てを取り戻せるわ…ぐっ！」

突然プレシアは口元を押さえて、激しく咳き込んだ。
倒れそうになりながらも彼女は、カプセルに持たれて何とか持ちこたえる。

その手のひらには、ベツタリと赤黒い血が着いていた。

「…まだ…まだよ…」

プレシアは口元の血を拭い、ぎろりと発動する『ジュエルシールド』を見上げ、

「来るなら来なさい！邪魔する者は全て叩き潰してあげるわ！！」

狂気に満ちた叫び声が部屋に激しく木霊した。

不気味に揺れる庭園内をなのは達3人が駆けていた。
長い通路を疾りながらなのはは、床の裂け目から覗く空間に目をやり、

「何だ…？このD G細胞の様なものは？」

「これは虚数空間だ。この中では飛行魔法もあらゆる魔法が一切発動しない。もしも落ちたら重力の底まで落下し、二度と上がって来れん死の空間だ」

シュバルツが偉そうながらも、親切に説明してくれた。ゾツとするユーノを余所に、なのはとシュバルツは、

「それでは儂らには、あまり関係は無いな…」

「ウム、確かにな…どうとでもなるだろう、先を急ぐか…」

（いや、何とかなるのはアンタ達だけだからねっ！）

とユーノは心の中でのみ突っ込んでおいた。言っても無駄だと思っただのである。

「しかし…不味いな…この勢いだと次元震』どころか『次元断層』が起きるぞ」

「地震断層だと……？それが起こるとどうなると言っただ！？」

なのはの質問にシュバルツは覆面越しに、険しい表情を浮かべ、

「周りの世界全てが発生した地震断層の巻き添えで、消滅してしま
うだろう！」

「儼よりスケールがデカイのう……」

「いや、そんな事言ってる場合じゃ無いって！」

ユーノは違う方に反応しているなのはに一応突っ込んでおくが、
事態は最悪らしい。

「『ジュエルシード』9個では次元断層を起こすには足りない筈だ
が……どうやら此処の駆動炉の力で足りない分を補っているらしいな
……」

シュバルツは科学者らしく、状況を瞬時に把握した。忘れている
人も居ると思うが、彼女は科学者なのである。

「では駆動炉をまず停めた方が良さそうだな…」

なのははニヤリと人の悪い笑みを浮かべた。

「えっ？次元断層！？」

なのはからの念話を受けたクロノは、思わず声を上げた。
彼は今何とか傀儡兵を片付けて、残骸の中にへたり込んでいるところである。

バリアジャケットのあちこちが裂け、肩でゼエゼエ息をしている。
かなり疲れている様だが…

《どういう事なんだ…それは本当なんだろうね…？》

さっきの件もあるので、疑わしそうなクロノだが、

《…さつきは済まなんだ…儂もまんまと敵に騙されてしまった…この高町なのはが謝る！》

と相変わらず偉そうに謝る少女を、クロノは正直まだ信用出来なかった。

しかし管理局として、次元断層が起こりそうだと聞いては、放って置く訳にはいかない。

《それで僕は駆動炉を止めればいいんだね…？》

《その通り、今度は確かだ！頼むクロノ・ハラウン、今頼れるのはお前だけだ！東方不敗（予定）高町なのはが頼む！》

《分かった…こっちは僕に任せてくれ…！》

クロノは疲れた体に鞭打って、なのはに指示された場所に急ぐ。

疑わしくても、またしてもなのはに乘せられてしまった格好である。

騙されているのでは？と思ってはいても、知らず知らずの内に乗せられているのが『流派東方不敗・兵法』の恐ろしい所である。

残存する傀儡兵の間をすり抜け、クロノは目的地にたどり着いた。赤く輝くドーム型の巨大な魔力方式の駆動炉が震えている。ついでに駆動炉を守っている傀儡兵の軍団が多数守りとして、しっかりと待ち構えていた。

（僕だけ辛い作戦な気がするのは気のせいだよな！？）

クロノはまたしても泣きたい様な気分になるのであった。

フェイトはまだ床に両手を着いて、ガックリと落ち込んでいた。心配そうにその小さな肩を支えるアルフ。

「フェイト……」

慰めの言葉を掛けようとした時、不意にフェイトがガバツと顔を上げた。そして勢い良く立ち上がり、

「アルフ行くよ母さんの所に…！」

「フェイト！？」

いきなりの彼女の復活に啞然とするアルフに、フェイトは彼女が一度も見た事が無い、しつかりとした決意を秘めた表情で、

「あの子は最初から私に真つ直ぐに向き合ってくれた…アリシアの代わりじゃ無い、私を見込んでくれた…何度も弟子なれって言ってくれた…何度何度も…」

「フェイト…？」

アルフはフェイトの心中を察する。非常識なのは置いといて、フェイトを認めてくれたのは、確かになのはであった。

「生きていたと思ったのは母さんに認めて貰いたいからだった…それ以外に生きる意味なんて無いって思ってた…」

フェイトの独白は止まない。今まで我慢して来たものが溢れたのか…

「でも今は違う！此処で逃げたらファイターじゃ無い！……あの子にも笑われる！私の……私達の全てはまだ始まってもない！そうだねアルフ！？」

「う、うんっ、その通りだよ……」

フェイトの開き直った様な復活っぷりにアルフは、内心冷や汗をかきながらも、コクコクと頷いた。

「私は母さんと拳で語り、あの子の弟子になって強くなる！行くよアルフ！バルディッシュ！このまま終わってたまるかあああっ！！」

（フェイトが暑苦しくなってしまった！？）

明らかになのは達の影響を受けてしまっているフェイトに、アルフは表情を引きつらせた。

しかしそれもいいのではないかと思った。こういうノリも偶には悪く無い。悲しみに暮れているより余程いい。何時もだとなのは達の様になってしまっが…

「分かったよフェイト！私はフェイトの使い魔だ、何処へでも着いて行くよ！」

《Yes / Sir》

頼もしい2人の返事に、フェイトはプレシアの元へと向かうべく、疾風の如く駆け出した。

振動が激しくなる庭園内で、発動した『ジュエルシード』が激しく青い光を放っていた。

「後もう少し…」

その様子をプレシアは焦燥の色を濃くして見つめていた時、轟音と共に壁が吹き飛ばされた。

「プレシア・テストロッサ！高町なのは、約束通り来てやったぞ！」

粉塵が舞う中、可愛らしいが偉そうな言葉遣いの声と共に、なのはとシュバルツ、ユーノがぶち抜かれた壁の穴から現れた。

「プレシア・テストロッサ、一つ聞いておきたい！」

シュバルツが一步先に出て、鋭いと本人だけは思っている声でプレシアに語り掛ける。プレシアは不審そうな表情をした。

見覚えの無い侵入者だった事ともう一つ、何処かで会った様な懐かしさを感じたのだが、シュバルツは構わず、

「失われし都『アルハザード』…其処に眠る秘術は存在するかどうかも曖昧な只の伝説…そんなものに全てを賭けると言うのか…？」

「違うわ！アルハザードへの道は次元の狭間に在る！時間と空間が砕かれた時、その狭間に滑落して行く輝き…道は確かに其処に在る！！！」

シュバルツの言葉に、プレシアは目に狂気を湛えて断言する。

「まったく…お主は儼に似ておる様だな…」

なのはは静かにそう呟くと、プレシアの前に踏み出した。

「目的の為には手段を選ばん…しかしそれで何とする？失った時間と犯した過ちを取り戻すと抜かしおるか…？」

「そうよ…私は取り戻す…私とアリシアの過去と未来を…！」

プレシアは歪んだ笑みを浮かべた。天を仰ぐ様に両手を広げ、

「そうよ…取り戻すのよ…こんな筈じゃ無かった世界の全てを！アハハハッ…！」

狂気の哄笑を響かせた。最早プレシアには引き返す道など無いと決意している様だ。

「馬鹿者があああつ…！」

なのはが吼えた。その気迫に空気がびりびりと怯えた様に震える。

「そんな都合の良いものが有って堪るものかあつ！何が失われし都だ、何が禁断の秘術よ！在ったとしても所詮は人間の作ったもので

あろう！？」

「な…何を…？」

プレシアは燃え盛る憎しみをも込めてなのはを睨む。並みの人間なら魔導師問わず、思わず後退る程の眼光だ。

しかしそれで怯む様なのはでは無い。負けじとその大きな目に気迫を込め、

「己に痛みをもたらさぬものに何の意味が有る？そんなものが有ったなら、人生など只のゲームぞ！やり直しの効く過去に何の意味が有ろうか！！」

異様に説得力の有る言葉であった。一瞬でも納得してしまいそうになったプレシアは小娘のクセにと齒噛みし、自分を奮い立たせる様に叫ぶ。

「ならばその理屈で私を黙らせてみなさい！！」

彼女は着ていたマントをバサリと脱ぎ捨て叫ぶ。

「魔力ランクSSの力見せてあげるわ！アナタがどんなに強くとも、大魔導師プレシア・テストロッサに勝てるかしら！！」

その体に膨大な量の魔力が溢れていた。全身に魔力を纏い、紫色の魔法光がプレシアの体を鋭く輝かせる。

「これは……？凄い魔力だ！」

驚くユーノにシュバルツはハツとした様子で、

「高町なのはを倒す為に、一時的に駆動炉の力を全て自身の体に流したのか！？これでは高町なのははこの庭園そのものと闘うに等しいぞ！」

シュバルツの説明にユーノは息を呑んだ。滅茶苦茶な様だが、あのなのはを倒すには、それ位必要なのかもしれない。

「面白い！ならば勝負の2文字を持って教えてくれよう！！」

なのはは独特の片足立ちで構えた。プレシアも魔法発動の予備動作を行い、何時でも攻撃出来る態勢を整える。

なのはは叫ぶ、闘いのゴングを。

「魔導師ファイト、レディイツ……」

「ゴオオオツ!!」

応!とばかりに応えたプレシアの掛け声と同時に、なのはは大魔導師目掛けて一直線に疾走した。

「破ああああっ!!」

鋭い気合いと共に、なのはの強烈な蹴りが飛ぶ。しかしプレシアの張り巡らした強固な防御魔法に受け止められてしまった。

「す……凄い!なのはの攻撃を防ぐなんて!」

驚くユーノの目の前で、プレシアの周りに魔力スフィアが形成される。

フェイトと同じ『フォトンランサー』電光の槍が連続して発射された。

「何のおおおっ！」

なのはは『マスタークロス』でフォトンランサーを跳ね返すが、威力がフェイトとは桁違いだった。マスタークロスが押されている。連続して食らうと危ないと判断したなのはは、ランサーの衝撃の反動を利用し、後方に高く跳ぶ。だがプレシアは更に追撃を掛ける。

「逃がしはしないわ！時の庭園砲！！」

ユーノはネーミングセンスダサっ！と思ったが、ネーミングとは裏腹に、凄まじい威力の紫色の落雷が、なのはに降り注いだ。

以前海鳴湾沖で使用した次元跳躍砲撃と同じものだが、威力が桁違いである。

なのは1人を倒す為に庭園の全エネルギーを使っているのだ。

「うおおおおっ！？」

さすがのなのはも受け止めきれず、吹き飛ばされ、壁に叩き付けられてしまった。

「なのはあっ！？」

「高町なのは!!」

ユーノとシュバルツの叫びが広い部屋中に響き渡った。

その頃庭園内を疾っていたフェイトとアルフの耳に、叫び声が入って来た。

「なのはあつ!?!」

「高町なのは!!」

聞き覚えの有る声だと、急いで部屋に飛び込んだ2人の目に映ったのは、プレシアの砲撃魔法を受けて、防戦一方のなのはの姿であった。

更に魔力をそこら中に撒き散らし、紫色の光を放つプレシアが仁王立ちしていた。

その姿はプレシア版スーパーモードと言った所である。

「母さんがこんなに強かったなんて…」

フェイトは連続して砲撃魔法を繰り出すプレシアに驚いていた。
なのはは先程から避けてばかりである。

「おかしい…あの子をもっと強い筈…いくら母さんが強くても、どうして反撃しないの…？」

疑問を口にするフェイトにシュバルツは頼もしそうに頷き、

「良く気付いたなフェイト・テストロッサ…そう、高町なのははどんなに強くとも、今は9歳の少女に過ぎんと言っ事だ！」

「どういう事だい!？」

なのはのピンチにユーノは焦って質問するが、シュバルツは眉をしかめ、

「フェイトとのファイトに、今の身では過ぎた技『超級霸王日輪弾』の使用、更に傀儡兵達との連戦で、限界が近いのだろっ…所詮は子

供の体力だ……」

「そんな……」

ユーノは顔色を無くす。今まであまりの無敵っぷりに考えた事も無かったが、なのはにも子供故の弱点が有ったのだ。

「アハハハハッ！食らいなさい！！」

プレシアは狂った様に笑い声を上げ、再び時の庭園砲を放つ。紫色の落雷が、連続してなのはに襲い掛かった。

つづく

第20話 師匠やかすの巻（前編）（後書き）

長くなってしまったので前後編に分ける事にしました。

後編はそんなにお待たせしないで投稿出来ると思いますので。

皆さんお待ちかねえっ！

なのはとプレシアとの息詰まる魔導師ファイトの勝負の行方はどうなってしまうのでしょうか！？

なのはの想いは届くのか！？

そして思わぬ事態が！？

魔闘少女リリカルマスターなのは、『師匠やかすの巻（後編）』に、レディイッツ、ゴオオオウウッ！！

第21話 師匠やかすの巻（後編）（前書き）

さて皆さん…平凡な小学3生だった筈の少女、高町なのはに襲い掛かる小さな事件…

信じるものは不屈の心、手にしたのは魔法の力…

なのは、プレシア互いの願いと命と意地を賭けたファイトの行方はどうなるのでしょうか…？

答えは互いの拳のみが知っているのです！

それでは魔導師ファイト、レディイッツ、ゴオオウウウッ！！

第21話 師匠やらかすの巻（後編）

紫色の稲妻がなのはを襲う。それは魔力炉の力を利用した凄まじいものだ。

そのパワーは巨大な次元航行船『アースラ』にもダメージを与えた程の威力である。

いくら人外凶器少女でも、これ以上直撃を食らい続けては危ない。プレシアは勝ち誇って哄笑を上げる。

「アハハハハハッ！死になさいっ！！」

「たわけが…！」

砲撃をぎりぎりで避けながら、なのはは怒りの表情を浮かべる。

「アリシアの為此処でアナタは死ぬのよおおおおっ！！」

「喝っっっ！目を覚まさんかあっ！この愚か者がああっ！！」

なのはは怒声を上げた。声質のせいで腰砕け気味だが、妙に迫力だけはある。プレシアをビシッと指差し、

「プレシア・テストロッサ！お前は間違っておる！

フェイトも同じおぬしから生まれた娘、言わばアリシアの妹！

それを忘れてアリシアの再生など愚の骨頂おっ！！と、我が弟子なら言っであらう！！」

そう叫ぶと、フツと自嘲の笑みを浮かべた。自分が弟子に言われた言葉を引用した事に、感慨深いものが有ったのだろうか。

「何ですって〜っ！？」

プレシアの顔が怒りのあまり、鬼の如き形相になっていた。なのはは更に一步踏み出して、

「第一それでアリシアが蘇った所で何とする！？自分の為に母親がこんな事をしでかしたと知れば、まともでいられると思っておるのか！？」

アリシアはそれ程薄情な人間なのか！？答えてみよプレシア・テストロッサアアッ！！」

「黙りなさいいいいっ！！」

凶星を突かれ、逆上して我を忘れたプレシアは、最大出力で一斉に砲撃魔法を放つ。

なのはの周囲全てを埋め尽くす紫色の落雷の攻撃陣。避ける空間など全く無い！

「死ねえええええっ！時の庭園砲マキシマムッ！！」

落雷がなのはを撃つ。なのははとっさに右腕を繰り出して気合いで防ごうとする。

いくら何でも無茶だとユーノが思ったその時、女性の合成音声がかかった。

《p r o t e c t i o n》

なのはの目の前に魔法陣が展開され、魔法雷を受け止めた。『レイジング・ハート』が自らの判断で、防御魔法を張り巡らしたのだ。

《Let me help him, the master is tired. I want to be helpful for you》（私にもお手伝いさせて下さい、マスターは消耗しています。私はあなたの役に立ちたいのです）

「うむ！レイジング・ハートよく言った！それでこそ我が愛機よ！」

なのはは満足げに頷いた。レイジング・ハートは魔法に慣れていないなのはに代わり、魔力をコントロール魔法障壁で砲撃魔法を防ぐ。

なのはが潜在的に膨大な魔力を持っているだけあって、その防御は硬い。即死レベルの攻撃に良く耐えていた。

しかしジリジリと押されている。防御魔法もそう長くは保ちそうに無い。

いくらなのはの魔力が膨大でも魔力炉に勝てる訳も無い。やはり時の庭園そのものには勝てないのか？

「これしきいいいいっ！！」

可愛らしく吼えるなのは。その目がカツと獣の如く鋭く光を放った。

「ぬわああああああっ！！」

そして見よ！彼女の右手の甲に、光り輝く紋様が浮かび上がったではないか！

その紋様いや、紋章はハートの型をしていた！そこに刻まれている文字は！？シュバルツは赤い目を見開いて叫んだ。

「おおっ！あれこそは『キング・オブ・ハート』の紋章！高町なのは、この世界のシャッフル同盟に選ばれたのだああっ！！」

「何だよそれええっ！？」

ユーノは絶叫して突っ込んだ。もう訳が解らないよ状態である。最早魔法少女とはベクトルが、明後日の方に吹っ飛んでいた。

「遥かに過ぎ去った昔から、戦いの秩序を受け継ぎ守るもの…それがシャッフル同盟だ！！」

聞いてもやっぱり意味が解らなかった…てか何処の世界にも居るものなのか？とユーノは思った。
そんな事はどうでもいい！とばかりに、なのはの右手が燃え上がった。

「はああああああああっ！！」

キング・オブ・ハートの紋章が輝き、右手の一振りで稲妻が全て爆散、消滅した。

「バ…馬鹿なああっ!？」

プレシアは啞然としてしまう。この少女は、次元航行船をも破壊出来る砲撃を、見事に跳ね返してしまったのだ。

「目を覚ませ！プレシアよおおっ！」

なのはは右手の甲をかざす。その紋章が再びピキョオンとばかりに赤く光を放つ。

「儂のこの手が唸りを上げる！炎と燃えて全てを砕く!!！」

キング・オブ・ハートの紋章が更に輝きを増し、右手が太陽の如き光を放った。なのははその手を振りかざし、プレシアに一気に迫る。

「灼〜〜熱っっ！サンシャイン、フィンガアアアッ!!！」

「跳ね返してあげるわああっ!!」

プレシアは防御魔法に魔力炉の全パワーを集中させた。展開された魔法障壁がなのは目掛けて拡大して行く。

そのまま魔力を増幅し、障壁でサンシャインフィンガーごとなのはを押し潰すつもりだ。

サンシャインフィンガーと防御魔法が真っ向から激突し、閃光が疾った。

「うああああっ!?!」

叫び声を上げるプレシア。なのはの右手が防御魔法を、握り潰すように木っ端みじんに打ち砕いていた。

更に攻撃の衝撃で、プレシアは弾丸の様に吹っ飛び壁に叩き付けられた。

「ぐはっ…!!」

壁にめり込み床にべちゃっと落下した。しかし彼女は執念で、再

び立ち上がろうとする。

「まだよ……！私は負ける訳には……ガハッ！？」

その時彼女は激しく咳き込み、口から大量の血を吐いた。

「プレシア……？」

なのはは怪訝そうに眉をひそめた。自分の時の事を思い出し、

「プレシア……お主、病に……」

「そんな事はどうでもいいわっ……！」

プレシアはシュバルツ張りに否定し、口元の血をグイッと拭くと、
なのはを物凄い形相で睨み付ける。まだ闘う気だ。

「まだ解らぬか！？ならばこの拳で教えてくれる……！」

その様子になのはは、怒りが限界だと言う様に拳を握り締め、プ

レシに鬼神の如く迫る。

「酔舞・再現江湖…！」

「待つて下さああいつ…！」

目にも留まらぬ速さで拳を繰り出すのはの前に、両手を広げたフェイトが飛び出していた。彼女に当たる！

「デッドリーウェイブツツ…！」

ゴス ゴキッ

鈍い音が2つ鳴り響いた。攻撃を寸前で止めるなどという事は全然無い。

フェイトとプレシアは頭にたんこぶをこさえて、揃ってのしイカみたいに床に転がった。

（やるんじゃないかとは思ってたけど…本当にやらかしやがった…
こつこつ場合寸前で止めようよ…）

ユーノはとても残念な人を見るように、引きつった笑いを浮かべた。
残念ながらガンダムファイターは、急には止まれなかった様である。

それでも手加減はしていたのか、2人はヨロヨロと身を起こした。
プレシアは若干涙目で、頭をさすりながらフェイトを睨み、

「…何のつもり…？言った筈よ…消えなさいと…」

フェイトはしっかりとプレシアの目を見据える。今まで一度も無かった事だ。

「私は母さんの娘です…！」

「何なの今更……？」

当惑し忌々しそうに吐き捨てるプレシアに、フェイトはゆっくりと首を横に振り、

「娘が親を助けるのに理由など要りますか！？」

フェイトは漢らしい太い笑みを浮かべた。ノリがおかしい。誰ですかアンタは！？状態である。

だがそんな2人の前に、悪魔の如くなのはがそびえ立った。かざした右手が今度は闇色に輝く。

「良い度胸だ！ならばフェイト貴様からなぶり殺しにしてくれるわあっ！！」

「ちよっ？なのはあっ！？」

ユーノはビックリして止めさせようとするが、なのはに止める様子は無い。無茶苦茶である。

ついに見境を無くしたのか高町なのは！？
駆け寄ろうとするアルフも間に合わない。死の右手が2人に振り下ろされる。

「死ねええいつ！ダークネス、フィンガアアアアッ！！」

闇色に輝く右手が叩き込まれた。思わず目を瞑るフェイト。凄まじい破壊音が響いた。

「……？」

何故か衝撃が来ない。恐る恐る目を開けた彼女の目に映ったものは、フェイトを庇ってなのはの前に身を投げ出した、プレシアの姿だった。

そしてなのはは、プレシアの目の前の床に、ダークネスフィンガーを打ち込んでいた。床にビッシリと亀裂が走っている。

なのははゆつくりと身を起こし、笑みを浮かべた。

「それで良い……」

その笑みを見たプレシアは、安心してガックリと床につずくまっ
てしまった。

「何故……私は……?」

「それは母だからよ……解っておったのだろう……?」

なのはの言葉にプレシアは床に膝を着いたまま頭を抱え、

「私は……」

その時シュバルツが数歩だけ前に歩み寄った。うずくまるプレシアを見下ろし、

「…プレシアよ…娘の…アリシアの言っていた事を思い出せ…」

「…言っていた事…？」

「そうだ…何か娘にせがまれた事がなかったか…？」

その時プレシアの脳裏にある会話が浮かび上がった。

あれは確か…忙しい仕事の合間に取れた休日に、アリシアとピクニックに行った時…

一緒に居てあげられないのを謝るプレシアに、アリシアは高笑いして、

「それならば、妹が欲しい！猪突猛進で単純な、手の掛かるバカな妹が…フフハハハハッ！」

忘れていたやけに具体的な言葉が蘇った。何故忘れていたのだろ

うとプレシアは思う。

自分はアリシアの妹で、自分のもう1人の娘を作った。それだけの事だったのである。

娘の偽物など最初から何処にも居なかった。そんな単純な事に気付かなかったのかと。

「母さん！」

「フエイト……」

プレシアの顔から凶相がこっそりと抜け落ちていた。しかしまだ躊躇っている様子がうかがえる。

「何をグズグズしておるかあつ！？」

なのはがプレシアの背中を押すように怒鳴った。

「私が今更母親顔なんて……」

今までの自分のして来た事を思い出し、罪悪感で俯いてしまうプレシアに、なのは優しく笑い掛け、

「フェイトの母親はプレシア殿だけぞ…間違えたなら、これから正せば良い…それが出来るのも母だけぞ…
それでも自分が許せぬと言っのなら…フェイトよ語ってやれい!!」

「はいっ!」

フェイトは威勢良く応え、両目からポロポロと涙を流している母に向き直った。

プレシアはフェイトの顔をまともに見られずうなだれ、

「フェイト…私は…」

「母さん私はフェイト・テストロッサ!あなたの娘です!うおりや
あああああっ!!」

「へぶえっ!?!」

フェイトの右ストレートが綺麗にプレシアに決まった。顔面にまともに食らい床に吹っ飛ぶ。

啞然として頬を押さえるプレシアに、フェイトはニツコリと微笑み、

「これでおあいこだよ母さん……」

色々手遅れ……いや見事な漢女おとめの笑みであつた。

「フェイト、あなたは娘よ！間違ひ無く私の娘よおおっ……！」

「母さああんっつ……！」

2人はがっしりと漢らしく、しっかりと抱き合つた。

二昔前くらいの少年漫画みたいな光景だが、それはプレシアとフェイトが本当の親子として分かり合えた瞬間であつた。

「えっ？今のでいいの！？強引じゃ無いかな……？」

ユーノはその光景に、少々引いてしまふが、なのははふっと笑みを浮かべ、

「言葉よりも、時には拳が何よりも心を語る事が有る……フェイトはああする事で、プレシアを許すと伝えたのだ」

「そついつものかな……？」

ユーノはそう言いながらも、無理矢理気味だが自分を納得させる事にした。

気にしたらキリがないと言つか、ツツコミが追い付かない。

「でも何だかんだ言ってもなのは凄いなあ…凄く…物凄く強引なやり方な気はするけど…しっかり決着を着けた…拳もたまにはいいのかな…？」

「はっはっはっ、ユーノもようやく分かったか…」

なのはは豪快に笑い声を上げた。シュバルツは相変わらず偉そうに腕組みしているが、満足そうに母子を見つめ頷いている。

アルフはフェイトとプレシアが和解した事は嬉しかったようだが、これで良かったのだろうか？と微妙顔である。

そんなほっこり？した空気が流れる中、次元震が収まって来ていた。どうやらクロノが駆動炉の封印に成功したらしい。

きつと死に掛けているんだろ…とユーノは思ったが、

（でも良かった…これで全部終わった…）

感慨深く、ふう…と息を吐き感慨にふけた時、床から不吉な音が響いた。それと同時に部屋が不気味に振動する。

「何だ…？」

不思議に思つて床を見てみると、先程ダークネスフィンガーを打ち込んだ個所から、部屋中に蜘蛛の巣状に亀裂が入っていた。

あつ？と思う間も無く足元がすぽーんと抜け、部屋の床が雪崩の様にガラガラと一気に抜けた。

「何だこりゃあああああああつ！？」

悲鳴を上げるユーノ。虚数空間の影響で、もう飛行魔法も発動しない。

「不覚っ…！」

シュバルツもプレシアとフェイト達を助け様として、逃げそびれてしまっていた。

なのはは落ちながらも、やっぱり偉そくに腕組みして高笑いし、

「ぬわっはっはっ！少々力み過ぎたらしいわい、儂もまだまだよのおっ！」

「前言撤回！やっぱり拳は駄目で、なのは只のウツカリさんだあ
ああああああ………」

悲鳴を上げて墜ちるユーノ。全員虚数空間に墜ちて行きました。

完…じゃなく、つづきます。

第21話 師匠やかすの巻（後編）（後書き）

オマケ

第6管理世界出身の地方在住で、農業を営むファイト・デストラップさん（男32才独身）は、野良仕事に出掛けようとした所、突然家に踏み込んで来た管理局員達に身柄を拘束された。

「ファイト・デストラップ！管理外世界での次元干渉と、魔法の無断使用に執務官の捜査妨害の容疑で来て貰おう！」

「アンタら、なーに訳の解らんこつ言つとるね？」

ファイトさんは何を言われているのか、サッパリであったという…

どこぞの濃い少女のせいで迷惑を被ったお百姓さんと、振り回された局員達が居たという…

皆さんお待ちかねえっ！

虚数空間に迷い込んだなのは達の前に現れたのは、あの伝説の都なのでしょいか！？

襲い来る無数の敵の前に、なのは達は絶対絶命のピンチに陥ってしまうのです！そしてその時！？

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠呼んでみるの巻』に、レディイイツ、ゴオオウウウッ！！

第22話 師匠呼んでみるの巻（前書き）

さて皆さん… ストーカー氏が夏休みの為、眼帯繋がりで私チンクがお送りする…

不幸な事故により、虚数空間に墜ちたなのは達はどうなってしまったのか… って言うか、これ完全に高町なのはのせいだろう…？

その先に待つものとは？ 闘いの嵐がなのはを待ち受けるのたが…
何時もの事だな…

それでは魔導師ファイト… レディイイツ… ゴオオオウウウ…！
少しテンションが低い。

第22話 師匠呼んでみるの巻

うねうねした虚数空間を、なのは達は何処までも落下して行く。
まるで白い闇の中に沈んで行くようだった。

（ああ…もう駄目だ…スクライアのみんなサヨウナラ…短い人生だったなあ…）

ユーノは無限にも感じられる墜落の感覚の中、色んなものが頭の中を走馬灯の様に駆け巡っているのを感じ観念した。

落下の速度が増し意識が遠のいて行く。ユーノの意識は暗黒の中に途絶えようとした時である。

「なる程…これが虚数空間か…なかなか面妖で面白い所ではないか？」

「ウム、科学者として実に興味深い…実際虚数空間に堕ちて生きて帰った者は居らんからな、本当に魔法が効かんぞ、フフハハハッ」

約2名、場にそぐわない会話をしている者達がいた。言うまでも無く、なのはとシュバルツである。

「アンタら、余裕だなあっ!？」

「どーすんのさ！この状況を！？」

相当不味い状況の中、律儀に突っ込むユーノとアルフだが、

「ふっ…慌てるでない…これしきの事で気を乱すなど二流のする事よ」

「己の心を研ぎ澄ますのだ、されば自ずと道は開ける！」

などと何時もと同じノリの、なのはとシュバルツである。それ以前にユーノはなのはに、頼むから反省してくれと心の底から思った。

一応2人共気絶したフェイトとプレシアを抱えているが、全く危機感が無い。

て言うか、まるで物見遊山にでも来たかのように、墜ちながらアチコチ見回している。余裕である。

ユーノは自分だけアタフタしているのが馬鹿馬鹿しくなったが、もちろん正常なのは彼である。その時だ。

「何か在るぞ！」

なのはが声を上げた。ユーノはへっ？となって彼女の視線の先を

辿ると…

「あれはっ！？」

思わず素っ頓狂な声を上げた。何と虚数空間の底に、巨大な都市が浮かんでいるではないか。

「ま…まさか…『アルハザード』！？」

ユーノは興奮して眼下に広がる大都市を見下ろした。古代の街のように、石造りの巨大な建物群がそびえ立っているのが見える。

遺跡発掘を生業にしている、スクライアー族のユーノにしてみれば、とんでもない発見である。

「よしっ、ではあそこに行ってみるとするか…私に掴まるのだ」

シュバルツが全員を促した。このまま行くと、アルハザードらしき浮遊都市の横をすり抜けて、更に墜ちてしまう。

飛行魔法が発動しない今、取り付く事は出来ないが、ゲルマン忍者な彼女には関係ないのだろう。

気絶しているフェイトとプレシアをみんなで抱え、全員で覆面ち

びつ子に掴まったところで、シュバルは『アイアンネット』を射出する。

鋼鉄製の網がとんでもなく長く伸び、巨大都市の外壁に絡み着いた。

ユーノはあんな物何処に隠してたんだと思ったが、今はゲルマン忍法に感謝である。

何やかんやで謎の浮遊都市に降り立つ事が出来た。ユーノは興味深く辺りを見回してみる。

古代の石造りの建物群が建ち並ぶ都市部を、これまた石造りの高い城壁が囲んでいる。

一見遺跡のようだが、まったく古びていない。城壁も建物も昨日作られたように新しく見えた。

「まさか…アルハザードなの…？」

意識を取り戻したプレシアも、驚いた様子で巨大な都を見上げている。せっかく来たのだから、アリシアを生き返らせると言い出しそうだが、特にそんな様子は無いようだ。

「何だろう…？これは…」

辺りを見回していたユーノは、城壁の入り口らしき、一枚岩で造られた巨大な扉の横に、文字が彫られているのに気付いた。

「…これは…古代文字か…？何とか読めるかな…？」

ユーノは今まで培った知識を総動員して文字の解読を始めた。
遺跡発掘を生業にするスクライアー族のユーノにとって、興味深くもある。

「ええと…此処は…人が持つには…過ぎた力の聖地…アルハザード…！やっぱり『アルハザード』なんだ！」

ユーノは興奮して声を弾ませた。何とかなりそうである。彼は引き続き文字に目を走らせる。

「警告…？此処は人が持つには…過ぎた力が眠る場所…何人たりとも…立ち入っては、ならない…？」

ユーノが文字解読で頭を悩ませている横で、なのはとシュバルツが何やら話し込んでいた。

「…なる程な…その様な事なら可能やもしれん…」

「…ウム…今考えられる手段はそれしかあるまい…」

などと話し合っていたが纏まったらしく、なのはとシュバルツは門の正面に立った。

「ふむふむ…侵入せし者には…死の鉄槌が…下るであろう…身の程知らずの…愚者に死あれ…？これって入ったら、問答無用で攻撃されるって事か…？なのはっ、中に入らない方がいいよ！」

古代文字を読む事が出来たユーノが、なのはに注意を呼び掛けた時、とんでもなくデカイ破壊音が響いた。

見るとなのはとシュバルツが、揃って繰り出した拳に破壊され、巨大な石の扉が砕け散って行くところであった。

「わあああああつ！？何やってんだ、アンタらあああつ！！」

舞い上がる粉塵の中、ユーノは真っ青になって絶叫した。しかしやっぱり、話をまったく聞いていないなのはは、

「誰か居るかあつ！居ったら応えんかあつ！儂は『流派東方不敗』高町なのは！是非話がしたい！」

と大声で誰か居ないか呼んでみる。ポツカリ開いた門の間から覗く街並みに、なのはの声だけが木霊した。

人気はまったく無い。応える者も無かった。どうやら無人らしい。ユーノはホッと胸を撫で下ろす。

（良かったあ…侵入者に、何かしらの罠でもあるのかと思ってたけど…もう滅んでしまった都なんだな…）

ユーノがそう推察している間にも、なのはとシュバルツは門をくぐり、ズカズカと我が物顔で街中に踏み込んで行く。

あの2人に恐怖心とか、あるんだろうか？とユーノは今更ながら呆れた。

フェイトとアルフに肩を貸して貰い、プレシアも複雑な表情で辺りを見回している。その時であった。

「気を付けいっ！何かがやって来おるぞ！！」

なのはは本人は鋭いつもり of 可愛らしい声で、警告を発した。

「あれは…！？」

フェイトは不気味な音を聞きつけて前方を見回した。静かだった無人の街の、あちこちから微かな機械音と、風を切る音が聞こえる。

「何だアレはっ!？」

ユーノが声を上げると同時に、街中の至る所から無数の奇妙な物体が、多脚を忙しく可動させて現れた。

人間と昆虫が合わさったような奇妙な姿をし、多脚の脚部に、二対の鋭い鎌を両手に装備している機械群である。

十数年後に『ガジェットドローン・ＩＶ型』と呼ばれる事になる機体と似通っていたが、もちろんなのは達が知る由もない。

ワラワラと出て来たガジェット群は、あっという間にその数を増やし、なのは達の前にぐるりと立ちふさがる。その数は軽く千を超えていた。

「うわあ…やっぱり、こういう事だったのか…」

青くなるユーノを尻目に、なのはとシュバルツはずいっとばかりに前に踏み出した。ガジェット群は反応して、一斉に鎌を構える。

「ふふん…大した出迎えよのお…」

「余程、入られたくないと見える…」

大軍に囲まれながらも、どこ吹く風の2人である。互いに得意の構えを取り、ガジェット群に向かおうとした時だった。不意に上空に人影が現れた。

天使のような白い衣を纏い、輝く十二枚の七色の翼を持った金髪
の髪をなびかせた、美しい女性である。

「何奴…？」

なのはの質問に、女性は感情を感じられない冷たい目で全員を見
下ろし、

《我は『アルハザード』の『守り人』…うぬらの様な、愚者を消し
去る為にだけ存在する者…此处を知った者は何人たりと生かして…
？》

「……………なのおっ！」「……………」（訳 すかしてるん
じゃないの！この悪趣味、派手派手カラス野郎がなのっ！）

《ひでぶつううっ！？》

そこまで言った時、女性守り人さんは、ミニなのは達に見事にぶつ飛ばされ、地面にゴチーッと落下した。

頭に7つばかりたんこぶをこさえて、ピクピクいつている。

「貴様は阿呆なのかつ！？能書きを垂れている暇があったら、さっさと掛かって来んかあつ！！」

頭を押さえて涙目の女性を見下ろし、なのははポポーンと怒鳴った。

「愚かな…ガンダムファイターに口先で語ろうなど片腹痛いわ！」

シュバルツも軽蔑したように守り人さんを見下ろした。ため息を吐くユーノは、あいも変わらぬ人外凶器の少女2人に、

「いや…そもそも語ってないし…今のタイミングで殴り掛かるなのはも大概だけどね…」

「何言ってるの！あんなの駄目だよ！ファイトの最中油断するなんてファイター失格だよ！！」

ツッコミを入れるユーノは、何故かフェイトに怒られてしまった。鼻息も荒く力説する金髪の少女を見て、ユーノは乾いた笑みを浮か

べ、

「君も色々と…手遅れなようだね……？」

「ありがとう！」

フェイトはとてもいい笑顔を浮かべてお礼を言う。

「言っとくけど、誉めてないからねっ！？」

ユーノのツッコミも、フェイトは何処吹く風である。

ふと彼女の後ろを見ると、アルフが引きつった笑みを浮かべ、プレシアは温かい眼差しでフェイトを見守っていた。

何かサムズアップしている。どうやら親バカを通り越して、バカ親に進化したらしい。

《こ…この…ゴミ屑共があゝっ！よくも…よくも守り人たる私に手を上げたなあゝっ！！》

ぶっ飛ばされた守り人さんは、さっきまでの冷徹さは何処へやら、憤怒の表情で怒りの声を上げた。

頭のたんこぶと涙目なのは、見なかった事にしてあげよう。

《掛けられえつ、守護の兵達よ！ゴミ屑共を一匹たりとも生かして帰すなあっ！！》

ガジェット群はブチ切れた守り人さんの命令に従い、一斉に鎌を振り上げて怒涛の勢いで襲い掛かって来た。

まるで街そのものが襲い掛かって来るような錯覚を覚える程の大群である。

迎え撃つのはとシュバルツの隣にフェイトも駆け付けた。

「私もお手伝いします！アルフ母さんをお願い！」

「虚数空間内では魔法は使えんのではないのか？」

不思議そうになのはは尋ねるが、フェイトは笑って手を掲げた。その手に電光がスパークする。

「この中だと魔法が使えるみたいです」

「なる程な…此処には特殊なフィールドが張られているようだ。『アルハザード』も主に魔法を使っているのだろう…」

シユバルツは科学者らしく状況を分析してみせる。

「そんな訳で行きます！」

言うが早いがフェイトは『バルディッシュ』を起動させ『フォトン・ランサー』をガジェット群に撃ち込んだ。

「えっ!？」

フェイトは啞然としてしまう。放たれた電光の槍が分散し、かき消えてしまった。

「『A M F』!？この機械はA M Fを装備しているわ!魔法がキャンセルされてしまう、気を付けて！」
アンチマギック・フィールド

プレシアはその現象から直ぐに敵の機能を見破った。伊達に研究部門で、大魔導師と呼ばれていた訳ではないのだ。

「ならば我らに！」

「問題ない!!」

唸りを上げる2人の魔法少女？の拳が、迫り来るガジェットをオモチャのように吹き飛ばす。

「はあっ！」

シュバルツは破片を巧みに避けながら、額のVの飾りをブーメランの如く投げつける。
飾りは鋭利な刃と化し、ガジェットの金属のボディーを次々と真つ二つにして行く。

「雑魚があっっ！！」

なのはの繰り出す掌底打ちに、ガジェットがスクラップになって転がる。

「高町なのは！お前は消耗している。切り込みは私に任せろ！！」

シュバルツは疾風の如く疾けながら叫ぶと、両腕のデバイスに装備されているブレードを展開した。

そして両腕を頭上でガツシリと組み合わせ、独楽の如く高速回転を始める。必殺技の態勢だ。

「シュツルム・ウント・ドラクンツツツツツッ！」

小型の人間竜巻と化したシュバルツは、ガジェット群の中に踊り込む。

竜巻に巻き込まれたガジェットは、吹き飛ばされ建物に激突爆発し、残りの機体はバラバラに砕け散って、破片を派手にばらまいた。張り切っているのか、何時もより多く回っております状態である。

「無効化フィールドが効かない？おのれええっ！怪しげな力を使いおつてえっ！何者だ！？」

守り人さんは鬼みたいな形相で齒噛みしている。永く生きて来た彼女だが、こんなおかしな連中を見た事がない。

ユーノは「ガンダムファイター」という凄く非常識な人達ですよ…」と教えてやりたくなったが「儂（私）は普通だ！」となのは達に怒鳴られる気がしたので止めておいた。

ガジェット群は阿呆みたいに次々と湧き出して来る。

シュバルツは獅子奮迅の闘いっぷりで、ゲルマン忍法で大暴れだ。『メッサーグランツ』が敵を突き刺し、『シュピーゲル・ブレード』が唸る。

なのはも派手な技こそ使えないようだが、非常識な身体能力で次

々とガジェットを破壊している。

一見なのは達有利に見えるが、上空に退避して戦況を眺めていた守り人さんは、ニヤリと嫌な笑みを浮かべ、

《ウフフ…、なかなかやるようだ…アルハザードには無限に守護兵達を生産出来る施設があるのだ！いずれお前達は力尽きるだろう！それに見るがいい！！》

守り人のヒステリックな声と共に轟音が響き、石造りの建物を中から砕いて、守護兵を遙かに上回る大きさのガジェット群が現れた。

「で…デカいいい…！」

ユーノは啞然として、大型戦車並みの大きさのガジェット群を見上げた。その姿は金属製の異形の昆虫のようである。

さすがは伝説の都アルハザード。色んな物が出て来る。

「いかんっ…！」

シュバルツはハツとした。後方に退がっていたプレシア達の方に、大型ガジェットの一機が唸りを立てて迫っていた。

顔面に中る部分が青白く輝く、熱光線を放つ気だ。

「させんっ！」

ガジェットIⅤ型を蹴散らして軽々と宙を舞い、プレシア達の前に素早く降り立ったシュバルツは、石造りの道を片手をバンツと当叩く。

次の瞬間、石のブロックがグバツとばかりに捲り上がり、ガジェットの熱光線からプレシア達を守った。

ゲルマン忍法・畳返しの術である。ドイツに畳があるのか!?!と言うツツコミは自動的にスルーされます。

熱光線でブロックが破砕され砕け散る。破片が降り注ぐ中プレシアは、目前に立つ少女をジッと見つめた。

「…やっぱり…あなたは…」

爆風で、シュバルツの覆面がほとんど脱げ掛けていた。その下にはフェイトと瓜二つの顔が覗いている。そっくりだが、フェイトより何才か年下に見えた。

「!?!」

シュバルツは慌てて脱げ掛けの覆面を被り直し、

「そんな事はどうでもいいっ！今は退がっているんだ！」

そう促すシュバルツの後ろに巨大ガジェットが迫る。

「シュバルツ！呆けておるでないっ！！」

なのはは怒鳴ると同時に関節部を狙い『マスタークロス』を打ち込んだ。関節をやらね、地響きを上げて倒れ込むガジェット。

今の彼女の体力ではこれが目一杯である。シュバルツの隣に着地したなのはは、

「シュバルツよ…このままでは、いずれ力尽きよう…」

「ウム…お互いまだ子供の身…私の体は機械を埋め込まれ強化されているが、7才相当の体では、そうは保たん…」

シュバルツもさすがに消耗しているようだ。というか、何げに重要な事を言った気がするが、気にしてないなのはは、スルーである。

上空では守り人さんが、勝ち誇った顔をして此方を見下ろしている。自滅するのを待っているのだ。

「そこで儂に考えがある！」

なのはは右腕の『キング・オブ・レイジングハート』（紋章が浮き出ているので…）をかざし不敵な笑みを浮かべた。

その真紅のコア部分から、青く光を放つ宝石が現れた。今までコツソリ集めていた『ジュエルシード』である。

「なる程な…願いを叶えるものとしては欠陥品だが…強靱な精神力で支配すれば、アレを此処に呼び出す事くらいは出来るかもしれない！」

シュバルツは目を輝かせた。なのはは宙に浮く青い宝石を示し、

「確実に成功する保証は無いが、それでも良いか!？」

「フフハハハッ、見くびるなよ高町なのは!」

「ふっ…」

なのはは満足げに頷くと『ジュエルシード』を素手で掴む。シュバルツもその宝石をなのはと共にしっかりと掴んだ。

2人の魔力を注入された『ジュエルシード』が青い光を放つ。

「なのはっ、何をする気なんだ!？」

ユーノがその様子に気付いて声を掛けるが、なのはは振り向きもせず、

「離れておれ!」

一声注意を促すと、なのははシュバルツと共に『ジュエルシールド』を握り締めたまま叫ぶ。

「ぬああああああっ!！」

「ガンダアアムウウウツ!！」

なのはの周りを包むように、マスタークロスが螺旋を描き、シュバルツの掲げられた指がパチインツと鳴らされた。

それと同時に『ジュエルシールド』が更に青く輝き、2人の背後の床が激しく光を放つ。

「うわあっ!何か偉そうなのがっ!？」

ユーノは驚愕して叫んだ。光の中から2つの巨大な人影が、床か

ら湧き出す様に現れたではないか！

一つは漆黒を基調にしたボディー、巨大な2本の角が目立つ頭部に、背中の巨大な紅い翼を持つ巨人。

もう一つはヘルメット状の頭部、黒と白のコントラストのボディーに、両腕にゴツイブレードを装備した巨人。

仁王立ちするなのはとシュバルツの背後に、分身の如くそびえ立つ2体の巨人は、2人のかつての愛機『マスターガンダム』と『ガンダムシュピーゲル』！

ガンダムを呼んじやいました…

つづく

第22話 師匠呼んでみるの巻（後書き）

大変お待たせしました。 やっちまった感がありますが、ガンダム登場です。

ちなみに平行世界から呼び寄せた感じです。 その世界のマスターとシュバルツはガンダムを取られた形ですが、別に支障無かったそうです。

皆さんお待ちかねええ、チンクだ。 ついに現れた2体のガンダム…これって反則以外の何者でもないな…

守り人さんの無事を祈ってやってくれ…

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠割ってみるの巻』にレディ
イイツ…ゴオオオウウウ…！

第23話 師匠割ってみるの巻（前書き）

さて皆さんっっ！！（休み明けて無駄にテンションが高い）

驚くべき事に、なのはとシュバルツは『ジュエルシード』により、かつての愛機マスターガンダムとガンダムシユピーゲルを呼び出したのです！！

そしてシュバルツの秘密の一端が明らかに！？アルハザード決戦もいよいよ決着です！！

それでは、魔導…いえ今回は！ガンダムファイト！レディイイツ、ゴオオオウウウッ！！

「私はまだ修行が足りんな…」 チンク姉

第23話 師匠割ってみるの巻

数年前・ミッドチルダ某所

此処は人気の無い山中に作られた、ある組織の秘密研究所である。簡単に言つと大掛かりな犯罪組織の息が掛かった、非合法的な研究所だ。

研究の目的は武器の開発や、戦闘サイボーグ『戦闘機人』の開発である。

その施設の一室に、青い髪をした2人の幼い少女が閉じ込められていた。

少女達は何も無い寒々とした部屋にポツンと一つ置かれた、鉄パイプ製の粗末なベッドに、身を寄せあつてうずくまっている。

2人は戦闘機人と呼ばれるサイボーグの、プロトタイプとして開発された少女だった。

来る日も来る日も実験と検査の毎日、名前すら無い。タイプ01、02と製造番号だけが、彼女達に与えられたものだった。

そんな生きているか死んでいるのか、判らない日々が続いたある日の事だった。

01と呼ばれる長い髪の年上の少女は、周りが騒がしい事に気が

付いた。

怖がるショートカットの年下の少女02を抱き締めてやりながら、周りの様子を窺ってみる。

研究所の科学者達や護衛の魔導師達が、慌てふためいているようだった。あちこちで爆発音も聞こえる。

「他の研究所から脱走した筈のタイプ00が何で此処に！？」

「あの大魔導師の娘の流出遺伝子で作られたヤツか！？何で！？」

「判らん！最後の通信では、何年も大人しかった00が急に「これ位成長すれば貴様ら外道共に用は無い」とか言って、妙な覆面を被って暴れ出したそうだ！何で00はあんな力を！？」

そんな会話が聞こえて来た。少女には意味が良く解らなかったが、何者かが研究所に襲撃を掛けて来たらしい。

激しい破壊音が響き、砲撃魔法らしき音も聞こえる。

「うぎゃあああ〜っ！〜！」

「うわあゝっ！こっちに来るなあ！！」

「たっ、助けてくれえゝっ！」

研究所の護衛魔導師達の悲鳴が聞こえて来た。どうやら一方的にやられているらしい。

少女は悲鳴と破壊音に混じって、何か変な笑い声を聞いた気がする。

次の瞬間ひととき大きな音が響いた。まるで室内で、竜巻でも発生したかのように研究所が揺らぐ。

衝撃で壁に亀裂が入り、頑丈な部屋の扉が弾け飛んだ。

幾つかの悲鳴が聞こえた後、人の足音が近付いて来るのを少女01は察知した。

襲撃者が部屋の中に入って来たようだ。

研究所はさっきまでの騒ぎが嘘のように、静まり返っている。どうやら全滅してしまったらしい。

少女は近付いて来る人影の前に、年下の少女を庇うように抱き締めた。

幾ら戦闘機人のプロトタイプでも、まだ幼い2人には満足に戦う力は無い。足音が迫る。年下の少女は震えてしがみついたままだ。

殺される！と少女は02を抱き締めて、思わず目を瞑っていた。その時、

「安心しろ。私は味方だ！」

少女の可愛らしい声に似つかわしくない、偉そうな言葉遣いの声がした。

少女が驚いて顔を上げると、妙ちくりんな覆面をした金髪の少女が腕組みして、とっても偉そうに立っていた。

時空管理局所属の女性陸戦魔導師『クイント・ナカジマ』は通報を受け、他の局員と共に、秘密研究所に駆け付けていた。

研究者や、護衛魔導師は全員のびており、研究所はメチャクチャに破壊されている。

現場検証の中クイントは、保護した少女2人に話を聞いてみる事にした。

年下の少女は人見知りなのか、年上の少女の後ろに隠れていて、話を聞くのは無理そうである。

一方年上の少女はクイントの目をしっかりと見て一言、

「覆面格好良かったです！」

目をキラキラさせて言った。

「覆…面……？」

クイントは訳が解らず抜けた声を出していた。

『マスターガンダム』に、『ガンダムシュピーゲル』それぞれの機体腹部のコックピットハッチが、ガシュツとばかりに開く。

なのはとシュバルツはノミの如く跳ね、その小さな姿がコックピット内に消えた。

ここは脳内BGMで、シャイニングフィンガーの時の音楽を流すといいかもしれません。

モビルトレースシステムが起動を開始する。
全○な姿でコックピット中央に立つ2人（お察し下さい）に、薄

いゴム状の膜を張ったリングが降下し、粘着製の膜が物凄い圧力で、少女の体にぎゅるぎゅると張り付いて行く。

その圧力には普通、子供に耐えられるものではない。

しかし2人の人外少女には関係ないようだが、幾分少女達に悩ましげな苦悶の表情が浮かぶのはお約束。

少女の細い肢体に、各種センサーが組み込まれたファイティングスーツが、巻き付くように、ピッタリと装着された。

なのはは紫色の少女の肢体がくつきり見える、ファイティングスーツである。

胸に日の丸をあしらった姿は、かつての愛機『ヤマトガンダム』に乗っていた時と同じデザインだ。

「ふふふ…9年振りのガンダムか…久しいのお…」

なのはは懐かしげにコックピット内を見渡し、しみじみと呟いた。

《フツ…全くだな…》

シュバルツは以前と同じ、ドイツ国旗を思わせる3色を基調としたファイティングスーツを眺め、感慨深そうだ。

全システムが起動し、全方位モニターが周囲の景色を映し出す。

2機のガンダムのメインカメラに火が灯り、唸りを上げるように全機能が起動を開始した。

『はあああつ！！』

『オオオオツ！！』

2人の気合いと共に、マスターガンダムは機体を慣らすように、流派東方不敗の演舞を無駄に華麗に舞う。

ガンダムシュピーゲルも負けじと両の腕をジャキーンとばかりに力強く振る。とんでもない迫力と闘気であった。

その動きは正に人間そのもの。モビルトレースシステムは、完全にガンダムファイターの動きをトレースする。

《な…何なのだ…？それは一体…？》

守り人さんは啞然として、2体のガンダムを見た。こんなおかしな光景は見た事が無い。

なのは…いやマスターガンダムは、その巨大な拳を突き出し、

『ふっふっふっ…そう…これが高町なのはのもう一つの姿…マスタ

「ガンダムだ！」

『フフハハハ…ガンダムシユピーゲル見参…！』

ガンダムシユピーゲルは凄まじく偉そうに腕組みして、高らかに名乗る。その光景にフェイトは、

「格好いい…！」

と目をキラキラさせて見入っていた。隣を見ると、似たような感じでプレシアもガンダムを見上げ、

「美しいわ…！」

などと感嘆の声を上げている。この親子もう駄目だ！とユーノは思った。

アルフは後ろで頭を抱えて、ブツブツ何か言っている。色々ついて行けないらしい。

《こけおどしだ！殉滅せよ守護の兵達よおおっ…！》

守り人さんの指令の元、大小様々なガジェット群が雪崩の如く、2体のガンダムに襲い掛かった。

それに合わせるように、なのはとシュバルツは叫ぶ。

『相手としては物足りんが久々だ！ガンダムファイト！レディイイツ…』

『ゴオオオウウツ！！』

それを合図に、2体のガンダムはバーニアを噴かすと、爆発する勢いで同時に飛び出した。

一瞬にしてガジェット群が木の葉のように宙を舞う。次々と爆発音が轟き、破片が飛び散った。

マスターガンダムの腕部から光る布状の物体が飛び出し、迫り来るガジェット群を一斉に蹴散らしたのである。ガンダム版『マスタークロス』だ。

ガンダムシュピーゲルが腕のブレードを一閃させると、戦車サイズの巨大ガジェット群が、真っ二つに叩っ斬られて吹っ飛んだ。

たちまち千機近いガジェットが、一山幾らのスクラップの山と化する。ガジェットは2体のガンダムに、触れる事すら出来ない。

しかしガジェットも新たな機体が続々と湧き出して来た。どうやら無限にガジェットを生産し続けられるというのは、ハッターでは

ないようだが…

『雑魚があつ！！』

『笑止つ！！』

2体のガンダムはまったく怯まない所か、鬼神の如くガジェット群を蹴散らし行く。

途中トラップが発動したらしく、2体のガンダムに次々と魔法陣が展開される。

それは現行の魔法を遥かに超えた、空間ごと対象物を破砕する魔法や、高重力で相手押し潰す魔法などの恐るべき魔法であった。

人や機械が察知出来る攻撃では無い。アルハザードは伊達では無いのだ。

しかしなのは達は楽々と発動前にヒョイヒョイとかわしてしまう。守り人さんは驚愕した。

《そんな馬鹿なっ！何故かわせる！？

人間やセンサーで避けられる代物では無いぞ！？》

マスターガンダムとガンダムシュピーゲルは、ガジェット群を蹴

散らしながら、

『たわけがあつ！こんなグズな攻撃が、『流派東方不敗』に通じると思つたか！？』

『明鏡止水の心だ！！』

などと、答えになつてない答えを返しておく。まともに考えても無駄なのである。ガンダムファイターだからなあ…（笑）としか言ひようが無い。

何というか、お話にもならなかった。ユーノは暴れまわるガンダムを見て、

（これは酷い！！）

と思つた。もはや「魔法少女？それはどんな食べ物ですか？」状態である。ベクトルが明後日の方向どころか、異次元までぶっ飛んでいた。

『どうした！どうした！どうしたあああつ！！』

ガンダムシュピーゲルは、ガジェットを『アイアンネット』で纏めて絡め取り、網に掛かった大漁のイワシのようなガジェットを、ブンブン振り回し地面に叩き付ける。

ガジェット群は粉々に砕け大爆発を起こし、盛大な火柱がアルハザードに上がった。

『流派東方不敗が奥義！十二王方牌・大車併っ！！』

『なのっ！！』 『なのっ！！』 『なのっ！！』 『なのっ！！』 『なのっ！！』 『なのっ！！』 『なのっ！！』 『なのっ！！』 『なのっ！！』 『なのっ！！』

マスターガンダムが前面に展開した梵字の陣から、マスターガンダムの格好をしたミニなのは達が一斉に飛び出す。

本来なら、ミニサイズのマスターガンダムが飛び出すのだが、どうやら桃子母さんの侵食が、こんな所にまで影響を及ぼしたらしい。

子供がコスプレしてるようにしか見えないが、元がマスターガンダムなので普通にデカい！

マスターなミニなのは達は、ミサイルの如くガジェット群に突っ込み、楽しそうに笑声を上げ破壊の限りを尽くす。

もうメチャクチャであった。大暴れどころではない。蹂躪を通り越して、もはやギャグだった。笑うしかない。

ユーノは何時ものノリで、アレに巻き添えを食うと死にそうなので、マスターなミニ達に見つからないように素早く隠れた。

数千機程を片付けたところで、なのははシュバルツに呼び掛ける。

『一機一機に構っていてもしょうがない！シュバルツ手を貸せい！
まとめて奴らを吹き飛ばす！！』

『フツ、アレをやる気だな？承知！！』

察したシュバルツはニヤリと即答する。さすがは闘いの極みに通じた者同士、即席の連携でも息はピッタリだ。

『超級霸王！』

『ゲルマン電影弾っ！！』

なのはが叫び、シュバルツが続く。何処からともなく稲妻が走り、なのはの周りにクツキリと『超級霸王ゲルマン電影弾』の書き文字が見えた。

毎度毎度だが、本当に幻覚なのだろうか？とユーノは何故か冷や汗をかく。だがまだ甘かった。

マスターガンダムボディが光る『気』の塊に包まれ、ギュルギュル回り始めたのも、まあいいだろう。

ユーノも見慣れた『超級霸王電影彈』である。だが問題は！

「何でガンダムの顔が、なのはの顔になってるんだあつ！？」

ユーノは思いっきりツツコミを入れていた。

回転する『氣』の塊の中央に浮かぶ顔は、マスターガンダムのゴツイ顔では無く、どう見てもなのはの顔である。

フェイトはその、なのはなマスターガンダムを見上げ、

「凄い！これはきつとあの子がガンダムで、ガンダムがあの子という事だよ！」

「君は黙ってなさい！」

ユーノはどこぞの武力介入な人ばりに、上手い事言ったとドヤ顔の、阿呆の子になりかけている少女に突っ込んでおく。

「これは…興味深いわ！メモメモ…」

プレシアは懷から端末を出して何か書き込み始めている。

「アンタはアレをメモって、どうする気なんですか！？って、ツッコミが追いつかないっ！！」

とユーノが頭を抱えている前で、そんな事はどうでもいい！とばかりに、なのはは叫ぶ。

『撃てえいつ！シユバルツ！！』

『そおりやあああああっ！！』

こちらも、そんな事はどうでもいい！！とばかりに、ガンダムシユピーゲルは、集中した『気』をマスターガンダムに撃ち込んだ。

『ぬわあああああああっ！！』

シユピーゲルのパワーで打ち出されたなのはは、凄まじい勢いでピンボールのように、敵の大群に突っ込んだ。

怒牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙牙っ！！

ガジェット群を蹴散らして、マスターガンダムは一直線にアルハザードを突っ切った。

次々と無数の爆発が起こる中、宙に舞い上がったマスターガンダ

ムは、空中で何時もの構えをビシッと決め叫ぶ。

『ばあくうはあつつっ！！』

掛け声と同時に、マスターガンダムの突撃した場所を中心に、凄まじいばかりの爆発が起こった。

爆発は導火線のように直進し、誘爆して次々とガジェット群を巻き込んで行く。

「わわわああっ！？」

ユーノは爆発の振動に足を取られて倒れそうになった。だがそれだけでは終わらない。

アルハザードが揺れ動いている。不気味な軋み音が都中を駆け巡った。

『超級霸王ゲルマン電影弾』の炸裂した破壊線から、地面にバツクリと亀裂が走る。

《止めてええええっ！？》

守り人さんの絶叫が聞こえた気がしたが、ユーノ達はそれどころでは無い。

更に地面が大きく揺れ、立っていられなくなったユーノ達は、亀裂の無い場所まで退避してやり過ごす。

もうもつと粉塵と爆煙が立ち込める中、揺れがようやく収まった。視界も開けて来る。

「ふう…、何時も以上にはた迷惑な……」

ユーノはため息を吐くと、引きつった表情でメチャクチャになっているアルハザードを見回した。

被害の程度は判らないが、ガジェット群は全滅しているようである。動いているものは一つも無い。

そして見上げると煙の中、物凄く偉そうに腕組みしてそびえ立っている、マスターガンダムとガンダムシュピーゲルの姿があった。

そのボディーには、傷一つ付いていないようだ。こちらの方が悪い方に見えるのは気のせいだと思いたい…

《いやああああああああああつ！？》

その時守り人さんの、身も世も無い悲痛な叫びが響いた。叫び声がした方を見ると、巨大な亀裂の前で守り人さんが地面にへたり込んで頭を抱えている。

亀裂を良く見て見ると、亀裂から向こう側と此方が妙に離れてい
た。割れた地面から虚数空間が覗いている。

アルハザードが真つ二つ……いや勢い余って、四つに割れていまし
た……

つづく

第23話 師匠割ってみるの巻（後書き）

シュバルツの話を入れたので、アルハザード編が今回で終わりました。

シュバルツはこんな感じです。ギン姉の将来は…お察し下さい。（笑）チンク姉も…

それでは嘘予告を…

皆さんっっ！お待ちかねえっ！！

アルハザードに詫びを入れさせたなのは出す条件とは！？ちなみにクロノは燃え尽きているのです！

魔闘少女リリカルマスターなのは『師匠いい事を言ってみるの巻』にレディイイツ、ゴオオオウウウッ！！

第24話 師匠いい事を言ってみるの巻（前書き）

平凡な小学3年生だった筈の儂、高町なのはに訪れた小さな事件：

信じるものは不屈の魂、手にしたのは魔法の力：

例え先に何が待ち受けようと、今は己を磨くのみ！東西南北中央不敗を目指して！

魔闘少女リリカルマスターなのは、レディイツ、ゴオオウウツ！！

「魔法の部分をガンダムに変えた方がいいと思います…」 ユーノ

第24話 師匠いい事を言ってみるの巻

世の中には土下座というものがある。

心からの謝罪、許しを乞う場合の最上ランクの形態と言えよう。

他にもジャンピングとか、スライディングとか焼きとかも有るが、それは置いて。

世の中土下座を武器に、世間の荒海を渡っている強かな人も居るが、土下座がごめんなさいという意思を伝えるのには最強という事には、あまり反対意見は無い筈である。

《すいませんでしたああつ！勘弁して下さいいいつ！！》

守り人さんは床に頭を擦り着けて、ガタガタ震えながらなのは達に懸命に謝っていた。綺麗な三角形を描いた、見事な土下座である。

アルハザードに土下座の習慣は無いと思うが、守り人さんの本能的なものが自然この形態を取らせていた。

その様子をガンダムから降り立ったなのはとシュバルツは、相変わらずというかデフォルトというか、偉そくに腕組みして見下ろしている。

ユーノは守り人さんを同情の眼差しで見て、

（あの暴れっぷりを見せられちゃあなあ…）

と同情を禁じ得なかった。周りを見ると、おびただしい数のガジエットの残骸が転がり、街は滅茶苦茶である。

ついでにアルハザードが4つに割れて、とても悲惨で哀れな事になっていた。

さっきの『超級霸王ゲルマン電影弾』で、生産施設も破壊されてしまったらしく、ガジエットも出て来ない。幻の都が台無しであった。

もう相手が悪かったとしか言いようが無い。

「顔を上げい…守り人とやら…」

なのはは静かに、土下座している守り人さんに声を掛けた。

「儼然も無駄な争いは避けたかったのだが…身を守る為、やむを得ず闘ったのだ…争うのは本意では無い」

「なのは…それ説得力ゼロもいい所だよ……」

ユーノはとてもそうは見えない少女に、明後日の方向を見ながらツッコミを入れおく。

シュバルツは、こちらにも相変わらぬ腕組みで、

「フ…武道家とは本来、拳を交えなければ判り合えない不器用な者達なのだ…」

「それでこの有り様！？どんだけ不器用なんですかアンタら！！」

もはや災害レベルの不器用者達に、ユーノは律儀にツツコミを入れるが顔が赤い。

「ところでユーノよ、先程から何故此方を見ないのだ？」

それに気付いたなのは、明後日の方向を向いてツツコミを入れているユーノを不審に思って声を掛けた。

「ななな何でも無いよ…？」

ユーノは慌てて否定するが怪しい。そんな少年の顔をなのは、ずいっと覗き込み、

「顔が赤いぞ？熱でも有るのではないか？」

「ほっ、本当に何でも無いからっ！」

慌ててユーノは、なのはから目を逸らした。彼は非常に困っていた。問題はなのはとシュバルツの格好である。

ファイティングスーツというものは、非常に薄い。少女の肢体が丸分かりである。オトコの子としては目のやり場に困るのである。本人に自覚が無いので質が悪い。

「ふっ…おかしな奴よ…」

あくまで顔を逸らすユーノを？という表情で首を傾げるなのはだが、特に気にもせずに取り人さんに向き直ると、

「此処アルハザードは、禁断の秘術が眠る都と聞いたが、本当か…？」

《はあ…一応今の管理世界より遥かに優れた技術が有りますけど…》

守り人さんは顔を上げ、ビクビクしながら応える。相当びびっているようだ。無理も無いが…

「ならば、死んだ人間を蘇らせる事は出来るのか？」

《いえ…幾ら何でもそんな事は出来ません…本人と同じクローンは作れますけど、死んだ人間本人を生き返らせる事は出来ません…》

なのはは目を閉じてふむふむと納得して頷き、

「そうであろうな…プレシア殿、そういう事だそうだ…」

いきなり話を振られたプレシアはハッとするが、静かに横に首を振り、

「もついいのよ…」

微笑んでフェイトの肩に手を置くと、腕組みしているシュバルツに懐かしげな視線を向けた。やはりバレバレだったようである。

「ならば…この女性の病気を治す事は出来るか？」

なのははプレシアをずいっと指した。

ハッとするプレシアと、顔を青ざめさせるフェイトを余所に、守

り人さんはプレシアをジツと見つめる。彼女の体をスキャンしているようだ。

しばらく何やらぶつぶつ言っていたが再び顔を上げ、

《だいぶ悪いようですが、その程度なら簡単に治せます》

「ふむ、では頼めるな…？この高町なのはが頼む…」

背後に、ズゴゴゴゴ…という書き文字が見えそうな頼み方であった。

どう見ても頼んでいるというより、恫喝しているようにしか見えないのはに、守り人さんは平伏して、

「ぜぜぜ是非やらせて下さいいいっ！全力で治させて下さいいいっ！」

これを断ったら、どんな目に遭わされるか知れたものでは無い。守り人さんは床に頭を擦り着けながら、こんな事なら最初に大人しく話を聞いておけば良かったと思った。

「母さん！」

いきなり母親の病気の事を聞いて不安だったフェイトは、嬉しさ

のあまりプレシアにしがみついていた。

プレシアは呆気にとられている。不治の病と医者に告げられてから、自分の身の事は諦めていたからだ。

「本当にありがとう…あなたが居なかったらどうなっていたか…」

プレシアは自然なのはに頭を下げていた。フェイトと同年くらいの少女に頭を下げる事に、何の躊躇いも感じなかった。

この異様なまでに偉そうで非常識な少女には、そうさせるだけのものが有るというか、前世がマスターアジアなので無理も無い。

ユーノは治療の為守り人さんに着いて行く（見張りのミニなのは付き）プレシアと、付き添うフェイト達を見送りながらホウ…と息を吐いた。

めでたしめでたしの筈のだが、ここまで辿り着くのにとれだけ被害が出た事かとユーノは、今までの事を思い返し更にため息を吐く。

そんな事はまったく気にしていないなのは、隣で目を細めてプレシアを見送る覆面少女に、

「名乗らんのかシュバルツよ…?」

「フツ…母さんにはお見通しのようだし、今更必要あるまい…今は2人の時間が必要だ…それにマスクを取ってしまったら、只のアリシアになってしまうのではないか!」

それなりにシュバルツというキャラに愛着が有るらしい。

「なのは…前々から気になってたんだけど…その子って…?」

ユーノはさすがにもう聞いてもいい頃合いっぽかったので、聞いてみる事にした。なのははフムと頷いて、

「元『キヨウジ・カツシュ』で『シュバルツ・ブルーダー』で、フエイトの姉『アリシア・テストロツサ』に生まれ変わり、更にシュバルツ・シュベスターとして蘇ったアリシアだ」

「ややこしいっ!?!」

何か色々とごちゃごちゃしていた…

「しかし…シュバルツ、お前に一つ言っておきたい事がある…」

なのははふと思い出したように声を掛けた。

「何だ？高町なのは」

なのははシュバルツの覆面をじーっと見て、

「何を事故如きで死んでおるか！このたわけ者があつ！お前がアツサリ死ぬからこんな事になったのではないかあつ！修行でもサボつておったのか！？」

「仕方なからう！記憶が蘇ったのは、この体になった時だ！アリシアの時は、ただの子供だったのだぞ！せいぜい性格が同じぐらいなものだ！！」

性格だけ同じ…それも何か嫌だなあ…と思うユーノであった。さぞかし濃い子供だった事であろう。

「しかし…いささか都合良くは有る…以前の体は魔力も無かった…」

今は戦闘機人の体といい、まるで以前のシュバルツ・ブルーダーのようではないか…？」

シュバルツは自分の体を改め見て、疑問を浮かべた。なのほも少し考え込み、

「確かにな…儼らがこの世界に生まれ変わったのも、偶然では無いのかもしれない…」

何やら真面目な話になったようであるが…

「まあ…なるようになるであろう。何か有るにしても、それまでに『東西南北中央不敗スパー』なのは』でも目指して修行に励むとするか、ぬわっはっはっはっ！！」

「フツ…確かにくよくよ考えるより、今は己を鍛えるべき時期だろうな…こちら遅れは取らんぞ高町なのは！フフハハハッ！！」

さすがはアバウ…豪快な2人である。前向きと言うか、大して気にしていない。

「いやっ！かなり重要そうなんですけど！？少しは気にしようよ！！」

ユーノは高らかに笑い合うのはとシユバルツに注意を呼び掛けるが、やっぱり2人は全く話を聞いていない。

ユーノはやれやれと肩を竦めながらふと、

（何だか、この先猛烈に悪い予感がするなあ…）

などと、どこぞのサザエさん頭の人のような事を思っただけであつた。

そんな事やってる間に、治療を終えたプレシア達が帰って来るのが見えた。

「それでは世話になったな…」

なのはは、かしこまっている守り人さんに声を掛けた。

《あのう…アルハザードの事は秘密という事で、お願いします…》

世話をしたというより、脅されたと言うのが正しい守り人さんは、おずおずと頼み込んだ。

なのはは優しい笑みを浮かべ、

「ふっ…分かつておる…過ぎたる力は身を滅ぼす…本来此処は人が触れるべき場所では無いのであるう…人は力に群がるもの…誰にも利用されず、静かに虚数空間で眠るが良い…」

「今更いい事言っても手遅れだよなのは…」

ユーノは廃墟と化したアルハザードを指差して、強引に良い話に纏めようとしている人外少女に突っ込んでおいた。

『行くぞ!』

マスターガンダムに乗り込んだなのはは、背中のラウンドシールドをガシヨングアシヨンと閉じて、マントを羽織ったような長距離飛行形態を取った。

ユーノやフェイト達は、マスターガンダムとシュピーゲルのコッ

クピットに、それぞれ乗つけて貰っている。

『それではさらばだ、達者で暮らせよ！』

マスターガンダムはシュピーゲルを背中に掴まらせるとバーニアを噴かし、轟音を上げて一気に虚数空間へと飛び立った。

確かに魔法もへつたくれも無いガンダムに、虚数空間は無意味である。

バーニアの噴煙の軌跡を虚数空間に描いて、マスターガンダムとシュピーゲルは見えなくなった。

それを見送る守り人さんは居なくなったのを幸いに、

《二度と来んなああっ！阿呆おおおおおっ！！》

と廃墟になったアルハザードで悪態を突いた時、守り人さんの頭に狙いすましたように上から破片が落ちて来た。

ゴス

直撃を食らい、たんこぶをこさえ涙目でしゃがみ込む守り人さんの耳に「なのっ！」という台詞が聞こえた気がした。地獄耳なのである。

――――
ボロボロのクロノ・ハラウンは、ヨロヨロ歩きながら、なのは達の闘いが有った、玉座の間に辛うじて辿り着いていた。

次元震は収まったが、ジュエルシード暴走の余波で、虚数空間が時の庭園を飲み込みつつある。崩壊が始まっていた。

不気味な異音があちこちから上がり、次々と天井が崩落している。

「まさか…みんな虚数空間に墜ちたんじゃ…？」

クロノは床がみんな崩落してしまっている部屋を見て、顔を青ざめさせるが、なのはがピンチに陥る場面がどうしても想像出来ない。

「例え墜ちたとしても、あの子だと自力で這い上がって来そうなんだよな…」

そう呟きながら虚数空間を覗き込んだクロノの目に、妙なものが映った。

「なっ、何だあっ!？」

驚く間も無く、妙な物体は超スピードで上昇し、巨大な影が爆音と衝撃波を伴って現れた。

「わああああああっ!？」

クロノは衝撃波に飛ばされ、柱の角に頭をぶつけて意識を失った。

「うん……？」

クロノは柔らかい感触の中目を覚ました。以前にもこんな感触を味わった事が有った気がした。

目を開けると、ぼんやりと少女の顔が見える。なのはであった。

「なのは君……？」

そこでようやくクロノは崩壊する庭園の中、自分がなのはにお姫様抱っこされて運ばれている事に気付いた。

隣には心配そうにこちらを覗き込んでいるユーノの姿も有る。

「なのは君、おっ降ろしてくれえ！」

年下の少女にお姫様抱っこ、なかなかこっ恥ずかしい様である。クロノは身じろぎして降ろして貰おうとしたが、体力と魔力の限界を超えた体は悲しい程言う事を聞かなかった。

なのははそんなクロノに温かい眼差しを向け、

「良く頑張ったなクロノよ…恥じる事は無い、力の限り闘ったのだ今は休んでおるが良い…」

異様なまでの安心感とその笑顔に、不覚にもクロノはドキリとしてしまった。

（違う！僕は断じてドキドキなんかしてないぞ！）

少年は高鳴る鼓動を必死で否定する。思春期のオトコの子は色々複雑なのだ。

無駄に美少女なのがまたキツイ。

そんなクロノの葛藤というか悶絶を余所に、3人は時の庭園の外壁に出た時クロノに通信が入った。

《クロノ君聞こえる?》

エイミイの声である。3人の上空にアースラの銀色の船体が見えた。次元震を感知して駆け付けて来てくれたようだ。

こうしてなのは達は、崩壊する庭園から無事脱出する事が出来た。残りのジュエルシードは、なのはから渡され、甚大な迷惑と被害を出して、事件は無事?解決したのである。

さて…シュバルツとフェイト達はどうしたかと言つと…

日曜日の午前10時を回った頃、月村家当主・月村忍さんは目を覚ました。

昨晩は少々夜更かしをしてしまい、起きるのがこんな時間になってしまったのである。

暖かな日差しが射し込むテラスで、ノエルさんに遅いモーニングティーを入れて貰う。

優雅に紅茶の香りを楽しんでいた忍さんは、ふと木々が生い茂る庭に目をやった瞬間、飲んでいた紅茶をブッと吹いていた。

何故なら庭に巨大ロボットが2機ドーンとそびえ立っていたからである。マスターガンダムと、ガンダムシユピーゲルだ。

「ちょちょちよつとおっ！？ノエル？何？何なのよアレはあっ！？」

パニクる忍さんにノエルさんは、偉そうなガンダム2体に視線を向け、

「ああ…あれは、なのはお嬢様の専用機で、マスターガンダムと言うそうです。」

今朝方、なのはお嬢様の紹介の方々が一緒にお出でになっています…ガンダムはさすがに自宅の庭に置けないので、しばらく置かして欲しいそうです…」

「そ…そうなの……さすがなのはちゃんね…専用の巨大ロボットを持ってたんだ……」

忍さんはゴツイガンダムを見て、呆れたように感想を洩らした。
未来の義姉としては、妹が何処を目指しているのか少し心配になった。

「ロボットでは無く、モビルファイターと言っそうです……」

「モビルファイター……」

あくまで冷静なメイド長の説明を聞く忍さんの目が、キラーンと怪しく光る。どうやら技術者魂に火が灯ったようであった。

つづく

第24話 師匠いい事を言ってみるの巻（後書き）

次回で無印編は終了となります。

今回で終わらそうと思いましたが、長くなったので次回という事で。

嘘次回予告なのは風で。

遂に終焉を迎えた事件、そして訪れる結末と別れの時、だが一つの終わりは何時も必ず、新たな何かの始まりに繋がるのだ！万が一無かったと思ったなら自分で始めれば良いだけの事よ！！

次回、魔闘少女リリカルマスターなのは無印編最終回。

『師匠赤く燃える東方に照らされみるの巻』に、レディイイツ、ゴオオウウツ！！

第25話 師匠赤く燃える東方に照らされてみるの巻（前書き）

それは…平凡な小学3年生だった筈の儂、高町なのはに訪れた小さな事件…

信じたのは不屈の魂。手にしたのは魔法の力なり！

やった事は、小さな願いをともかく届かせる事！

旅立ちの始まりは、何時も悲しいかもしれぬ…だが拳で分かり合えたのならば、別れの言葉は新たな闘いの始まりの言葉になるであらう！

魔導師ファイト、レディイイツ、ゴオオウウツ！！

第25話 師匠赤く燃える東方に照らされてみるの巻

それはかつての親子同士の、美しくも哀しい闘いであつた…

儂こと高町なのはの目前で、『ファイト・デストラップ』と、彼にジュエルシードを集めさせていた黒幕、父『ヴラッディア・デストラップ』が対峙していた。

ヴラッディアは天を突くような巨漢で、筋骨隆々の恐るべき魔導師である。

ユーノが言うには、確実にSSランクの力を持っているらしい。

何故このような事になったのか？

ファイトは、父親であるヴラッディアの真の目的を知り、更に儂との拳での語り合いにより目覚め、遂に父親に刃向かう事を決意したのである。

父の目的は、ジュエルシードで次元震を起こしてアルハザードに渡り、禁断の秘術で亡くなった妻、ファイトの母親を甦らせる事であつた。

妻の面影を求めるあまり、息子を色々改造し女装までさせたのである。痛ましい事だ。

ちなみに儂の友人が、ファイトの母上の幼き頃に瓜二つだった為モデルとしたらしい。

儂とユーノが見守る中激怒したファイトと、ヴラッディアとの最後の闘いが始まった。

狂気に包まれた父親は、怒りの形相でファイトを指差し、

「親に刃向かおうというのか！？この馬鹿息子があつー！」

「うるさあいつー！アンタとはもう親でも無ければ子でも無い！俺はアンタのオモチャじゃないんだ！俺はアンタを倒すー！」

ファイトは負けじと父親に向かって怒鳴った。色々と腹に据えかねていたのだろう。

「聞き分けの無い馬鹿息子があー！ならば駄^めの一字を持って思い知らせてくれる！魔導師ファイト、レディイ……！」

「ゴオオウウツー！」

2人は雄叫びを上げてぶつかり合った。拳と拳が交差し、魔法が唸りを上げた。

父子の激闘は凄まじいものであった。一進一退の攻防が続く。しかしファイトは徐々に押されつつあった。

SSクラスの力に加え、凄まじき父の執念。遂に追い詰められたファイトに、ヴラッディアの止めの一撃が振り下ろされようとした時だった。

「うおっ？貴様は！？」

ヴラッディアは驚愕していた。何と覆面をした少女が、彼を後ろから羽交い締めに使っていたのだ。

「久し振りだな父さん！！」

「貴様はアルティメット！？生きていたのか！？」

何と覆面少女の正体は、死んだと聞かされていたファイトの兄、アルティメットであった。

儂が聞いたところに拠ると、ファイトより先に改造を受けたアルティメットは、手術に失敗し死んだ筈だった。

しかし執念で蘇り、陰ながらファイトを助けていたようである。兄の愛の深さ故であろう。

「さあファイトよ！私ごと親父を撃てええつつ！！」

「そんな事出来ないよ兄さああんっ！！」

泣き言を抜かすファイトを叱咤するように、アルティメットは叫ぶ。

「やるんだファイト！父親の罪は、我ら息子が着けるしかない！！私の命は残り少ない！やるんだファイトオオオッ！！」

驚愕の事実。アルティメットは手術の失敗で、そう長くは生きられなかったのだ。

涙ながらに叫ぶ兄の必死の叫びに、ファイトは覚悟を決めてデバイスを構えた。その両目からは兄と同じく熱い涙が流れ落ちる。

「兄さああああんつつっ！！」

「止めるおっ！ファイト貴様、実の父と兄をその手で殺めるつもりかああっ！？」

見苦しく足掻くヴラドに、ファイトが放った最期の一撃は、兄ご

とブラドを貫いた。

「私の夢がああああああああっ！！」

世にもおぞましい断末魔を上げてブラドは崩れ落ち、アルティメットは微笑んで逝った。

その時2人の戦闘と次元震で、部屋の床が一気に崩れ落ちた。父も兄も虚数空間へと墜ちて行く。

ファイトは、墜ちそうになっていた儂とユーノを庇い、父と兄の後を追うように虚数空間へと墜ちて行った。

後には残されたジュエルシードが宙に浮いている以外に、何一つ残ってはいなかった。全ては虚数空間へと消え去ってしまった。

これが父親の妄執に振りまわされ果てた、哀れな少年達の最期であつた。

儂こと高町なのは、少年の最期に心打たれ黙祷を捧げた。

報告書 No. 104281

作成者・第97管理外世界在住・民間協力者 高町なのは

「……………」

クロノはどこから突っ込めばいいか解らない報告書を読んで、顔を思いつ切り引きつらせた。

次元航行船アースラのミーティング・ルームである。

席に座るクロノの前には相変わらず偉そうなのはと、困ったように苦笑いを浮かべるユーノの姿があった。

あれからアースラに戻ったクロノは、怪我こそかすり傷だったものの、体力と魔力の限界を超えぶっ倒れてしまった。

死んだように一晩眠り続けたクロノは、フラフラながらもようやく起き出し、今し方なのはが提出した報告書を読み終わったところである。

その内容に猛烈に頭が痛くなった。頭を抱えるクロノを見て、なのは不思議そうに、

「どうかしたかクロノよ…頭でも痛むのか…？まだ疲れが抜けておらぬようだな…」

本気で言っている。この報告書はもちろんねつ造ではあるが、なのはふざけて書いた訳では無い。彼女なりに真面目に考えたものである。

最もGガン世界の真面目であるのが最大の問題なのだが…

ユーノはひたすらバレないように愛想笑いを浮かべて誤魔化すしか無い。

クロノは報告書から顔を上げて、なのはをジト目で見つめ、

「…なのは君…これは…その…本当なのかい…？」

「ふっふっふ…驚くのも無理は無からう…信じられんのも無理は無からう！だがこれは事実だ！この高町なのはが見たままの事実よおっ！…哀れな少年の命を賭けた闘いの記録だ！心するが良い！！」

なのはは自信満々で言い切った。問答無用である。その異様なまでの勢いに吞まれたクロノは目を白黒させて、

「はあ……」

と言うしか無かった。無理矢理押し切られた形である。

クロノはため息を吐くと改めて報告書を見て、これを上層部に信

じさせなくてはならないのか…と思うと、胃が痛くなるのだった。

さて…今回の事件に多大なる迷…貢献をしたという事で、なのはとユーノに感謝状が送られる事になった。

考えてみれば、なのはは今回単に好き勝手に暴れまわり、管理局を利用しただけなのでユーノはとっても申し訳ない気持ちになった。

一方のなのはは、まったく気にした様子は無く、澄まし顔でリンディ提督から感謝状を受け取るのであった。

なのはとユーノはリンディさんに誘われ、アースラの食堂で食事を ご馳走になっていた。

なのはは行儀良くテキパキと食事を採っているが、良く見ると既に数人分の量を平然と平らげている。

リンディさんは、その見事な食べっぷりを微笑ましく眺めながら、

「次元震の余波はもう直ぐ収まるわ、此処からなのはさん達の世界になら、明日には戻れると思う」

「左様ですか…リンディ殿…助かります」

なのはは食後のお茶をゆったりと味わいながらお礼を言う。リンディさんは、隣でまだ食べているユーノに、

「ただ…ミッドチルダ方面の航路は空間が安定しないの…しばらく時間が掛かるみたい…」

「そうですね…」

ユーノは困ったように表情を曇らせた。つまり彼は、元の世界にしばらく帰れないという事である。

空間が安定するまで場合によっては、数ヶ月から半年掛かる場合もあるらしい。

「まあ…その…ウチの部族は遺跡を探して流浪している人ばかりですから、急いで帰る必要も無いと言ったら無いんですが…」

なかなかスクライアもフリーダムな一族のようである。

しかしアースラにずっとお世話になる訳にもいかない。どうしようかと唸るユーノなのはは笑みを浮かべ、

「心配するな、ならば家に居れば良い、今まで通り！」

「なのはいいの？」

申し訳なさそうなユーノに、なののは豪快？に笑い、

「ぬわっはっはっ！何を遠慮しておるか、好きなだけ家に居れば良い！この高町なのはが許す！」

とまだ扶養家族のクセに偉そうに断言した。

「じゃあ…その…お世話になります…」

照れくさいながらもユーノは頭を下げた。

常識が無いとか、理不尽だとか色々問題は有るが、何だかんだ言っても根はいい人だと、ユーノは思った。

「うむ…」

頷くなのはに感謝しながら、ユーノは食事に戻ろうとトレイに向

き直ると…

「くくくくくくのくくくくくく（クックツ…たっぷり可愛が
ってあげるなの）」

「げえっ!？」

ユーノは思わず変な声を上げてしまった。何時の間にか7人のミ
ニなのは達が、ユーノの食事を貪り食っている。

そしてニヤリと全員で、ユーノに向かって悪い笑みを浮かべた。

「あら可愛いわね、なのはさんの使い魔？これ食べる？」

ツボに入ったらしいリンディさんは、ハムスターに餌をあげるよ
うに、ミニ達にご飯を食べさせている。

相変わらず世渡りが上手いミニ達だが、ユーノは顔を青ざめさ
せ、

（しまったああっ！コイツらの事をすっかり忘れてた！！）

と己の迂闊さを呪うのであった。

そして次の日、なのはとユーノはリンディさんとクロノ、エイミに見送られ転移ポートに居た。

「それじゃ、今回は本当にありがとう」

「きょ…協力に感謝します…」

名残惜しそうなリンディさんと、若干複雑な表情のクロノの感謝の言葉になのはは会釈し、

「うむ…クロノも良く闘い抜いた…これから精進するのだぞ」

相変わらず偉そうだが、彼女なりに誉めているようである。

「なのはさん何時でも遊びに来てね。次に会う時までにはせめて、煎茶を砂糖無しで飲めるようになるから」

「うむ、リンディ殿の健闘を祈っておる！それではクロノ、エイミ

「イよ、また逢おうぞ！」

なのはの挨拶が終わると同時に、2人は光に包まれ消えた。
なのは達を見送った後クロノは深々とため息を吐く。

（ともかく疲れる子だったなあ…もう逢う事も無いだろう…）

そう思うクロノだが、半年後再び人外少女達と関わる羽目になる
のを、まだ知る由も無い。

あれから1週間が過ぎていた。ドタバタも落ち着き、プレシアも
完全に回復していた。

そろそろ住む所や、色々と準備をしようかというところである。

そんなある日の早朝。まだ陽は昇っておらず、微かに東の空が明
るくらいで、辺りはまだ薄暗い時間帯である。

その薄闇の中を、街を見下ろす高台に在る展望台目指して、急な
崖を物凄いスピードで駆け上がる、小さな人影があった。

その身のこなしは、重力何それ美味しいの？状態である。

「はあああああああつ！！」

「わあああつ！？落ちる！落ちるうつつ！！」

「ぬわっはっはっ！ユーノよ振り落とされるでないぞ！！」

早朝トレーニング中のなのはと、フェレット姿で必死に彼女の肩にしがみついているユーノであった。

なのはは朝っぱらから、相変わらず無駄にテンションが高い。今日も全力全開である。

あつという間に天辺の小さな桜台展望台に着いたなのはは、深く深呼吸をし朝の澄んだ大気を味わった。

地面に降りたユーノは、冷や汗をかきながらもやれやれとため息を吐く。

そんな中数人の草を踏む足音が、静かな展望台に響いた。

「お主らか…」

なのはは意外そうに声を掛ける。朝もやの中から近付いて来るのは、フェイトにシュバルツ、少女の姿のアルフであった。

赤い朝日が昇る中、なのはとフェイトは無言で向かい合っていた。ユーノ達3人は、少し離れた場所で2人を見守っている。

「こんな朝早くどうしたんだい？」

ユーノは隣で腕組みしているシュバルツに小声で聞いてみた。

「フツ…フェイトなりに心を決めたという事だ…」

覆面ちびっ子は相変わらず、何もかも判っていると言つ風に目を閉じる。

「まあ…アタシはフェイトに着いて行くだけなんだけどね…あははは…」

アルフは乾いた笑いを上げた。明後日の方向に行こうとしている
主の行く末が不安らしい。

まあ3人のそれぞれの想いは置いといて…なのは腕組みをして、
静かに赤く燃える東方の太陽にその身を照らされながら、

「フェイトよ…用というのは何だ…？」

フェイトは照れたように、もじもじしていたが意を決して顔を
上げ、

「返事をする為です…」

「む…？」

きよとんとするなのはに、フェイトはしっかりと偉そうな少女の
目を見て、

「あなたが言ってくれた言葉…師匠になりたいって…」

「ほお…」

なのは意外そうな顔をする。向こうから言い出すとは思っていなかったようだ。フェイトは拳を握り締め、

「私に出来るなら…私でいいならって…あなたみたいに強くなりたい…拳で自分を表現出来る強い武闘家になりたいって……」

しかしそこで少女は、自信無さげに俯いて視線を落とした。

「だけど私…どうしたらいいか解らないんです…だから教えて欲しいんです…どうしたら弟子になれるのか…」

本当に解らないのだろう。静かなので離れた場所のユーノ達にも2人の会話が聞こえて来た。

そりゃそうだろ…とユーノは思う。普通は知りません。

なのははドモンに倒される寸前の時のような、温かな笑みを浮かべ、

「簡単な事だ…至極簡単な事よ…」

顔を上げるフェイトに、なのははクワツとばかりに大きな目を開き、

「師匠と呼ばばよい！力の限り叫べば良い！儂は流派東方不敗、高町なのは！！」

フェイトは少し迷っていたが、照れたように一言。

「師匠……」

「声が小さいっっ！！」

なのはの腰くだけ気味の可愛らしい声の駄目出しに、フェイトは拳を握り締めると、顔を真っ赤にして、

「師匠っ！！」

「まだまだあっ！！」

「師匠おおおおっ！！」

フェイトは力の限り、近所迷惑なくらいの勢いで叫んだ。
ユーノはこの流派は、師匠をテンション高く呼ばなければなら
ない決まりでも有るのか？と思うが、ドモンを見る限りそうらしい。

「それで良い…」

なのはは満足げに笑みを浮かべ、フェイトの目前にグイッと拳を突き出した。

「これより、フェイト・テストロッサを我が『流派東方不敗』に、正式な弟子として迎え入れる！」

拳を打ち合わせながら、儂の言う通りに続けるのだ！

儂もまだまだ未熟の身、共に切磋琢磨し遥かな高みを目指そうぞ！

「！」

「はいっ、師匠っ！」

一通り手順を聞いたフェイトは、同い年の師匠に合わせて拳を突き出した。なのはは叫ぶ。

「応えろフェイトオツ！流派東方不敗は！？」

「お、王者の風よ！」

フェイトは打ち出されたなのはの拳に、自らの想いを込めるように拳をぶつけて行く。なのははそれに合わせ、ゆっくりと拳を繰り出す。

「全新！」

「系列！」

「天破侠乱！！！」

慣れて来たのか、フェイトの拳の速度が上がって来た。それに合わせ、なのはの拳の速度も上がって行く。

「見よ！東方は赤く燃えているうつつうつつ！！！」

最後の拳がガッチリと打ち合わされた。

（な…何か、2人の背後に燃え盛る炎が…？）

ユーノがまた幻覚が見えるなと目を擦った時、フェイトの体がバビュンツと宙に舞った。

「しまった？力を入れ過ぎた！？」

なのはは慌てて駆け出した。つつい嬉しさのあまり、力が入り過ぎてしまったらしい。

フェイトはきりもみ回転で、空に綺麗な放物線を描いて吹っ飛びながら、

「ありがとうございます！師匠おおおおおおお……！！」

と叫んで鼻血を噴きながら、彼女は至福の表情であった。

「フェイトオオオオオオオツ！？」

アルフも慌てて駆け出した。シュバルツは満足げ吹っ飛ぶフェイトを見上げ、

「ナイスガッツだぞフェイト！」

と手遅れの妹の成長を喜ぶのである。ユーノは朝日に照らされる、なのは達を見て、

「駄目だこりゃあ……」

誰とも知らない人達に視線を向け、肩を竦めるのであった。

こうしていずれ『東方不敗・高町なのは』と呼ばれる事となる少女は、フェイト・テストロッサを3番目の弟子として向かい入れたのである。

この恐るべき師弟はこれから、どのような闘いを繰り広げるのでありましょうか？

魔闘少女リリカルマスターなのは、無印編閉幕であります。

つづく

第25話 師匠赤く燃える東方に照らされてみるの巻（後書き）

おまけ

吹っ飛ばされたフェイトは、あの後しばらく飛んで戻って来ました。

鼻血を垂らしたままのフェイトを見て、なのはは三つ編みを結わえていたリボンを解き、鼻血を拭ってやります。

フェイトは申し訳なさそうに鼻血をリボンで押さえ、

「洗って返…いえ、記念にこのリボンを下さい！必ずこれを師匠のように扱ってみせます！」

「ふっ…良い覚悟だ…」

微笑むなのはにフェイトはふと思い付いて、ツインテールに髪を結わえていた自分のリボンを外し、

「代わりと言っては何ですが…これを…」

二本の黒いリボンを差し出した。

「うむ…貰っておこう…しかし二つは多いな…」

なのはは何時も一つしかリボンを使っていない。苦笑するのはフェイトは、

「それならこうすればいいんです、ちょっといいですか…？」

「構わぬが…?」

師匠の了解を貰ったフェイトは、なのはの後ろに回ると、髪をちょちょいと結んでやる。

「どうでしょう…?」

ツインテールに髪を結ばれたなのはは、原作と同じ髪型になっておりました。

それを見たユーノは、不覚にもどきまぎしてしまったのでしたとさ。

完

考えてみると、普段のなのはは三つ編みリボンなので、美由希姉さんと髪型一緒ですね。

無印編終了しました。ここまで付き合って下さりありがとうございます。

幕間話をいくらかやってからA・S編に入る予定ですので、これからも読んで頂ければ嬉しいです。

それでは魔闘少女リリカルマスターなのは幕間編に、レディイイツ、ゴオオウウツ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3556p/>

魔闘少女リリカルマスターなのは

2011年10月4日22時54分発行